を豫想して敎へたるものなり。

實例

之を基督に見るに、基督の如く正義の爲に迫害を受けたる者はなし、ソクラテスも正義の爲に時人に容れられず、孔子も道の爲に苦められたる事は、人の能く知る所なれども、基督の如く甚しく迫害せられたる者にあらず、基督は生るゝや殘逆無道の暴君ヘロデスの爲に殺されんとして、エジプトに避難し、世に出でゝ道を說き、道を布くや、有らゆる罵詈讒謗の雨を浴せかけられ、最後に惡人の手に捕はれ、アンナ、カイファスの館邸へ引き廻はされたる揚句の果に、カルワリオ山上に於て、十字架に釘せられて死するに至り、その受難の慘憺たることは、實に言語に絕す、正義の爲に迫害を忍受する者は福なりとは、基督にあらざれば言ふ能はざる言なり。

報賞

報賞――天國は其の所有なりと云ふ、世の王國は强者の權利によりて獲取せらるれども、天の王國は弱者の報賞として與へらる、負けるが勝ちとは此の謂なり、天の攝理によりて弱者却て勝利を占むるに至るものなり、玆に弱者と云ふと雖實は眞の勇者にして、表面上弱者と見ゆるのみ、人にせめられ、人に苦められ、人にな

やまされ、人に壓屈せらるゝところ、如何にも弱き者のやうなれども、其の心は義の爲に萬事を忍ぶ力を有するが故に、鐵石の如く堅く、所謂威武も屈する能はざる者なり。

基督は尙此の眞福の道理を確證するが爲に、『我が爲に人なんぢらを詬辱、また迫害いつはりて各種の惡言をいはん、その時爾等は福なり、(基督敎者が耶蘇々々と世間の人々に詬辱られ、伴天蓮が魔法を行ふとか、又は耶蘇敎徒は愛國心なしとか、いつはりて各種の惡言をいはるゝ光景、眼前に見るが如し、)喜び樂め、天に於てなんぢらの報賞おほければなり、そは爾等より前の預言者をも如此せめたりき、(預言者エレミアスの苦刑に逢ひ、預言者イザイアスの鋸刑に處せられたる等の事跡を言ふ。)』

眞福八端を解釋すれば、大要此の如し、尙基督の他の敎訓をも一々此の如く解釋するを得べけれども、紙數に限りあり、且傳記との釣合もあれば、今は山上の垂訓中最も有名なる眞福八端の解釋のみにて擱筆せん、但だ基督が神に祈る方法を敎ふるが爲に、自ら祈禱文を作りて門弟に授けたるは、吾人の大に注目すべき所

にして、基督教會にては『主禱文』として、毎日之を讀誦し、救主御製の祈禱文として珍重措かざるが故に、之に就きて少しく解說を加へんとす。

主禱文は最良の經文

(日)主禱文略解　世には種々の經文あれども、基督の祈禱文所謂主禱文に優れるものは一つもなし、主禱文は完全圓滿なる祈禱文なり、何となれば若し吾等の禱(いのり)法(かた)にして正(たゞ)しくして且つ宜しに適ふとすれば、此の祈禱文以外には殆ど何事をも祈ること叶はぬものなり。

主禱文の神學的解說

如何にも主禱文には願ふて正しき所のものは悉く含まれて、願ふ可き順序までも井然として一絲亂れず、尙此の祈禱文は啻に祈ることを敎ふるのみに止まらず、吾等の一切の心情(こゝろ)を矯正する效力あり。

その故如何と云ふに、抑も祈禱には三ッの要件あり、信任を以て祈り得らるゝ充分の理由、正當なる事柄の請願、必要缺く可からざる物の順序即ち是なり。

然るに主禱文には先づ第一吾等の充分信賴して祈り得る充分の理由を冒頭に掲ぐ、即ち『天に在ます吾等の父よ』と云ふ言葉は、吾人に無限の信賴を起さしむるものなり、『父よ』とは如何に慈悲深く、恩愛深き語なるよ、『吾等の』とて、神を吾等の父と呼ばしむるは、如何に親み易く近づき易からしむるよ、『天に在ます』とは、如何に吾等の祈願を聽屆くる權能を示す語なるよ、世には閭巷の細民が一天萬乘の君を『吾等の父』と呼ぶことさへ得叶はざるに、今は下界の人間にして、天上萬能の神を『吾等の父』と呼ぶことを得るは、何等の光榮ぞ。

次に吾等の願ふ可き正當なる事柄は、吾人の救拯(たすかり)の目的となり、方法となる可きものなりとす、然るに吾人の目的となるべきものは神其者に外ならずして、吾人の一切の心情は神に歸向せしむべきものなり、而してその歸向せしむる方法に二樣あり、一は『神其者の爲』に歸向せしむるものにして、即ち神の光榮を發揚する事なり、故に主禱文には先づ第一の祈願として『御名の尊まれんことを』と云ふ、即ち是れ世界萬民皆神の御名を最と聖きものと思ひ、その榮光の宇內に輝かんことを祈るものなり、二は吾人の心情を『神の幸福を樂まんが爲』に歸向せしむる事なり、故に主禱文には第二の祈願として『御國の格らんことを』と云ふ、即ち是れ神の御國の幸福を吾等の身にも近けて、神と共に樂まんことを祈るものなり。

然り而して此の幸福と光榮を求むる『方法』にも亦二種の別あり、一は直接の方法、

積極の方法にして、二は間接の方法、消極の方法是なり。

直接方法若くは積極方法にも主動的と器械的の二ッあり、神の光榮と吾等の幸福を求むる主動的方法は、吾等の意志が、何時(いつ)も又如何なる處にても神の聖意に適合する事なり、故に主禱文には第三の祈願として『聖旨の天に行はるゝ如く地にも行はれんことを』と云ふ、器械的方法とは、神の光榮を揚げ且之を享けんが爲の資料(たすけ)となるものを云ふ、故に主禱文には第四の祈願として『吾等の日用の糧を今日吾等に與へ給へ』と云ふ、糧と云ふは、精神上の糧を主とし、即ち神の恩寵を意味するものなり、形體上の糧としては吾人日常の食とするパン又は米を示すものなれども、此語は凡て吾人の形體を支持する一切のもの、即ち衣食住をも間接に包含するものなり。

『日用の』と云ふは神の恩寵とパン又は米の飯は日々吾人の心身に有用なりとの意なり、『今日吾等に與へ給へ』とは、日用の糧を『目下の急』の爲に祈るものにして、暗に飽食暖衣、逸居して暮すを戒むるの意を寓す。

間接方法若くは消極方法とは、神の光榮を揚げ且之を享有するを妨ぐる障碍を避くる方法を指すものにして、此の障碍には三種の別あり、二種は精神の方面に於けるもの、一種は肉身の方面に於けるものなり、精神の方面に於ける第一の障碍は現在の罪障、即ち直接吾等の意志の神の聖旨に適合するを妨ぐるものを取除く事なり、故に第五の祈願として『吾等の罪を赦し給へ』と云ふ、如何なる程度まで救されんことを祈るかと云ふに、『吾等が人に赦すが如く』と云ふ言葉にて、その程度を示すなり、第二の障碍も亦精神の方面より將來の罪を豫防する事即ち神の聖旨を奉戴する妨となるべきものを避くる事なり、故に第六の祈願として『吾等を誘試に引き給はざれ』と云ふ、是れは吾等が誘試に逢はざるを祈るにあらずして、誘試に負けざるを祈るなり、誘試に引かるゝとは、誘試に敗を取るの義なり、肉身の方面に於ける障碍は過失、失墜、冒瀆等の原因ともなり機會ともなる惡より免除せられんことを祈るものなり、故に第七の祈願として『吾等を惡より給へ』と云ふ。

前三段の祈願は來世に至りて初めて全く遂げられ、後四段の祈願は現下の急に關するものなり。

主禱文の通俗的解說

右は多少神學的解釋なれども、尙通俗的に一と通りの意味を解剖すれば、神を『父』と謂ふは、神は吾等を造り、洗禮に因りて吾等をその愛子となすが爲なり、『天に在ます』と云ふは、神は何處にも在ますと雖、天に於て特にその榮を顯はし、且天は吾等に永遠の幸福を與へんとする所なるが故なり、『我が父』と云はずして、『我等の父』と云ふは、神は凡ての人々の父なれば、人々は兄弟の如く相互の爲に祈らざるべからずと示さんが爲なり、『御名の尊まれんことを』とは、神の御名の冒瀆せられずして、普く世に知られ且崇められんことを祈るの義なり、『御國の格らんことを』とは、神の恩寵益々吾等の心魂に降らんこと、神の統治す敎會の益々隆盛に赴かんこと、尙普天の下、率土の濱に至るまで天國の福樂を蒙らぬものなきに至らんことを祈るの義なり、『聖旨の天に行はるゝ如く、地にも行はれんことを』とは、在天の天使及び聖者が神の思召に從ひつゝある如く、此世の人々も皆神の思召に從ふに至らんことを願ふの意味なり、『吾等の日用の糧を今日吾等に與へ給へ』とは、吾等の靈魂と肉體との爲に必要なるものを日々神より與へられんことを願ふの意味なり、『吾等が人に免す如く、吾等の罪を免し給へ』とは、吾等に對して過失あるものを免す如く、神より吾等の罪をも免されんことを願ふの意味なり、『吾等を誘試に引き給はざれ』とは、吾等を一切の誘惑より遁れしめ、且之に堪ゆるの合力を下し給はんことを願ふの意味なり、『吾等を惡より援ひ給へ』とは、人生一切の惡即ち禍災と罪惡と地獄とを免かれんことを祈るの義なり、『アーメン』とは斯くあれかしとの義なり。

此の祈禱は言辭甚だ簡短なれども、意義極めて深長なり、先づ神を讃美せしめ、次に吾人の必要の物を祈求せしめ、尙誘惑罪惡より免るゝことを祈願せしむる所、簡にして意盡せり、冗漫なる文句を繰返して祈らんより、此の數語を以て祈るの優れるに如かず、此の祈禱は實に模範的祈禱文と云ふべし、基督の口より出づるもの、往々此の如し。

(14)基督の奇蹟

基督は公生涯に入りてより無數の奇蹟を行ひ、徒らに言論を以てせんよりは、寧ろ仕業を以て、默々の裡に己の天より遣はされたる救世主なることを證明せんとせり、奇蹟は今日の學者多く之を信ぜざれども、それは本記事の終に論ずるこ

とゝして、茲には先づ歴史的事蹟として、有りの儘之を記さんとす。

カナの奇蹟

(A)カナの奇蹟　ガリレアの國にカナと云へる地あり、此町に祝言ありしとき、基督の母マリア及び門弟と共に招待せられて出席しけるに、祝言の最中に酒盡きければ、母マリアは酒盡きたる旨基督に告げ、暗に奇蹟を行はんこれを心待ちに待ちけるに、基督は我時未だ到らずとて、之をしりぞけしも、マリアは僕等に命じて何事も基督の命ずるが儘に從ふべしと言置きぬ、然るに茲に席の邊に石瓶六箇ありて、各瓶二三斗ほどの水を容るゝに足れり、これはユデア人が身を潔むる爲に備へ置ける器なりしが、基督は僕等に命じて此の石瓶になみ〳〵と水を滿たさしめて後、之を汲みとりて司筵者に付さしめしに、不思議にもその水は變じて美酒となりけりと云ふ、これは基督が初めて行ひたる奇蹟にして、その母マリアの願に應じて行ひたるものなり。

漁獲の奇蹟

(B)漁獲の奇蹟　或日基督ゼネザレット湖一名ガリレア海の濱に立ちしに、人々夥多走せ來りて、四邊を取圍み、基督に道を聽かんとせしかば、基督はシモン、ペートルスの舟に乘り、水涯を離れて道を說きぬ、終りて後シモンに命じ沖に進み出で

て網をおろし魚を漁れと宣ひしに、シモンは終夜漁業に從業したれども、一尾をも得ざりし由を語りしが、貴命なれば尙一應網をおろして見んとて、復び網をおろしたるに、不思議にも今回は大漁にて網裂くるばかりなりしかば、他の漁舟に在りしヨアンネスと其の兄ヤコブスとを招ぎ來りて、助けしめしに、魚類二艘の舟に充ち溢れて、舟も沈まんばかりなりしかば、シモン、ペートルスは基督を不思議なる人と思ひ、驚きてその足下に平伏し、我は罪人なれば我を離れ給へかしと云へば、基督は恐るゝことなかれ、我に從へ、我れ汝等をして人を漁る者と爲さんと宣ひぬ、彼等は之を聞き舟を岸に寄するや、網をも舟をも打捨てゝ、直に基督に從ひ、昨日まで魚を漁りし人、今日は忽ち變じて人を漁る人となれり。

シモンは初め其兄アンドレアスに導かれて基督の許に到り、その時ペートルスの名を受け、ヨアンネスとヤコブスの二人の兄弟は、尙其後に基督より召されて門弟となりたれども、孰れも漁業を以て生計を營みたることゝて、屢々歸宅しては漁舟を漕ぎたるものと見ゆ、終夜漁業に從事すと云ふを見れば、晝は基督に就て道を聽き、夜は歸りて漁業に從事したるものらし、然るに今此の不思議なる大

漁を見て、網をも舟をも所持の物をも一切打捨てゝ、是より終焉基督に從ふことに決しぬ。

奇異の漁獲は教會の表象

今茲に此の奇異なる漁獲を考ふるに、基督教會の歴史の珍らしく表象せらるゝを見るべし、基督はペートルスの舟に乘りて、人民に道を説けり、これ基督がペートルスの後繼者羅馬教皇を以て世界の民に教を布かんとするの前兆にあらずや、基督はペートルスの舟に乘りて沖に進みでぬ、此の海は浮世の海なり、深き海なり、荒れ果てたる海なり、人波の立てる海なり、然るに基督はペートルスを大磐石となして、其上に座し、ペートルスをして世界萬民を漁らしめて、其道に歸依せしむ、而して大漁にて魚類舟に充ち溢るゝは、基督教に歸依する民の多きを意味するにあらずして何ぞや、此の如く考察し來れば、基督の奇蹟には一々深遠なる意味あり。

カフアルナオムの奇蹟

(C)カフアルナオムの奇蹟　基督ナザレットよりカフアルナオムに至り、會堂に入りて教を説きしに、聽衆孰れも皆其教の謹嚴なるに感服せざる者なし、基督の威嚴ある言葉は、聽衆の心魂に徹したり、時に聽衆の中に魔に憑れたる者あり、大聲にて叫び、噫ナザレットのイエズスよ、汝と吾等と何の關係あるや、汝は吾等を亡さんが爲に來れるや、我は汝の何者なるかを知る、即ち神の聖者なりと曰ひければ、基督は權威を以て嚴しく叱責し、『默れ、此者を出で去れ』との言の下に、魔は忽ち其人を仆して出で去りぬ、居合せたる人々之を見て大に驚き、互に顏見合せて語り合ひ、魔すら其命に從ふと言へり。

ペートルスの岳母を醫す

斯くて基督は會堂を出で、ヤコブス、ヨアンネス及びペートルスと偕にアンドレアスの家に至りしに、折しもペートルスの姑重患に掛りて病床に呻吟しければ、基督は二人の門徒の請に應じ、病人の傍に近寄り、手を執りて立たしめしに、不思議にも其病立ろに癒え、直に起つて基督及びその門徒に饗應したりとて、村の人々之を聞きて黄昏より病める者、魔に憑れたる者を多く携へ來りて、門前に群りたるに、基督は往々一言の下に病を癒し、魔を驅逐せり、魔の出づるや、汝は基督なり、神の子なりと叫びたれども、基督は之を禁じて基督たりと言ふを口止めしたり、こは魔は虚僞の父なれば、基督は之を以て己の救世主なるを證せしむるを好まざりしに因るなり。

中風患者を醫す

數日を經て基督は再びカファルナオムに至り、或家(多分ペートルスの家ならん)に入りて道を講せしに、之を聽問せんとて夥多の群衆四方より集ひ來り、門に入ると能はざる程多かりき、時に四人の者一人の中風患者を吊臺に乘せて舁き來りしが、餘りの人込にて基督に咫尺すること叶はざりき、然るにユデア國の風として家屋の上は平坦にして、外に梯子のかけありしかば、此所に登りて瓦をはぎ、穴を開け、吊臺に患者を乘せたる儘之を吊下して、基督の面前に置きたり、基督は其の信仰の厚きを見て、子よ、汝の罪を赦すと曰ひければ、法學者とファリゼイの徒之を見て心に以爲らく、此の如く冒瀆の言を吐くは何者ぞ、神より外に誰か人の罪を赦すことを得んやと、基督は彼等の思念を看破して曰く、汝等何故心中に惡念を抱くや、罪を赦すと曰ふと、病を癒すと曰ふと、何れか易き、それ人の子は此世に於て人の罪を赦す權あることを汝等に知らしめんが爲に、我は中風患者に向ひ、起ちて汝の吊臺を携へ、家に歸れと曰はんと、其言の下に不思議にも彼の患者は忽ち腰起ちて、自ら臥し來れる臺を携へて、家に歸りつゝ、神の異能を稱讃せしかば、群衆も之を見て、驚愕の念に襲はれ、此の如き權能を人に賜りしことを神に謝しつ

百夫長の僕を醫す

つ、我等は今日未曾有の不思議を目擊したりと言へり。

これもカファルナオムに於て行はれたる奇蹟なるが、基督の同市に入りしとき、或百夫長に一人の僕あり、病に罹りて將に死に瀕せり、百夫長は豫て基督につきての評判を聞き居りしことゝて、早速ユデア人等を基督の許に遣はし、その鍾愛せる僕を癒されんことを請はしむ、斯くてユデア人等は百夫長のもとめに應じて、基督の許に來り、百夫長の好人物にして、深くユデアの國を愛し、ユデア人の爲に會堂をも建築し、吳れたる人なりとて、盛んに其德をほめつゝ、基督に其願を聽屆くるに足るべき人物なる由を告げしかば、基督はさらば往きてその僕を痊さんとて、遣はされたるユデア人等と共に、百夫長の家に往けり、然るに未だ其家に到らざるに先ち、百夫長は己の友なる人々を遣はし主よ、わざ〳〵御來臨を煩はすは恐多き事なり、我は主を我家に迎ふるに足らぬ者なれば、我自らも故さら遠慮して來り請ふことを差控へたる次第なり、仰ぎ願くば只一言を賜はらば、吾僕の病痊えなん、蓋し我は屬官なれども、我が配下にも亦兵卒ありて、我は彼等に向ひ、往けと言へば、往き、來れと命ずれば、來り、又我僕に命じて、之を爲せと言へば、則ち爲

すの習なればなりと曰へば、基督は之を聽きて深く感じ、隨伴の人々に向ひて宣はく、我れ誠に汝等に告ぐ、イスラエルの中にも此の如く信仰篤き者を見ず、故に我は汝等に言明す、多くの人々東西より來りて天國に入るべけれども、國の諸子は却て冥府に投せられて、涙に暮れ、齒をくひしばるならんと、斯くて基督は百夫長に向ひ、往かれよ、御身の信ぜし如く行はるべしと宣ふと同時に、其僕は全治せしかば、遣はされたる人々家に歸りて、病人の健全なる狀態に復せるを見たりとぞ。

ナイムの奇蹟

案ずるに此の百夫長はユデア人にあらで、異邦人なるべく、多分ローマ人ならんと思はる、基督はその信仰の感ずべきを稱讃して、異邦人が天國の道に入り、天の選民たりしユデア人が却て不信仰の爲に滅の道に陷るを預言したるなり。

(D)ナイムの奇蹟　基督ナイムと云へる村に往きけるに、門弟も群衆も隨ひ行けり、村の門に近けるとき、寡婦の獨子死したりとて、今しも葬送のところなりしが、母は太く悲み、涙に咽びつゝ柩の後に歩み、村民も多く會葬せり、基督之を見て同情の念禁じ得ず、泣く勿れとて、手を柩に接すれば、舁者たちとまりぬ、基督曰く、『若者よ、我れ汝に言ふ、起きよ』、死者言に應じて直に座して物言ひはじむ、基督之を其母に與ふれば、衆人之を見て恐怖の念に襲はれつゝ、神を贊して曰く、大なる預言者我等の中に起りぬ、神は其民を眷み給へりと、此奇蹟洽くユデア全國に聞え、延ひて四隣に及べりと云ふ。

ベツサイダの奇蹟

泣く勿れとは、何ぞ同情の深き言なるよ、泣く者は福なり、慰めらるべければなりとの言、茲に驗あり、著者は基督の行へる奇蹟を見る毎に、其の事績の大なるよりは、寧ろ其の同情の深きに感せずんばあらず、基督の奇蹟は多く同情より出でゝ、其の權能を示すよりも、寧ろ其の仁愛を示すもの多きを占む、是れ世の好奇心を滿足せしめんとする似而非奇蹟とは大に趣を異にする所以なり。

(E)ベツサイダの奇蹟　ユデア人の祝日(過越の祝日ならん)來りければ、基督はイエルサレムに上りぬ、然るにイエルサレムの羊門の邊にベツサイダと稱する池あり、此池の周圍には五棟の廻廊ありて、此處に夥多の盲者、蹇者、中風患者等臥して水の動くを待てり、水の動くは、天の使時々此池に天降りて之を動かしたるに因ると云ふ、其時先づ第一に池に下りたる者は、病の如何に拘らず、直に痊えた

三十八年の癲癇を癒す

りとぞ、茲に一人の沈痼に罹れる者ありて、三十八年の久しきを經て尙其の病癒ざりき、基督其の池に臥せるを見て彼れの痼疾の久しきを知り、汝は病の痊えんことを欲するかと曰へば、彼は答ふらく、主よ、水の動くとき、誰も我を扶けて池に下す者なし、我自ら往かんとする間に、他の人我より先きに下るを奈何せんと、基督之に宣はく、起て、臥臺を携て歩めと云ふ、其言の下に彼は立ろに病痊え、臥臺を携へて歩み初めぬ。

然るに此日は安息日なりしかば、ユデア人彼れの臥臺を携へて歸るを見て、今日は安息日なれば、臥臺を携ふること叶はぬ日なりと曰へば、彼は、我を癒せし人、我に臥臺を携へて歩めと言へりと答へしに、ユデア人は爾言ひたる人は誰なかと問ひたれども、彼は基督の既に立ち去りたる後なれば、誰なりしやを知らざりしが、間もなく聖堂に於て再び基督に邂逅けるが、基督之に宣はく、汝既に病癒たれば、此後復た再び罪を犯す勿れ、恐くは尙更に大なる災禍の起らんことをと、彼之を聞きてユデア人の許に奔り行き、我を痊せし者は基督なりと告げしかば、ユデア人は基督が安息日に斯る事を爲したりとて、基督を迫害て殺さんことを謀る、

ユデア人基督の言を聞きて殺意を生ず

基督之に答て曰く、吾父今に至るまで絶えず働けり、我も亦然りと、云ふ意は天父は開闢以來今日に至るまで、安息日と平日とを問はず、間斷なく働きつゝあれば、我も亦此の如く行ふに於て何の不可なることやあるの義にして、汝等は天父の行爲を咎むる權利もなければ、我を咎むる權利もなし、神は天地創造の際七日目に安息したりと云ふは、此日工を竣へて夫より新たに工を起さゞりしと云ふ意味にして、爾後決して働かずと云ふ意味にはあらず、神は全知なる攝理を以て萬物を主宰し、全能なる權能を以て之を支持しつゝ、今も尙、時々刻々行ひつゝあるものなり、即ち日々太陽を出して善人をも惡人をも照さしめ、地上に雨露を降して、一切の草木を生育せしめ、安息日たると平日たるとを問はず、又神は道を以て萬物を創造したるが如く、今も道を以て之を主宰し、之を支持しつゝありとて、暗に基督自らその道なるを知らしめんとしたれども、ユデア人は之をさとらず、却て基督が安息日を破りたるのみならず、尙神を己の父と云ひて、己を神に等しき者となしたりとて、愈よ基督を殺さんことを謀れり、基督は尙も彼等の蒙昧を啓かんと欲して、凡て父の行ふことは、子も亦之を行ひ、父が死者を活かすが如く、子

も亦己が意のまゝに人々を活かし得ることを語りたれども、頑冥なる彼等は之に耳をかさざりき、安息日なれば、人に善を行ふことも叶はぬとは、奇怪なる解釋と謂ふ可し。

湖上の奇蹟

(F)湖上の奇蹟　或日基督湖の對岸に到らんとて舟に乘りけるとき、門弟も之に隨へり、舟は行く〳〵湖上に進み出でたるに、忽ち一天掻き曇りて颶風吹き起り、舟將に沈まんとしけるに、基督はそれをも知らで艫に座して安々と眠れるに、門弟等太く恐怖の念に襲れて、基督に近づきて之を覺して曰く、主よ、吾等を救ひ給へ、吾等颶風の爲に將に沈沒せんとす、基督彼等に宣はく、信仰薄き者よ、何ぞ懼るるやとて、起て風濤に命じたるに、忽ち風收まりて波靜まりぬ、一行之を見て互に語り合ひ、此は如何なる人ぞ、風濤も其命に順ひて鎭靜すと曰へり。

偖愈よ湖水を渡りて對岸に到着せしに、衆人湖畔に立ちて大に喜び、基督を迎ふ、時に會堂の宰にジァイルと云へる人あり、基督の許に來りて、その足下に平伏し、只管請ひて曰く、我に今年とつて十二歲になる娘あり、今は病危篤にして將に死に垂んとす、願くば來りて彼に手を案し給へ、彼必ず活きんと、基督諾ひて彼れの家に往きたるに、門弟を始め衆人も之に隨へり、途中十二年の久しき間、血症に罹れる婦人あり、今迄多くの醫師の治療を請ひて、有らゆる財產を傾けたれども、何の效驗もなくして、病は依然舊の儘なりしかば、今回基督のことを聞きたるを幸ひ、衆人を押分けて其の背後に來り、人知れず基督の衣に觸れたり、これその心に基督の衣にだに觸れなば、必ず病痊ゆるならんと思ひたればなり、然るに婦人の思ひし如く、基督の衣に觸るゝや否や、其病果して癒たり、時に基督は婦人の信仰の厚きを衆人に示さんとて、故らに後ろを顧みて、我に觸れたる者は誰なるかと問ひければ、婦人驚きて足下に平伏し、縡の仔細を明に述べて、病の平癒せることを告げたれば、基督は懇ろに諭して曰く、婦人よ、汝の信仰汝を救へり、安心して行けと、其言の未だ畢らざるに、前記ジァイルの僕來りて、主人に近づき、令嬢已に絕命たれば、師の來臨を煩はすに及ぶまじと曰ふ、ジァイル之を聞きて悲むこと甚し、基督之を見てジァイルに宣はく、悲むこと勿れ、唯信せよ、少女必ず救からんと、斯くて其家に至りしに、ユデヤ國の習慣として喪の爲に角を吹く者及び夥多の泣き叫ぶ者あるを見て、何故斯く騷ぎ且悲むや、少女は死せしにあらず、唯眠れるのみと曰ひ

止血の奇蹟

甦死

ければ、彼等は少女の確に死せるを知りて、基督を冷笑せり、時に基督は人々を退け、少女の父母と門弟とを隨ひて、少女の臥房に入り、その手を執りて『タリタ、クミ』(少女起きよ)と宣へば、少女は其言の下に忽ち起きて歩めり、尙之に食を與へんことを命じたれば、父母は之を見て大に驚きたれども、基督は此事を誰にも告ぐる勿れと堅く口どめしたれども、此の噂は忽ち國中にひろまりぬ。

尙湖上の奇蹟として茲に記すべき事あり、或日基督その門弟等に命じて、己より先きに舟に乘りて湖水を渡らしめ、自らは祈らん爲め獨り山に登りしに、一方沖合にては門弟等の舟は逆風の爲に浪に漂はされしに、夜の四時と覺しき頃基督波上を歩みて、彼等の方に來りしかば、彼等は之を見て驚くこと甚し、幽靈ならんとて懼れ叫ぶに至りしが、基督は『安心せよ、我なり、懼るゝに及ばず』と曰へども、ペートルスは『果して主ならば、我に命じて、水面を踏みて主の方に到らしめよ』と答ふ、基督は『來れ』と曰へば、ペートルスは舟を降りて基督の方に到らんとて、水面を歩みしが、風の激しきを見て懼れ、遂に溺れんとしければ、聲を揚げて『主よ、我を救ひ給へ』と言へり、基督直に手を伸し引き揚げて曰く、『信仰の薄き者よ、何故疑を抱くや』とて、舟に乘りければ、頓て風歇み、波靜まりぬ、舟中の者皆基督に近づき、拜みて曰く、『主は眞に神の御子にて在ませり』と。

沈溺を救ふ

山上の奇蹟

(G)山上の奇蹟　或日基督人をさけ、さびしき處に往きしが、衆人之を聞きて歩行にて之に從へり、基督出でゝ多くの人々を見て之を憫み、衆人の目に觸れんため、山に登りて座し、門弟等と共に道を說き、且諸々の病者を醫せり、斯て夕陽斜ならんとする頃、門弟等基督に近づきて、此は淋しき處にして時もはや暮れなんとす、衆人を邑々に往かしめて自ら食を求めしめん爲め、一と先づ去らしめ給へと曰へば、基督は去らしむるに及ばず、汝等之に食を與へよと宣ふ、門弟答て曰く、我等は此にパン五個と魚二尾を持合はすのみ、こればかりにて此の大衆を奈何にせんと、基督宣はく、兎に角そを携へ來れとて、頓て門弟に命じて群衆を草上に座せしめしに、其の人數婦女子を除きて無慮五千人ありと云ふ、時に基督五個のパンと二尾の魚をとり、天を仰で謝し、パンを擘て門弟に付し、門弟之を群衆に與へしに、孰れも皆食して飽くに至れり、尙基督は殘餘の屑を拾ひ集めしに、十二の籃に盈てりと云ふ、群衆此の奇蹟を見て各々驚きて曰く、これ實に世に來るべき預言

飽衆の奇蹟

變容の奇蹟

者なりと、且心中に以爲らく昔より約束せられし基督は王位に登るべき筈なればとて、基督をイエルサレムに携へ行きて王となさんとせしに、基督はその心中を知り、間もなく人々を歸らしめぬ。

山上の奇蹟として尙記すべきは、彼のタボール山に於て基督自身の變容せる事なり、或日基督はペートルスとヤコブス及びその弟なるヨアンネスとを伴ひて祈らんとて、タボールの山巓に登りしが、祈禱中基督の容貌忽ち變りて、顏面は太陽の如く輝き、衣裳は雪の如く白くなりぬ、モイゼスとエリヤス其の左右に示現して、不日基督が萬民の爲に死を受くべきことを語り合へり、ペートルスは之を見て呆氣にとられ、聲を發して曰く、主よ、我等此處に居るは樂し、若し旨ひ給はゞ此處に三ッの蘆を建て、主とモイゼスとエリヤスの爲に獻げんと、折しも光雲彼等を包み、空中より聲あり、これは深く我意に愜ふ愛子なれば、善く之に聽くべしと曰ふ、門弟等之を聞きて、大に懼れて地に俯伏せり、時に基督近寄り、彼等に手を觸れて、起きよ、懼るゝ勿れと宣ひければ、彼等は目を擧げて仰ぎ見しに、獨り基督のみにて、他に何人をも見ざりき、下山の途中基督は彼等に口止して曰く、『人の子の死より甦るまで、汝等の目擊せし事を誰にも語る勿れ』と。

基督變容の事實は天地神人の證明する所となれり、天より聲の聞えたるは、基督を指して吾意に愜ふ愛子と云ふに徵して、疑もなく是れ天父なるを知る、基督の左右に顯はれたるは、一は基督の完成したる律法を神より授かりたるモイゼスにして、一は基督の遂げたる舊約時代の預言者中最も偉大なるエリヤスなり、此の二人はホレブ山に於て共に神の光榮を目擊したる大聖なり、一は死せずして天に昇りたりと傳へられ、一は神より葬られて其の墓の所在知れずと稱せらる、而して基督の自ら携帶したる三人の證明者は、基督が門弟の中にも常に殊遇せる所の者にして、一は基督が其敎會の大磐石となせる使徒の首領ペートルスにして、一は十二使徒中第一着に殉敎したるヤコブス、他の一は基督の最も鍾愛したる門弟ヨアンネスにして、敎會と世界の將來に就きて特に天の默示を受けたる者なり、特にペートルスの如きは後日敎を布くときに當りて、吾等は學者のつくりばなしによりて吾主基督の降來と權能とを知らしむるものにあらず、その威稜を實地目擊したるが爲なりと言へり。

案ずるに基督の變容したるは、高山に於て行はれたりとのことなれども、これはタボール山なること一般の信ずる所なり、タボール山はガリレアの山にして、ナザレットとカナを距ること程遠からぬ處に在り。

以上述べたるは基督の行ひたる奇蹟の一斑にして、その凡てを悉したるものにあらざるや言を待たず、基督の奇蹟中其の最も較明驗著なるものは、基督自身の復活なれども、これは其條に於て詳しく記すべければ、今はこれにて奇蹟の記事を止むべし、但だ此等の奇蹟は今の學者多く信せざれば、著者は之に對して著者の所信を附記し、世の學者に問はんとす。

偉人の事業と基督の事業

(附)奇蹟論　基督の偉人なることは、人皆之を承認す、ナポレオンの如きは自ら任ずるに偉人中の偉人を以てし、古今東西の偉人の行ひたる事業は我が事業に比して甚だ小なりとせるに拘らず、自らを基督に比するに至りては、遠く之に及ばざるを自白して、基督を以て偉人以上の偉人と看做し、基督の行ひたる事業のみは、我得て之を行ふ能はずと言へり、吾人は偉人中の偉人を以て自任せるナポレオンの遠く及ばずと自白せる所謂偉人以上の偉人なる基督の行ひたる事業に奇蹟のあることを認むるも、決して基督を過當に崇拜するが爲ならずと信ずるものなり、世には多少常人に傑出する者あれば、直に之れを稱讃するの餘り、其人の行ひたる事業を目して奇蹟なりと公言して憚らざるものあり、過褒も亦太甚し、而して世人は之を聞て恠まず、世の學者を以て自任するの徒も亦之を默過す、(輕蔑するが爲なるかは知らざれども)、然るに獨り基督の行ひたる事業に奇蹟の稱を呈するや、直に之を否定せんとす、その態度、その心事大に怪むべきにあらずや、常人すら奇蹟と稱せらるゝほどの事業を行ひ得るとせば、何故基督は之を行ふこと能はざるか、ナポレオンの事業は眞に奇蹟の如しと言ふも、餘り之に反對を唱ふる者あるを聞かず、然るに基督の事業は奇蹟なりと言ふときは、反對論者の紛然として起るは、これ豈奇怪なる事象にあらずや。

論者或は曰はん、基督の事業は、人力の得て行ふと能はざる所のものなるが故に、之を否定すと、如何にも基督の行ひたる所は常人否、偉人にても行ふ能はざる所のものなり、然れども偉人以上の偉人基督に取りては之を行ふに於て何の難きか之あらん、蓋し一擧手一投足の勞のみ、往々は一言直に之を行ふことを得たり、

そこが則ち基督の基督なる所以なり、吾人をして有體に語らしめば、吾人は餘り世に偉人のあることを信せざるものなり、ナポレオンすらも吾人は之を偉人と稱するに躊躇する位なり、況や其他をや、多少常人に傑出せる者を指して偉人と云ふが如きは、言語同斷なり、特に近頃の如きは偉人と稱せらるゝものゝ續出すること、宛然雨後の筍の如し、曰く彼人は偉人なり、曰く何某は偉人なりとて、世は實に偉人に充滿するが如き言論をなす者今の世比々皆然り、隨て此等の人々の事業に對して、惜氣もなく奇蹟の文字を呈す、曲學阿世の徒の多き、唾棄すべきなり、吾人は國を異にして二千年前の基督に對しては、何等の阿ねる理由を有せず、然れども正直に信ずる所を自白すれば、廣き世界に眞個偉人と稱すべき者は、獨り基督なりと思惟す、是れその事業に眞個奇蹟と稱すべきものを認むる所以なり、然れども是れ或は吾人の研究の足らざるが爲なるをか恐る、請ふ吾人をして少しく奇蹟の何物たるかを論究せしめよ。

奇蹟と歴史的事實

奇蹟の語は機密の文字と同じく、吾人に奇怪の念を起さしむるが如しと雖、畢竟するに是れは奇蹟の何物たるを究めざるの致す所なり、實際に於て奇蹟は歴史的事實と毫も異なる所なし、抑々歴史の語る所のものは何ぞや、人間社會に於て行はれ、當代の人々實際に目擊耳聞したる所のものゝみ、而して此の如く目擊耳聞したる者が、一たび之を史上に記載すれば、後代の人々は之を讀んで、毫も疑はず、宛も己の眼前に行はれたる事の如くに信ずるを常とす、然るに基督の行ひたる奇蹟の如きも、その外容に就て研究するときは、秋毫も歴史的事實と異なる所なし、その行はれたる方法も亦彼此全く同一なり、史實も奇蹟も同じく人間社會に於て行はるゝものなれば、之を實地に目擊耳聞したる者は、その何れをも記して以て之を天下後世の人々に證明するを得るや明なり、歴史的事實を目擊耳聞したる者にして、之を書に筆して以て天下後昆に證明するを得べくんば、同事實と同一の方道を以て行はれたる奇蹟を目擊耳聞したる者にして、之を福音に書して以て天下後世の人々に信用せしむるを得ざるの理は萬々之あらざるなり、然らば則ち何故天下の人は他の歴史的事蹟を聞ては直に之を信用し、基督の奇蹟を聞ては容易に之に信を置かざるや、曰く以あり、請ふ之を言はむ。

奇蹟の事實と原因

奇蹟に於て吾人の區分して考ふべきもの二ッあり、曰く事實、曰く原因即ち是な

り、事實其物は奇蹟の外容にして、目以て之を視、耳以て之を聽き、手以て之に觸る事を得るものなり、今其事實のみを考ふるに、福音書に記載せらるゝ奇蹟を否定したるものは未だ曾て之あらず、基督と同時の人先づ之を否定せざりき、何となれば、彼等は實際眼前に目擊したるのみならず、基督が奇蹟を以て癒したる病人、及び其の蘇生せしめたる死者等現在彼等の中に棲息したるを以てなり、次に基督敎に最も反對したる學者セルス、ユリアヌス、ヒエロクレス等の如きも尙且之を否定せざりき、何となれば彼等の時代は奇蹟の行はれたる時と餘りに接近したるが故に、之を否定せんと欲するも、多數人民の反叫は之を容さゞりければなり、爾來今日に至る迄、福音書には一言半句の增減もなし、渾圓球上の人民皆見て以て之を正史となし、法統連綿たる敎會は之を藏して寶典となし、昔日在りし儘之を後世に傳へたるを以て、近代の反對論者ルナンの如き者すら、且尙福音書中の奇蹟を否定するを得ざりき、蓋し歷史ありてより以來、基督の歷史(福音書)の如く、精讀せられたるものはなし、是故に彼の偉大なる天才パスカルは、有名なる言を以て之を證明して曰く、『アレキサンデルの功業とセザールの死去は、人今之を疑ふ者なけれども、基督の事業に比すれば、其の證明頗る欽如す』と。

是故に事實の點に就ては、如何なる反對論者と雖、到底之を拒否するを得ず、唯だ彼等が疑團を抱ひて、否定せんと欲する點は、奇蹟の原因に在るなり、此の不可思議なる奇蹟は誰か之を行ひたるやを論ずるに當りて、初めて反對論者は各自其の解釋を區々にし、各自其の假定を累積して、紛々藉々、孰れか是、孰れか非なるやを知る能はざるに至る、彼等は奇蹟の原因を認めざるが故に、二千年來五里霧中に彷徨しつゝ空を攫み、雲を握るが如き議論をなせり、事實は精確にして爭ふべからず、之を疑ふの難きは日星の光を隱蔽するよりも甚だし、唯だ其の原因のみは深殿に隱れ、幽邃にして窺知するを得ざる神秘に屬す、而して彼等の此の神秘を捕促せんが爲めに、滿腔の心血を絞り、畢生の能力を傾けつゝあれども、憫むべし其の苦心は每回水泡に歸し去りぬ、是れ他なし、彼等は求むべからざる處に之を求めんとすればなり、若それ之を求むべき處に求めんか、奇蹟の原因豈それ斯の如く冥晦ならんや、實際は事實其物の如く著明なり、苟くも誠意を以て聞く耳ある者には、原因極めて認め易し、即ち人を造り、性を造り、萬物を造りたる神の能

力是なり、然るに基督敎の反對論者は正しく此の『神』と云ふ萬能者を奉戴するを欲せざるが故に、絕對的に奇蹟を否定し去るものなり。

奇蹟を否定する理由

彼等は傲然其の學力を誇示して斷言すらく、凡そ事、神妙不可思議の性を帶ぶる者、別言せば、神の直接の合力を要する者は、絕體的不可能の業に屬す、故に吾曹は直に之を拒否するを得と、彼等は此の如き根本的破壞主義を唱道して、有らゆる奇蹟を絕體的に否定するなり、故に初めより之が講究調査等をなさず、以爲らく有るべからざる事を研究するは徒勞なりと、此點に於ては現今の反對論者は巧猾にも昔時の反對論者よりも簡便法を取れり、何となれば前人が奇蹟を否定するが爲に空しく苦心したるに引き換へて、最も力の少なき道を發明したればなり、然れども此の狡猾なる簡便法が誠意正心なる人を滿足せしむるを得ざるに至りては、前人の自家撞着なる愚說と其揆を一にす、何となれば彼等は如何に絕體的否定論を逞うせんと欲するも、確乎爭ふべからざる奇蹟は之が爲に消滅するものにあらず、而して基督の奇蹟は確固不拔にして、之を當時に考ふるも、將た之を今日に考ふるも、到底拒否するを得ず、蓋し精確なる歷史ありて、日星炳焉、明かに之を證明すればなり、此の歷史は二千年來世界萬民の掌中に存するを以て之を埋沒せんとすることは頗る困難なり、是に於て乎同一の難問復た起る、曰く萬能なる神の合力なくんば、如何にして此の事蹟實際に行はれたるや、若し實際に行はれざるものを、福音書が之を實際行はれたるが如く錄したりとせば、借問す、何故世界萬民は同福音書の事蹟を信じて基督敎徒となりたるや、何故正しく此の事蹟の行はれたる土地、及び時代の民が率先之を信じて、基督敎會の聖者となるを得たるや、基督敎のユデアに創始したる事は事實なり、同敎の世界萬國に弘布せられつゝある事も又事實なり、同敎が古來聖人君子を雲霞の如く輩出せしめたる事も又事實なり、敢て問ふ、反對論者は何を以て此の較明顯著なる事實を解釋せんとするや、若し果して福音書に記載せらるゝ事蹟を以て、公明正大なる奇蹟にあらずとせば、之を信じて世界萬民が基督を信じたる事實は尙更に偉大なる奇蹟にあらずや、然り、吾人は福音書に記載せらるゝ奇蹟と同日の論にあらざるほど大なる奇蹟なりと言はんとす、今日の反對論者は如何に根本的破壞手段を取らんとするも、現在眼前に目擊せらるゝ世界の事實に對しては、之を如

奇蹟の有り得べき理由

何ともし難し、基督教が世界の局面を一變したる事が事實ならば、彼等は如何にしても奇蹟のあるとを自白せざるべからず、何となれば福音書の記せる基督の奇蹟を奇蹟にあらずと云ふときは、何等の奇蹟に依らずして全世界の局面の一變したることは、尙ほ一段の奇蹟なればなり。

神の存在を前提して論ずるときは奇蹟の行はるゝは何ぞ怪むに足らんや、吾人の所謂神とは萬能の靈にして、天地萬物を無何有の鄕より造出し、今尙其の萬能の手を以て之を主宰しつゝある者を謂ふなり、果して斯の如き者なりとせば、神は宇宙の外に超然獨立し、萬物の上に一箇別在して、全く個體的生存をなし、天地萬物と劃然區別あること、宛も作者の作物に於けるが如く、地主の領地に於けるが如き者なりとす、斯く事を定義して立論するときは、奇蹟なるものは取りも直さず神の事業なり、隨て奇蹟は果して行はるべきものなるやと云ふことは、神は果して事業を行ふを得るやと云ふに異ならず、此は答ふるにも足らぬ事なり、若し果して神にして生存する者ならば、又全能全知なる者ならば、其意の欲する所に隨て事を行ふを得るの自然なるは、猶ほ吾人々間が其力に應じて任意に事を行ふとを得るの自然なるが如し、別言せば、人間が人間的事業を行ふが如く、神が神的事業を行ふは、當然の事にして、更に怪むべき所なし、斯く論じ來るときは、奇蹟と云ふも、畢竟世界の常事なり、吾人々間日々意の向ふ所に任せて、道を往來しつゝあるを見て、人誰れも之を怪しとせざらば、神が其意の欲する所に隨ひ、萬能の手を以て人間を自由自在に行動せしむるも、豈以て怪事とするに足らんや、然らば則ち奇蹟のあるは、毫も不思議にあらずして、奇蹟なきこそ寧ろ不思議と云ふべけれ。

字内は一大奇蹟

茲に吾人の日夜眼前に目擊して、毫も怪まざる一の大奇蹟あり、それ之をしも怪まずんば、孰れをか怪まんや、借問す、眞の一大奇蹟とは何ぞ、世界の存在是なり、蓋し神の行ひたる事業、否、行ひ得る事業の中、最も偉大にして又最も公明なるものは、無何有の鄕より此の一大世界を造出して、萬古之を主宰する事なるべし、試みに俯仰天地の一大美觀を觀察せよ、法則確立して、秩序整然、四時行はれて、萬物育す、尙ほ仔細に之を考察せば、禽獸の生死、草木の榮枯等、毫も其の時期を失はず、又毫も其の法則に違はずして、千秋萬古不可思議なる奇蹟を間斷なく現出す、是れ

豈に福音書に記載する基督の奇蹟と日を同ふして語るべけんや、世界は實に萬代に繼承持續する一大奇蹟なり、之が存在は公明正大なるを以て、人之を否定する能はず、又之が原因は神を認めずんば、他に指定すべき者なし、是れ實に奇蹟中の奇蹟と言ふも過言にあらず、神は創世の初めに之を造出したり、蓋し其の行動を外に發揮せざりせば、其の全能全知の力は世に顯はれざればなり、此點に於ては神と吾人の靈魂とは同一轍に出づ、靈魂は無形の質、肉眼の得て見る能はざる者、然れども彼は言行を以て自己の存在を表明し、又自己の性情を發露す、神に至りても亦然り、天地を創造し、萬物を主宰して、其の存在と其の盛德を發揮し、今仍ほ發揮しつゝあり、その內部に隱蔽せらるゝものは、その事業を以て吾人に啓示せられたるが故に、吾人は乃ち其の事業を視て、神の何物なるやを推知し得るに至りぬ、世界と云ふ一大事業は、神の盛德權能を吾人に紹介するものなり、然るに吾人が之を觀望して、毫も喫驚感嘆の念を起さゞるは、日夜常に之を眼前に目擊するに由る、此一大奇蹟の萬古繼續するは、愈々以て奇とすべきに、日々之を目擊することが習ひ性となりて、吾人は之をも奇とせざるに至れり、是に於てか吾人は惰性に驅られて、事業を目擊しつゝ、其の原動者を忘却するに及びぬ、被造物の中に棲息しつゝ、造物者の思想を毫も其の念頭に浮べざるは、不思議千萬なる次第なれども、其の事業の千秋萬古同一に繼續する事は、終に人間の感覺を鈍からしめて、是れ自然なり、當然なりと思はしむるに至れり、是を以て神は吾人々間の視聽を惹起せんが爲には、常理に反したる方法を以て、直接自己の力を發揮するの已むを得ざるに及びぬ、是に於てか奇蹟なるもの起る、而して此の常道に反したる奇蹟を目擊耳聞するときは、不注意なる吾人の視聽は、宛も霹靂の一聲に打たるゝが如く、悚動震起して、昔時埃及の魔術者の叫びたる如く、『嗚呼神の手腕茲に在り云々』(出埃及記第十八の十九)と絕叫するに至れども、飜て神の方面より之を觀れば、奇蹟の易々たる、掌を反すが如し、萬物を創造して、之を主宰せる全能全知の神にして、事茲に出づる、何の怪むべき事かあらん、一家の主が其の子弟婢僕に命令して、己の權利を顯はすを見るも、吾人は自然の事として毫も之を怪まざるにあらずや、況んや斯る臨機應變の事業は之を神が世界萬物の上に絕えず行ふ所の事業に比して、涓滴の海洋に於けるが如きものなるをや、試に彼此の一二

を比較し見よ、年々地上に草菜を繁殖して、優に億兆の人民を養はしむる事は、基督の行ひたる五個のパンを以て五千人に食はしむるより、數百千倍不可思議なる事業にはあらずや、唯だそれ後者は稀れに、前者は絶えず行はるゝが故に、此れの吾人を驚嘆せしむるは、彼れに及ばざるに至れるなり、事皆總て此の如し、吾人の稱して基督の奇蹟と云ふもの、豈夫れ信じられざる程奇異なるものならんや、其の事柄たる一小瑣事のみ、唯だ其の行はるゝの稀れなるによりて、吾人は見て以て奇怪の念を懷くのみ。

奇蹟否定論者と世界の輿論

現今の學者は初めより絶體的に凡ての奇蹟は不可能にして、實際有り得べき事にあらずと假定すれども、奇蹟の果して不可能なるや否やは、正さしく彼等の考究すべき要點なりとす、古今の歴史を繙て東西人民の心事を一々尋問せよ、奇蹟を信ぜざりし人民果して之ありや、勿論奇蹟の眞僞に就て誤りたる人民はあらん、即ち奇蹟にあらざるものを奇蹟なりと信じたる者は必ず之ありたるに相違なし、然れども此事果して奇蹟不可能の證據となすべきやと云ふに、決して然らず、奇蹟を信ずるに當りては注意を要し、一見直に之を信ずるときは往々誤を生ずと云ふ迄にして、奇蹟を信ずる勿れ、凡ての奇蹟は皆嘘なりと云ふ結言は、決して之を下すを得ず、古來似而非奇蹟ありて、奇蹟ならざるものを奇蹟なりと誤認したる人民ありたりと云ふ事は、直に取て以て凡ての奇蹟は皆嘘なり、故に之を信ずるは誤なりと云ふ能はざるのみかは、寧ろ似而非奇蹟を信じたる人民ありたるが故に、彼等が奇蹟の有り得べきを終始確信したる事を明に知り得るにあらずや、若し古今東西の人民にして奇蹟は不可能なりと確信したりとせば、何を苦んでか奇蹟ならざるものをも奇蹟なりと信ずるをなさんや、彼等が奇蹟ならざるものをも奇蹟なりとして信認したるは、眞實の奇蹟の有り得べきを信じたる證明なりとす、是れ實に古今東西の正意誠心なる人々の確信なり、輿論なり。

蓋し奇蹟の有り得べき理は、神の思想より自然打算せらるゝものなり、古今東西の人民が神に就て誤れりとするも、其の誤りは毫も此點に關せず、彼等が如何なる者を神と崇めても、即ち或は天、或は日、或は川、或は海、或は山、或は動物、或は植物、或は又石像木像を神としたりとするも、此等は毫も關する所にあらず、彼等の精神に於ては矢張り神なり、苟も神と云ふときは、必らず言動自在にして、其の權能

宇宙の法則と奇蹟

を意の儘に發現するを得る萬能者として信じたるや明かなり、若し彼等にして神には權能なしと思惟すれば、是れ取りも直さず彼等が神を信ぜざりし明證なり、何となれば神に權能なしと云ふは、神を無視すると同じ、權能のなき所には神の有るべき謂れなし、是に於てか奇蹟は不可能にして、實際に有り得べき事にあらずと斷言するは、神なる者なしと斷言すると毫も異ならざるなり、直接に奇蹟の存在を否定するは、間接に神の存在を否定する所以なり、斯く論じ來るときは、現今の學者は、奇蹟と神とを共に否定して、古今の輿論に反背し、誠心正意なる人民の意見に悖戻する者と謂ふべし。

然りと雖吾人の奇怪なりとするは、神の存在を信じ、神の天地萬物を創造したることをも信ずるに拘はらず、神は一たび己れの創造したる萬物には、二度と再び手を入るゝ能はずと唱道して、神の自由權を全く否定する學者ある事なり、其說に曰く、神は宇宙を造りて之に一定不變の法則を設けたり、天地間の萬物は此の法則に從つて萬古渝らず主宰せらるべきものなり、上は天上に懸る日月星辰より、下は地上を匍匐する微蟲に至るまで、皆此法則に服從す、而して宇宙の調和なるものは之に依て以て維持せらる、然るに今やこれに手を入れて此の調和を變更せんとするが如きは、取りも直さず宇宙萬象の秩序を紊亂せんとするものなり、天地の造主なる神にして、其の被造物を變改せんとするが如きは、偶々以て神が其初め意の達せざりしを證明するに當るものなり、全知全能なる神にして豈此理あらんや云々と、此說頗る奇怪なり、果して此の說の如しとせば、天地の造主、萬物の大匠なる神は、尋常一樣の工匠よりも自由ならざるものと云ふべし、世の工匠は自家の製作物に手を入れて、勝手に之を改作するを得、木材足らずんば、木材を加へん、粉飾足らずんば、粉飾を添へん、取捨增減は全く己れの自由にあり、然るに天地萬物の工匠のみは此の自由なしとするか、然れども神は世の工匠よりも權能ある者にあらずや、蓋し神は天地萬物を創造するが爲めに使用したる材料其物もまた之を虛無より造出したる者なればなり、彼れの未だ天地萬物を造らざる初めに當りてや、彼は縱橫自在に廻轉せしむることを得たり、梅花に命じて晩秋に開かしむるも、菊に命じて嚴寒に咲かしむるも、事全く彼れの自由に屬したるにはあらずや、而して今にして全く其の自由權を失ひたりと云ふを得べ

きや、神は不平なる婦人が其の室家を亂すが如く、自儘勝手に宇宙の調和秩序を紊亂せざるや言を俟たず、而して奇蹟なる者は決して萬物の調和を攪亂するものにあらず、唯だ世界の一端に、萬能なる神の手を觸るゝまでのみ、一端に觸るればとて、萬物之が爲に紊亂せらると謂ふべけんや、神は奇蹟を以て萬物の局面を改變する意にあらず、寧ろ却て其手を觸れざる事物をして、有りの儘に萬古繼續せしめんとを欲す、例へば神が世の人間一人を蘇生せしむるも、世界萬民をして死生の理に洩れしむるにあらず、其手の觸れたる一人は蘇生せん、然れども觸れざる人間は皆依然として死に歸する者なり、且神が斯の如き意を起すは、初めの意を改變するにはあらず、蓋し後日萬物に手を入るゝの意は、神に在りては萬物を創造するの意と共に無始より存在したるものなり、何となれば神は萬物を造る時に、後日斯々の場合に斯々に行はんと云ふ事をも豫定したればなり、神は理由なくして奇蹟を行ふ者にあらず、忘恩なる人間が之を忘却し、之を無視することあるが故に、時々非常の言動を現はして、自己の存在と威嚴と權能とを眼前に目擊耳聞せしめんと欲するものなり、是れ實に神が奇蹟を行ふ唯一の目的なりとす、豈それ敬して畏れざるべけんや。

天地間の法則に至りては學者往々誤る所あり、一種類の動植物が日々同一の法則に從て生育し、繁殖し、枯死するを見て、斯の如く發育繁生するは、動物の法則なりと唱導す、是れ事實なり、吾人も亦首肯す、然れども吾人は彼等に反問せん、其の所謂法則なるものは、何處に存するや、又如何なるものなるやと、彼等は頗る之が答辯に苦まん、其の法則は果して實在のものなるか、詳言せば、天地間には果して一種特別の者、ありて、他の動植物をして皆己れに服從せしむべきものなりやと問はゞ、彼等は答ふるに辭なからんとす、其答ふる能はざるは怪むに足らず、實際此の如き者は天地間に之あらざればなり、今種々の動物植物鑛物等を取て研究するに、見る所のものは、單だ個々別々の物のみ、而して其の個々別々の物は己れに類似する物のあると否とに拘らず、各自其の生命を有し、各自其の性質を備へて、全く此の世界に單獨に孤立する者の如く、相互に個々別々の生殖をなしつゝあるなり、彼の『類』と云ふが如きものは、吾人の精神の外には實際存在するものにあらず、吾人は萬物の中に相似たるものを總合して、之に『類』と云ふ名稱を附した

るのみ、されば吾人の精神を離れて類なるものなし、單だ相似たる各個物あるのみ、其中に何故或物は或物と相類似して、同一の種類に屬し、同一の法則に服するかと云ふも、造物主なる神が斯く制定したるに因ると云ふより外に、原因を提出すること能はざるなり、蓋し學者が宇宙の法則抔と高言するも、其實毫も珍らしき者にあらず、唯だ是れ造物主の斯く制定して又斯く制定したる儘に繼行する所の意志のみ、此の意志を離れて、天地萬物の法則なる者はなし、他に之を求めんとするも得ず、他に之を解釋せんとするも叶はず、果して然りとせば、天地萬物の法則なる者も神の奇蹟を行ふを防ぐる理由とはならざるなり、此の法則それ自らも、萬物の性質に應じて個々別々に之を主宰しつゝある神の意志の繼續に外ならざればなり、而して奇蹟を行ふには、萬古同一の法則に從て生死する森羅萬象の上に、神が或一個人の爲に一時例外を設くるのみを以て足る、人間の注目を惹起して神の手腕を認めしむるには、斯の如くして充分なり、又焉んぞ是を以て天地の法則を破り、萬物の秩序を紊亂すと云ふべけんや、一時例外の事業行はるるも、天地萬物の法則秩序は毫も變更紊亂せらるゝものにあらず、何となれば此の一時の例外に於ても、神の意志は他の同種類の事物に對して、同一に繼續すればなり、斯の如く論究し來るときは、奇蹟なる者は毫も珍らしき事にあらず、其の存否は毫も萬物に關せず、試に一考せよ、萬民皆死生の理によりて支配せらるゝ中に、唯だの一人非常の道を以て死して蘇生せしめられたりとて、何んぞ此の大なる世界に關せんや、實際に就て考ふるときは、斯の如き出來事は、天地間に行はるゝ他の珍らしき大奇蹟に比して、涓滴の大海に於けると一般、其の遺跡をだに認むるに苦む位なり、果して然りとせば萬物の法則を城壁として神と戰ふは、餘りに兒戲に類すと云ふ可し、萬物の法則なるものは想像の城壁のみ、毫も神の行動を妨ぐるものにあらず、前述の如く、神は萬物の造主にして、又此の法則の造主なりと見るときは、城壁自ら崩壞す、神と防戰するには須らく尙數歩を進めて、根本的手段を取らざるべからず。

基督と奇蹟

吾人は世の學者に反對して徒らに呶々の議論を費さんと欲する者にあらず、基督の行ひたる奇蹟の信じ得べき理由を研究せんと欲するものにして、その奇蹟は又基督の偉人以上の偉人即ち神の權能あるを間接に證明するものなりと論

證せんが爲なり、抑も基督が世に降生して、己の神より遣はされたる事、又己れの權能ある事を證明せんとするに當りては、須らく之が證據となるべき事を行はざるべからず、否らずんば誰か彼れの天職を帶びて降生したるを信ずる者あらんや、然り而して神より遣はされたる唯一の證據は、神にあらずんば行ふこと能はざる奇蹟を行ふにあり、此は古來の似而非偉人所謂山師が時俗を欺かんが爲に毎度此の手段を用ゐたるを見ても知るべし、勿論彼等は實際眞實の奇蹟を行ひたるにあらず、然れども民の信用を博せんには、奇蹟を行ふを以て最も必要なりとしたるが故に、己れの事蹟を飽く迄も世人に奇蹟視せしめんことを務めたるものなり、基督が己れの天職を證明するに至りても、他の道に出づること能はずして、勢ひ神妙不可思議なる事業、所謂奇蹟なるものを行はざるべからざりき、然れども基督の行ひたる奇蹟と似而非偉人の行ひたる奇蹟とは大に相異なり、基督の奇蹟は眞實なり、彼は欺騙の目的を以て降來したる者にあらず、實際に於て人を欺きたることは一回もなし、理窟に於ても亦人を欺くを得ざりき、彼が行ひたりと云はるゝ奇蹟は、彼れ眞に之を行ひ、彼れの行ひたる方法は、是れ神の權能に因りて行ひたるとを證明す、何となれば當時の人民皆之を信用したるのみならず、彼れ先づ自ら其の奇蹟の疑ふべからざるを示したればなり、彼は己れの言の信實無妄なるを證せんが爲め、公然其の奇蹟を擧げて答へたり、曰く『若し爾等我言に信せずんば、我事業に信せよ、』(約翰傳十の三十八)、是れ實に彼れの奇蹟に就ては、彼れの言の如く、當時の人民皆之を信じて疑はざりしを表明するなり、而して其の奇蹟は極めて公明正大なりしが故に、福音書中に屢々記載せらるゝ如く、時の人民は之を見る毎に、必ず『光榮を神に歸したり』(路加傳十八の四十三)、加之ならず、彼れの舊怨宿敵に至るまで、群衆の眼前に於て行はれたるを見ては、之を否定拒絶するを得ざりき、彼等仇敵は到底之が事實を打消すこと能はざりしが故に、笑止千萬なる見解を以て之を埋沒せんことを務めたるに過ぎず、今其の一例を擧ぐれば、一日基督公然暗啞の鬼を患る者を驅逐せしに、鬼出でゝ瘖者忽ち語るを見て、衆咸之を奇とし、感驚して基督の身邊に圍繞す、時に彼れの仇敵ファリゼイ人衆民に語りて曰く、是れ彼が鬼王ベルゼブッブに藉りて鬼を逐ふなり、神の名に藉りてにはあらず云々と、然れども基督は其意を悟り、忽ち彼等の愚論妄說

を說破して曰く、若し我れ鬼王に藉りて鬼を逐はゞ、是れ鬼自ら己れと相分爭するなり、然れども記せよ、凡そ國自ら相分爭するときは必ず墟となるを、若し果して鬼自ら相分爭せば、其國何を以て立たんや、之に反して我れ若し神の力を以て鬼を逐はゞ、即ち是れ神の國(權)爾等に臨めるなり云々、(路加傳十一章參看)、基督の答は實に直截なりき、然れども彼等仇敵は神の權能が基督によりて人民に顯はるるを怖れたるが故に、飽迄も頑固なる抵抗を試みんと欲したるなり。

(備考)基督の時代及び基督敎創立の當初に於ては、兇魔の人間許多ありて、基督の權能を發揚するに好機會を與へたり、基督の奇蹟を行ひたるときには、魔鬼に對して如何に權勢を有したるかを知るべし、當時魔鬼は到る處に尊拜せられて、全く人類の上に位する神の如く看做されたりしが、基督來りて、神の權能を發顯するに當りては、魔鬼自らも基督の神の子なるを告白して、勢ひ之に服從せざるを得ざるに及びぬ。

仇敵の頑固なる抵抗は、毫も基督の奇蹟を防壓するを得ざりき、彼等は如何に牽强附會の辯論を逞うするも、民の正意誠心を欺くことを得ざりしが故に、彼等は

口を愛國心に藉りて基督を殺さんことを企つ

到底群衆の基督の跡を慕ふて、之に歸依するを制止すること能はざりき、福音書を閲するに、良民の正意誠心は彼等仇敵の曲論橫說よりも遙に勢力のありたるを見るべし、是に於て乎彼等は無慘にも基督を殺戮せんとの奸策を廻らしたり、嗚呼彼等は基督の公明正大なる奇蹟を否定しかねて、一切人類の救主たる基督をなきものにせんとせり、然れども如何なる惡逆無道の人間と雖、單に自家愛憎の念の爲に、完全無缺なる善人を殺すことも叶はねば、彼等は茲に熟考したり熟考の末遂に名案を提出しぬ、名案とは何ぞ、他莫し、愛國の美名を以て愛憎の私念を覆ふこと是なり、是れ實に彼等が民の前に於て己れを義とする唯一の名案にてありしがども、其實民を欺き、併せて己れを欺く一大奸謀なりしを忘るべからず、事甚だ奇怪なれども、爾來二千年後の今日に至る迄、基督敎の世界到る處に攻擊せられたる所以も亦、不思議にも皆此に出でざるはなし、歷史備さに存す、必ずしも茲に喋々するを要せず、蓋し之れが口實の開祖は實に基督と同時のファリゼイ人にてありたり、即ち當時彼等は叫んで曰く、『若し我等彼を處置せずんば、羅馬人必ず來りて、我地及び我國を滅ぼさん、』約翰傳十一の四十八、彼等は斯の如く自

家の私心を覆ふに、愛國の美名を以てせり、此の口實の虛なることは論を俟たず、然れども何れの代の民も此の美名の爲には忽ち耳を傾くるものなり、當時ユデアの民も又遂に玆に欺かれて、基督を磔刑に處するに及びぬ、然れども彼等は基督の行ひたる奇蹟の眞實無妄なるを表明するに於ては、實に爭ふべからざる證明者となりたり、何となれば彼等は基督を死に陷るを以て、彼れの奇蹟を埋沒する唯一の手段となしたるも、到底其の目的を達するを得ざりければなり、今彼等の心事を解剖するに、甚だ憫むべきものあり、奇蹟を解釋するには、神の權能を前提せざるべからざるは、炳然として日星を睹るよりも明かなるに、彼等は基督に於て此の權能のありたるを飽迄否定せんと務めたるが故に、之を鬼王に歸せんと欲して失敗し、遂に基督を死地に陷れて以て、其の奇蹟の爭ふべからざる事實なる事を明かに表白したり、爾來二千年後の今日に至るまで、彼等と心事を同ふする曲學阿世の徒も皆之と同一轍に出づ。

基督の奇蹟と似而非偉人

今又基督の奇蹟を行ひたる方法如何を考ふるに、左の觀念は自然吾人の心頭に浮び出づ、假りに神が人間となりて世に出で、人間社會の中に神的事業を行ふとするも、決して基督の取りたる方法の外に出づる能はざる事是なり、基督を以て、奇蹟を行はんと公言せる古來の山師に比するは、餘りに基督を侮辱する事なり、何となれば彼此の間には毫も類似の點あらざればなり、試みに彼此の心事を檢せよ、似而非偉人の奇蹟を行はんと公言するは、其の目的全く自家の利益の點にあり、彼は先づ初めに人の感驚を惹起し、次に金錢を得ん事を企圖す、一言せば、名利即ち是れ此徒の唯一の目的なり、此徒の使用する手段方法は、常に秘密なり、迂回の道に出で、困苦の跡見ゆ、時には笑止千萬にして、不道德極まるものあり、其の所謂奇蹟なるものも、往々己れ自ら之が證明者となるなり、良し他に證左ありとするも、そは僅々同臭一味の徒のみ、而して其の奇蹟の結果に至りては、決して人の知識を發開して、人を善人たらしむるものにあらず、寧ろ却て人心を攪亂して、正理の容れざる迷信的恐怖を惹起し、終には人をして良心の許さゞる行爲に出でしむるを常とす、要するに不合理と不道德即ち是れ似而非奇蹟の目的とする所なり、今福音書を開て基督の奇蹟を檢するに、斯の如き事は毫も之なし、基督の行ひたる有らゆる奇蹟を逐一分析するも、彼れが己れを尊からしめ、己れを益す

るが爲め行ひたるものは一つもなし、福音書を讀む者も斯の如き事は夢寐にだも想像せず、基督の名利の觀念なきこと、實に斯の如し、彼が唯一の目的とする所は、上は己を遣はしたる天父の光榮を發揚し、下は己れに際會したる不幸薄命者を救助するにありたり、彼は是れが爲に毫も自己の事業を世に公示せらるゝを冀はず、勿論彼は病者を癒し、死者を蘇生せしむる等の奇蹟を山に、河に、市に、邑に、道に、到る處に行ひたるには相違なけれども、彼は之を行ひたる度毎に、其事業の世に公にせらるゝを欲したるにあらず、却て屢々口止して之を默々に附せしめたり、現に之を目擊し居たる證人の員數少きときには、之を人に語ることを絶對的に禁じたり、彼れの奇蹟を行ふ手段方法に至りては、極めて單純平易なりき、一意、一言、一擧手にて萬事を行ひたり、例せば彼が癩者を癒したるを見るに、『彼れ手を伸べ、之を撫して、我肯へり、爾潔まるべしと曰へば、其言の畢るや否や、癩即ち除きて、其人潔まれり』、馬可傳一の四十一、二)と云ふが如き、毫も困難勞苦の跡見えざるなり、盲者に向て、『目を啓けよ』と曰へば、其目忽ち啓け、死者に向て、『汝起きよ』と曰へば、忽ち起き出で、海に向て、『默して靖まれ』と云へば、風即ち止みて、海波忽ち平息するが如き、(馬可傳四の三十九)、蓋し焉より易々たるものはあらず、彼が天に祈りて奇蹟を行ひたるは、唯だ一回のみ、而かも彼れの之を爲したるは、環視の民をして己れの果して天より遣はされたる事、及び神の名に藉りて之を行ふ事を知らしめんが爲にてありたり、嗚呼實に彼れの言動の單純平易なる、宛と人意の表に出づと謂ふべし、而して其の言動の斯く簡易なるにも拘らず、其權能の偉大なる事、亦是れ人の意想外に出づ、彼れ是れを以て萬事に命じ、萬物に向ふときには、病者も、死者も、風も、波も、天も、地も、有らゆるもの皆平伏して之に服從したり、今基督が一言を以て萬物に命ずるや、萬物直に其命に服從したる事蹟を見るに、神が開闢の當時に、一言を以て萬物を虛無より造出したると同一の權能ありたるにあらずんば、決して茲に出づる能はざりしを認むること難からざるなり、勿論之を吾人々類の眼を以て見るときは、全く人力の企及すべからざる不可思議なる事業には相違なけれども、之を神より觀察するときは、蓋し平常易々の事業のみ、猶ほ吾人が從順なる婢僕に事を命じ、若くは足を以て道上の小石を轉ずるが如きのみ、故に基督の周邊に環立して、此事業を目擊したる者は、直に神の權能を認め

たり、福音書に曰く『衆見て之を奇とし、直に榮を神に歸す、蓋し其の此の如き權を以て人に賜ふに因るなり。』馬可傳九の八)、亦以て見るべきなり、基督の仇敵と雖之を知らざりしにはあらず、然れども彼等は基督に對して、憎惡の念と嫉妬の念に燃されたるが故に、他言を以て間接に之を證明せり、曰く『我儕の行ふ所毫も益なし、舉世皆彼に從へり、宜しく彼を殺さんのみ云々』(約翰傳十二の十九參看)、是に至り一の難問必ず讀者の念頭に浮び出でん、基督の仇敵が若し果して其の奇蹟を目擊したりとせば、何故之を信ぜざりしやと云ふ事是なり、見ると信ずるとは、二各々相異なり、基督の奇蹟を見ても、之を信ずると信ぜざるとは、人の勝手なり、彼の仇敵は基督の事業を目擊したるには相違なけれども、其の事業の下に神の全能の發揮せられあるを認めざりしなり、認めざりしにあらず、認むるを欲せざりしなり、蓋し彼等は基督が神の權能によりて奇蹟を行ひたりと云ふことを明かに知了したりとするも、人の自由は奪ふべからず、之に歸依すると之を嫌棄するとの選は、依然として彼等に屬したり、是れ毫も怪むに足らず、彼等の基督の奇蹟に對せるは、猶ほ今日の人々の世界の造出てふ一大奇蹟に對するが如きものなり、凡ての人は此の世界萬物は神の事業なりと云ふ事を屢々耳聞して明かに之を信認すると雖、此の一大事業を行ひたる神を尊拜して之に奉事する者は、甚だ鮮少なり、多數の人々は神の思想をも其の念頭に浮ぶるを欲せず、或る一部の人間は愛憎の私情に驅られて、直接神に反抗し、宛も神が人間と同じく痛痒を感ずるかの如く思惟して、之に打擊を加へ、出來得べくんば之を死地に陷れんとするものゝ如し。

基督の一大奇蹟

人或は曰はん、基督若し果して奇蹟を行ふて、神の權能を示したりとせば、何故凌辱打擊を蒙りて、遂に磔刑に處せられたるや、何故人を救はんより先づ自ら救ふことを爲さゞりしや、何故十字架より飛下りて其の權能を顯さゞりしや、何故仇敵を一擊の下に粉齏して、一大快事を試みざりしや云々と、斯の如く立論するは餘りに人間的の語調なり、勿論人間にして斯の如き權能ありとせば、其の所爲必ず茲に出でゝ、基督の如く忍辱甘受する者は一人もなけん、必ずや卑劣なる群衆の凌辱殘忍に石光電火の打擊を加へ、ユデア國の內外よりイエルサレム都城に雲集霧合する人民の眼前に、偉大なる威能と隆々たる光榮を發顯して以て快哉

を叫ぶべし、若し人間をして基督の地に立たしめば、其の所爲必ず茲に出でん、其の所爲の茲に出でざるは、乃ち是れ基督の基督たる所以にして、其の常人たらざるの證據は正しく此點に在り、大なる堪忍を以て、罵倒嘲笑の下に泰然として立ち、辱をも苦をも且死をも堅忍甘受せるは、嗚呼是れ實に人間以上の神にあらずんば能はざる所なり、先づ初めに己れを死地に陷らしめ、萬事休して敵のかち誇れるに當り、忽ち意外の復活をなして、光明赫々たる威嚴を發射せるは、到底人間の夢想する能はざる所なり、蓋し己れを知るの篤く、後を見るの明かなる者にあらずんば、決して茲に出づる能はざるなり、己れに拔くべからざる權能ありて、將來任意の時に蘇生自在なるを明知したる基督にして、初めて之を能くするを得べし、加旃ならず、基督は己れの斯く凌辱罵詈を蒙りて死するは、決して其の卑怯柔弱なるが爲にあらざるとを、吾人々類に知らしめんが爲め、正しく此死期に當りて飜宇掀寰の大奇蹟を行ひたり、即ち基督の磔刑に處せられたる時刻は、正に是れ白晝なりしに、日光忽ち光を包んで、天地晦冥となりぬ、言ふを休めよ、時、日蝕に屬せりと、此時は正に是れ滿月の時、日は天の一方に在りて、月又他の一方に在りたり、日蝕固よりあるべき時にあらず、然るに暗夜の黑幕は忽ち天地を鎖しぬ、ユデア近傍の諸國は冥々として咫尺を辨せざるに至れり、而して彼れ基督の玉魂を絕ちたる午後正三時に當りては、大地震動し、巖石破摧し、死者其墓を破りて蘇生したるが故に、此の一大悲劇を目擊したる者は、毛髮悚然、全身恐怖の念に襲はれて、往々胸を打ちて悔悟したり、中にも基督の磔下に在りたる百夫長は、此等の事象を見、絕叫して曰く、『誠に是れ義人なりき』(路加傳二十三の四十七)、『眞個に是れ神の子なりき』(馬太傳二十七の五十四)、神の義怒は斯の如く歷然たりき、基督の死を弔したる奇蹟は斯の如く顯然たりき、是を以て曰ふ、奇蹟を行ふ權能は、基督の死期に隱晦せざるのみならず、此時却て大に活氣を添へたりと、基督自らも嘗て己れの口より、『人、生命を我より奪ふ能はず、我自ら之を捐つ云々』(約翰傳十の十七)と明言したる所を、此時初めて遂行したり、何となれば彼は其の生命の必要を認めたる間、永く之を保ちたれども、時既に來りて萬事預言の如く行はれたるに當りて、初めて『萬事茲に休す』(約翰傳十九の三十)と云ふ最後の絕叫を發すると同時に、『父よ、我靈を以て膝前に托す』(路加傳二十三の四十六)と大聲に呼はり、而る

後、靜かに頭を傾けて氣を絶ちたり、乃ち知る、彼れの卑怯なる死を遂げたりと思はるゝ事は、正しく是れ神妙不可思議なる一個の奇蹟なるを、斯の如く基督の死生の場合よりして、終始赫々たる眞理の光明發射するを以て、事の現象を實際に目擊したる彼の百夫長と相距る一千八百年後に至り、無神論者の巨魁なるルーソーすらも、其の不信の心は事實に打克つこと能はざりけん、昔時の百夫長と同一の證言を吐くに及びぬ、曰く『若しソクラテスの死生にして賢者の死生ならば基督の死生は確に神の死生なりと謂はざるべからず』と、嗚呼是れ實に彼此同一の場合に際して、勢ひ此の言を吐かざるべからざるに至りたる所以なり。

山中の祈禱

(15)基督の受難

(A)山中の祈禱　基督は門徒と訣別の宴を開きて、永遠の紀念とすべき晩餐式を定め、門弟のユダス・イスカリオテスが敵と歡を通じて己を敵の手に渡さんことを語り、服難の際には高弟ペートルスまでも己を否みて知らざる爲を學すべしと曰ひつゝも、門弟等の信仰のかはらぬやう懇ろにさとして、最後の別を告げ、終りに天を仰ぎて天父に祈りたる後、尙門徒を伴ひてセドロンと云へる溪川を越え、橄攬山に至り、ゼッマニアと名くる別莊の園に入りぬ、基督は門徒と共に屢々此所に集會したることありしことゝて、彼の敵の手に渡さんと企つるユダスは能くその處を知りて、目を注ぎ居たりき。

此の溪川は昔基督の祖先ダヴィド王がその子アブサロンの反逆を避くるときに渡りたる川なるが、今や同王の苗裔基督はその弟子の反逆の爲に捕はるゝ所とぞなりにける、不孝の子、忘恩の徒は何れの世にも跡を絶たぬこそ悲しけれ。

基督門徒等に向ひ、我れ彼處に往きて祈らん程に、汝等しばらく此處に待て、汝等も誘惑にかゝらぬやう祈れとて、他の門徒等を其處に遺し置き、ペートルスとヤコブスとヨアンネスの三人のみを伴ひて、園の奥に進み往き、深き愁に沈みて悲みを催うし、吾心死ぬる程悲し、汝等此處に止りて、我と共に警醒せよとて、夫より石を投ぐれば達する程の距離を隔てゝ、地に跪き、頓て平伏して神に祈りて曰ふ、吾父よ、若し聖意に適はゞ、我より此の苦爵を遁し給へ、されど我が望みの儘になさんとするにはあらず、聖意の儘になし給へと、斯くて起ちて三人の弟子の許に復り來れば、彼等は悲みの餘りに皆眠れり、基督之を起し、ペートルスに向ひ、シモ

ンよ、何故眠るや、汝等我と共に一時間だも醒め居ること叶はざるか、誘惑に陥らざるやう警醒て祈れ、實に精神ははやれども、肉身は弱はしと言ひ、再び彼處に至りて、同じ祈をなして歸り來れば、又々門弟等のねむれるを見つ、彼等は目重くして答ふることすら得叶はざりき、基督は又々彼處に至りて三度まで同じ祈禱を天父に献げたるが、人類の惡逆を豫想し、その罪惡を贖ふが爲には、如何程の苦難に服せざるべからざるかを考へて、苦悲益す甚しく、血の汗淋漓として地に滴り、死する程の苦みを喫嘗しき、此時天使示現して彼の心を強めぬ、斯くて門徒等の方に復り、汝等今は眠りて心安かれ、人の子は罪人の手に渡さるゝ時は來ぬ、いざ往かん、我を賣す者近けりと宣ひぬ。

基督の捕縛

(B)基督の捕縛　言未だ畢らざるに、ユダス群衆を率ゐ來り、提灯、松明、劍、棒等を携へ、宛然惡人を捕縛せん爲に來れる如き光景なりき、ユダスは豫て彼等に暗號を與へて曰ふ、余が接吻する所のものは基督なれば、そを捕へよとて、頓て基督に近寄るや、師よと挨拶しつゝ之に接吻しければ、基督は友よ、汝は何の爲に來れるや、嗚呼ユダスよ、汝は接吻して以て人の子を渡さんとするかと云ふ、思ひも寄らぬ基督の親切なる言葉に、流石のユダスも意外の思をなしたるものゝ如し、されど何事も成るやうに成ることを知れる基督は、自ら進みて群衆に向ひ、汝等誰を尋ねるかと曰へば、ナザレットのイエズスを尋ぬと答ふ、イエズスは我なりと宣ふや、彼等は怖れ退きて後に瞠と倒れたり、基督再び、汝等誰を尋ぬるかと問ふに、彼等は同じくナザレットのイエズスなりと答ふれば、基督は先刻も曰へる如く、我は其人なりと曰ふや、此時惡黨等は基督を捕縛したり、門弟等之を見て、主よ、刀をもて擊たばやと云ふ、言の未だ畢らざるに、一刀を帶び居たるペートルスは早くも鞘を拂つて、マルクスと云へる司祭長の僕の右の耳を削落しぬ、基督は僕を止め、即時に其の耳に手を觸れて之を癒し、さてペートルスに諭して曰く、刀を鞘に納めよ、刀を執る者は刀に滅びん、天父の我に與ふる苦爵は爭で之を飲まざるべき、吾父に祈らば、十二家の天使を遣はし給ふべきを知らざるか、然れど斯くなさば斯くあるべし、この聖書は如何で應驗あるべき、尙群衆に向ひて曰く、汝等は刀又は棒を携へ來りて、宛然盜賊にても捕へんと如くに我を捕ふるが爲に來れり、我は今迄毎日聖殿に於て汝等と共に座して敎を說きたるに、我を捕へざりき、然れども

今は暗黑の時來りぬ、橫暴を逞うすべし、聖書と預言の成就するが爲には、宜しく此等の事行はれざるべからずとて、自ら進みて手を伸べ、縛に就けり、時に門弟等は蜘蛛を散すが如く散せり。

アンナ、カイファスの館邸

(C)アンナカフスの館邸　斯くて兵卒等は先づ基督をアンナの許に曳き往けり、アンナは前司祭長にして現司祭長の外舅に當れるが故に、先づその許に曳き往きしも、アンナは縛せる儘基督をカイファスの許に送れり、カイファスは豫てユデア人と議し、一人民の爲に死するの要ありと語りし者なり、此時既に司祭、學者及び宿老等を召集し、大議會を開きて基督の來るを待てり、基督の來るや、その弟子及びその敎法について訊ねしに、基督は之に答ふらく、我れ生平公然敎を世に布き、未だ曾て隱に道を說きたることなし、我の會堂及び聖殿に於て敎を說くや、ユデア人は四方より集りて之を聽けり、今となりて何故之を我に聽かんとせらるゝや、須らく之を聽きし者に問はるべしと曰へば、旁らに立てる一人の下吏此言の不禮なるを憤り、直に手を擧げて基督の面を毆ち、汝司祭長に向ひ此の如き不禮の言を吐くかと曰ひしかば、基督は之に答て曰く、若し我言善からずば、その善からざるを證せよ、善からば、何ぞ我を打つやと。

時しもペートルスとヨアンネスは遙か後れて基督の後に尾し往きしが、ヨアンネスは司祭長の識る所の者なりしかば、基督に尾して館邸に入ることを得たれども、ペートルスは入ることを得ずして門外に立てるを、ヨアンネスは再び出で來りて門を守る婢女に語り、ペートルスを館邸に入らしむ、此日天寒くして司祭長の僕等中庭に燒火して暖を取り居たれば、ペートルスはその群に混入り、師の結局を見んとて僕等と共に座せしが、門を守る婢女此處に來りて、汝も亦ナザレットのイエズスの弟子なるかと曰ひければ、ペートルスは公けに否みて、我は彼を知らずと云ふ、此時鷄初めて鳴けり、暫して一人の僕出で來り、ペートルスを指して、此人も基督の弟子なりと曰へば、ペートルスは亦之を否みて、我は實際彼人を知らずと答ふ、尙一時間計りを經て他の人來り、汝は必ず彼れの黨に相違なし、汝の方言を聞きても知らると曰へしに、ペートルス又復た之を否みて、我は誓て曰ふ、彼人を知らずと、此時鷄二回鳴けり、基督後を顧みて、ペートルスを眺めしかば、ペートルスは豫て主が『今夜鷄二回鳴がざる中、三回我を否まん』と語りし言葉を

想起し、外に出でゝ太く悲み哭きぬ。

一方に於て司祭長、宿老及び其他の議官等は基督を死刑に處せん爲め、夥多の妄證者を集めたれども、妄證者の言ふ所一定せざりしが、最後に二人の證人出で來りて、我等は曩に彼れが『神殿を毀ちて、三日の内に再び之を建てん』と語りしことを聞けりと言ひしが、その證據も相合はずして、不充分なりしかば、司祭長會衆の裡に起ちて、我は活ける神に依りて汝に問ふ、汝は神の子基督なるかと曰ひければ、基督は、汝の言の如し、尙我は汝等に告ぐ、汝等は異日人の子が神の威光の座につき、天の雲に乘りて天降るを見んと曰へしかば、司祭長その衣を裂きて曰く、此人は瀆神の言を吐けり、何ぞ他に證據を要せんや、諸君も今その瀆神の言を聞けり、諸君以て如何となすと曰へば、衆咸、死刑に相當せりと云ふ、是に於て乎或者は面に唾を吐きかけ、或者は拳をかためて打ち、或者は目を覆ひ批きて曰く、基督よ、今汝を打ちし者は誰なるかを中てよなどと、種々嘲弄侮辱を浴せかけたり。

斯くて黎明に至るや、大議官集會し、基督を曳出して、汝基督ならば、我等に言へと曰ふ、基督は我れ汝等に言ふも、汝等は信せざるべし、我れ汝等に問ふも、汝等は我に答ふることもなく、又赦すこともなかるべし、されど人の子は今後權能ある神の右に座せんと曰へば、衆咸、然らば汝は神の子なるかと問ふ、基督は汝等斯く言へりと答ふるや、彼等一齊に叫んで曰く、何ぞ此上に證據を要せんや、我等現に彼れの口より之を聞けるにあらずやとて、基督を縛して死刑に處せしめん爲ビラトの法衙に送りぬ。

受難の光景

ユダス之を聞きて大に己の罪逆を悔み、基督を賣り渡したる銀三十枚を司祭長及宿老等に返して、我れ無罪の者の血を付して罪惡を犯せりと曰ひしに、彼等は何ぞ吾等に關せん、そは汝の事なりと曰へば、彼は失望して銀を聖堂に投げこみて、遂に自ら縊死を遂ぐ、司祭長その銀を取りて、これは血の代價なれば、賽錢箱に入るべからずとて、議決の結果之を以て旅客の墓地用にとて陶工の田を買ひ求め、之を『ハセルダマ』と稱せり、即ち血の田と云ふ義なり、是に於て乎預言者ゼレミアス(寧ろザカリアス)が『イスラエルの子孫價つけし所の銀三十枚を取り、主が我に命せし如く、陶工の田を買ひぬ』と曰ふ預言の如く行はるゝに至れり。

(附)受難の光景　本文は正史の記する所を總合して殆と其儘轉載するに過ぎざ

れば、筆力拘束せられて、充分言はんと欲する所を盡す能はざれば、左に當時の實況を描寫したる受難劇の一節を記して以て趣味の缺乏を補はんとす。

アンナ、カイファスの館

△アン(アンナ)、司祭數人、エス(エスドラス)、シド(シドラク)、ミザ(ミザエル)

アン『本官は彼の謀反人(基督)を手に入れぬ内は、枕を高うして眠ることが出來ぬ、故に謀反人の消息如何と、たゞ夫をのみ待ちに待つて居る。』

司祭『御聖慮の程御察し申上げまする、イヤ頓て其の消息も判明るで御座りませう。』

アン『本官は臣共の來るのをまだか〳〵と首を伸ばして、セドロンの彼方を眺むれども、煙雲漠々、何んにも見えぬ、これエスドラスよ、汝、セドロンの關門まで往つて、臣共の來るのを見て來い。』

エス『承諾まして御座ります、では早速見て參るで御座りませう。』

アン『謀反人が萬一失走したとあつては、高等法院に取つての一大打擊であるぞ。』

シド『御心配は御無用に御座りまする。』

ミザ『成効は鏡に懸けて睹るよりも瞭で御座りまする。』

アン『では多分臣共は他の道を通つて參る積であらう、シロエの關門を經て來るかも知れぬ、ドレ其方を眺めてみやう。』

シド『もし大教官樣の御望みとあらば、拙者驅けて見て參りませうか。』

アン『左樣か、では汝も往つて見てくるがよい。』

シド『さらば早速參るで御座りませう。』

アン『夜は深々と更けゆくに、吉報は未だに參らず、アヽ心配々々、深夜寂として聲なく、四邊跫音だに聞えぬ、ハテナ誰か來たやうな音がする、若しや吉報ではあるまいか。』

シド『大教官樣、エスドラスが大急ぎに急いで參りました、拙者が見ましたが、疾鳥の如く風を切つて參りました、さぞ何か嬉しい報知に相違御座りませぬ。』

アン『斯く急いで來るからには、屹度吉報に相違あるまい、早く彼の謀反人が捉まれば可いがな。』

エス(入りながら)『大敎官樣、御叡慮をやすませらるゝやう、拙者確に臣共の者を見とゞけて參りました、萬事上首尾、謀反人は既に捕はれましたと云ふ事、拙者不取敢其の吉報を齎らして參りまして御座りまする。』

(司祭等アンナの心を安んせんことを務める、其中二人は四邊を見廻す、頓て一人萬事意の如くなれるを知らしむ)

アン『アヽ吉報か、今日は又何といふ吉日ぞ、吾心は宛も重荷をおろしたやうな心持、是れでこそ本官も枕を高うして安眠が出來る、永く選民(天より選ばれた民の意、ユデア人民を云ふ)の大司祭となつてゐることも出來る、先づ〳〵安心々々。』

△以上の人々の外、ユ(ユダス)及び高等法院より遣はされたるフア(ファリゼー)人四名

ファ人『大敎官萬歲。』

アン『アヽ成効々々、ウンお前がユダス、感心々々、お前のお蔭で謀反人も頓て死刑に處せられるであらう、お前の名は永く國の記錄に載せらるゝであらうから、お互によろこばなければならぬ。』

ユ『何と死刑とな?』

アン『左樣サ、死刑の宣告は既に下されてある筈ぢや。』

ユ『そりや大變なこと!!!、捕へるは捕へて上げましたが、死刑とは、意外千萬!』

アン『彼れ既に吾等の手中の者となつた以上は、吾等が好きに計らふ程に、安心せよ。』

ユ『でも死刑とは驚き入りました、さういふ譯ではなかつたが。』

ファ人『今となつて何を言ふたとて、既に彼を吾等の手に渡した以上は、吾等の勝手、此處はお前さんの入るべき幕ぢやない。』

ユ『アヽ了つた? 死刑に處する爲とは、夢にも想はなかつた、イヤ〳〵是れはどうしても我罪ではない。』(急いで出づ)

ファ人(少し嘲弄の氣味にて)『お前さんが何と言はうが、既に一たび下された宣告は、撤回することは出來ぬ。』

△如上の人々(ユダを除く)、頓て基督、セル(セルファ)及び堂守のマル(マルクス)とバル(バルブス)入り來る

一司祭『大敎官樣、犯人が門外に待つて居りまする。』

アン『入らしめよ』。(セルファ基督を曳き入る)

アン『たゞ此の謀反人一人しか捉まらなかつたか?。』

バル『此奴の弟子共は丸で蜘蛛の巢を散すが如く、右往左往に逃げまして御座りまする。』

セル『吾等も此奴の弟子共は捕ふるに及ぶまじと思ひました、それにマルクスは彼等の爲に飛んだ側杖を食いまして御座りまする。』

アン『側杖? 何事があつた?。』

セル『此奴の弟子の中の一人が鞘を拂つて、マルクスの耳を切り落しまして御座りまする。』

アン(マルクスを熟視しながら)『耳を切り落したとな? 左樣は事のあらう筈はない。』

バル『處がありましたので御坐りまする、それが不思議でなりませぬところへ、今度は其の切り落した耳を、此の謀反人が又復の如く附着てやつたので、實に不思議で堪りませぬ。』

アン『本統か、マルクス?』

マル『本統で御坐りまする、私ながら其の理由が毫も不可解。』

アン『それは此の魔術師が何か妖術でこう一寸貴樣達の目を眩したのであらう。』

アン(基督に向ひ)『コレ犯人、貴樣は如何なる妖術を以て夫を行つたか?』(基督默然たり)

セル『ソレ犯人、大敎官樣がお問になるのに、お答をせんか。』

アン『早く答をしろ? 序でに貴樣の行動の一伍一什をも陳べろ、貴樣の弟子の事をも言へ、それに貴樣がユデアの大都小邑を巡游いて、人民を惑はした妖術をも語れ。』

基督『我が語れる所は、我之を萬民具瞻の下に語れり、我は始終會堂に於て、聖殿

に於て、敎を說き、陰に語りたる例は一回もなし、今のお問は奇怪千萬、我が言動を知らんとあらば、之を聞きたる民に就て問はれよ、彼等は我が何を敎へたるかを明に知つてゐる筈。』

バル(基督の頰を打ちながら)『貴樣、大敎官樣に向つて如斯答言を吐すか、此の無禮漢め？。』

基督『我言不可ならば、其の不可なる所を示せ、可ならば、何故我を打つか？。』

アン『何んだと!!貴樣は吾等と爭ふ積りか？知らずや、貴樣の生命は吾等の掌中に在ることを。』

バン(基督に向ひ)『待て〳〵、貴樣の高慢な鼻を頓て折挫つて遣るから。』

アン『何は兎もあれ、斯く捕縛した上は、有終の美が肝腎、明日は早朝高等法院に集まつて、萬事評議の上決するであらう。』(是に於て一同出づ)

△基督(捕手の中に在り)

捕手セルファに向ひ『評議が最う定まりましたか？』

セル『イヤどうも可哀相であつた、誰も辯護する者もない加之頰まで打たれると云ふ始末、まア〳〵曳て往つておくれ、カイファスの館まで。』

捕手『コラ歩るけ、歩るかんか。』

△ペ(ペートルス)とヨ(ヨアンネス)(アンナ館の前)司祭一名

ペ『師はどんな酷遇を受けて居らるゝことであらう、ヨアンネス君、僕は心配でならぬ。』

ヨ『屹度種々の罵言嘲笑に遇つて居らせらるゝに相違あるまい、僕は此館に近づくと、何んだか腹の蟲が……』

ペ『ケレドモ四邊がいやに靜穩なやうである。』

ヨ『如何にも寂として聲がないが、最早引て行つた後ではあるまいか？』

一司祭(二使徒の前に出で來り)『お前さんがたは此處に何をして居るのかい？』

ヨ『御免なさい、私共は遠くから大勢の人の集合を見ましたから、何事があるかと思ひまして。』

司祭『彼の基督と云ふ犯人を促まへて來たのであるが、既にカイファスの館に引伴れて往つた後だ。』

ヨ『あゝ左樣で御座りますか。』

ペ『私共は又何事かと思ひまして』。(二使徒立去る)

司祭(之を目送して)『彼の二人は何だか怪しい奴だ、彼の謀反人の弟子ではあるまいか、然しちやんと見覺が附いて居るから大丈夫々々々。』

△捕手、セル(セルフア)、バル(バルブス)、メル(メルキ)等基督を曳きてカイファス館に入る

捕手『貴樣は萬民の好見物だ。』

バル『サア急いで歩かぬか、貴樣の徒黨は屹度貴樣を望み通りイスラエルの王に立てゝやるだらう、アハアハ……。』

メル『貴樣は度々之を夢想したことがあるだらう。』

捕手『貴樣の念願今や成就だ……素志達矣かな。』

セル『我大敎官カイファス樣は貴樣の夢を成就させてやるだらう。』

バル『やい、聞いたか？大敎官カイファス樣は頓て貴樣を王に立てゝやると。』

捕手『左樣々々、天地の間に於て貴樣を王に立てゝやるであらう。』

△館內、カイ(カイファス)、司祭、ファ(ファリゼイ)人等

カイ『各衆の助勢で思ふより早く事の運びがつきました。』

司祭『是も皆我大敎官樣の御威光で。』

カイ『さア是からは一刻も早く裁判の結末をつけぬばならぬ、夫にしても證據人が必要である、サムエル？證據人を召喚せい、尙貴樣は捕手に犯人を引出すやうに言へ。』

ファ人一同『何事も大敎官の御明斷によつて、直ぐに決定することで御座りませう。』

カイ『左樣、本官には胸中に成算がある、御安心なされ。』

ファ人一同『吾々祖先の神も大敎官の御賢慮を祝して下さるでありませう。』

△如上の人々、捕手基督を曳來る、證據人數名

セル『大敎官樣、犯人を曳來りまして御座りまする。』

カイ『モット近う引寄せい、本官の自由に見られるやうに。』

セル『サアモット近く進み出ろ、進み寄て大敎官樣を畏こみ敬へ。』

カイ『國民を煽動し、モイゼスの法を蔑にせる者は貴樣か？貴樣が我々の先祖の道を輕んじ、安息日の法を屢々破つたとの事、茲に證據人も出て居ること、汝說あらば、能く辯護せよ。』

甲證據人『私は神に矢つて證據いたします、被告は確に人民を煽動し、高等法院の學士教官等を公然侮辱して、僞善者であるの、羊の皮を被れる狼であるの、盲者を導く盲者であるの、此等に服從する義務は斷じてないなどゝ公言して憚らざる不忠漢であります。』

乙證據人『私は尙其上に證明いたします、被告イエズスは人民を惑はして皇帝に納稅の義務はないとまで公言しました。』

甲證據人『如何にも被告は此事に就て少くも再度まで公言したに相違ありませぬ。』

カイ『貴樣は之を聞て何と言ふか？默つて居るか？』

丙證據人『私も屢々見ましたことが御座ります、被告は法を蔑にして、其の弟子等と共に手を洗はずして食卓に就て居りました、尙聞く所に據りますれば、收稅吏などゝ親しく交際して、其等の家に出入し、剩へ其等と會食までして居ると云ふ事で御座ります。』

丁證據人『如何にも吾等は屢々此事を聞見いたしました。』

丙證據人『信用するに足る人々の話に據りますれば、サマリア人とも語り、其者等の家にも逗留したと云ふ事で御座ります。』

甲證據人『私は現に被告が安息日を破つたのを見ました、安息日に當り、法に禁じられて居る事を行ひ、病人などを癒し、人々にも勸めて眞似をさせ、現に私も見て居りましたが、或人に其の擔架を擔いて家に歸るやうに命たことが御座りました。』

カイ『此等の證據人に貴樣は何と答へるか、何も辯護することが出來んか？。』

丙證據人『被告は又神の權を僭して、人の罪を赦す權があると云ふやうな言動をいたしました、此は私が實見しましたことで、僭越も亦太甚いと思ひます。』

甲證據人『被告は勿體なくも在天の神を我父であるの、我は天父と一體であるの、神と同等であるの、實に冒瀆至極の言を吐いて居る者で御座ります。』

乙證『可笑くも又憎む可きは、被告が我々の祖先アブラハムを凌いで、我はアブラハムの生れざる先きに生きて居つたなどゝ語つたこともあります。』

丁證『被告は又大言して曰ふには、我は神の堂を毀つて、復た三日目に之を再建することが出來るなどゝいつたのであります。』

カイ『果してさることあらば、貴樣は自ら神の權があると言ふもので、其罪中々重大である、證據人が斯く口を揃へて立證する上からは、よもや嘘僞はあるまい、それとも、說あらば、辯護せよ？（基督默然たり）、默つて居さへすれば事がすむと思ふか？或は又吾々の面前を恐て言はぬのであるか、然らば聞け、本敎官が活ける神に因つて貴樣に問ふから、屹度答をせよ、貴樣は果して救世主か、果して神の子か？。』

基督『然り、言の如し、我れ斷言す、異日人の子は世界萬民を裁判せんが爲に、雲に乘りて天より降り、神の威稜の右に座さん。』

カイ『アヽ、何たる瀆神の言ぞ!!!、此上は最う他に何の證據も要らぬ、諸君も今聞かるゝ通りである、偖て諸君は何と思召さるゝか？。』

一同『死刑々々……。』

カイ『然らば輿論によつて、死刑と一決した、然し之が宣告を下すのは本官でもなければ、高等法院でもない、神の法である、法學者よ、モイゼスの法では國權に服せざる者を如何なる罰に處するか？語られよ。』

司祭法典を讀む、『傲慢を以て司祭の法、若くは判官の宣告に不服を唱ふる者は、法將に死す可し。』

カイ『安息日を破る者に對しては、何の刑罰がありますか？』

乙司祭『我が安息日を守る可し、聖日なればなり、之を破る者は、法將に死す可し。』

カイ『冒瀆者に就ての刑罰は如何？』

甲司『イスラエルの人民に語れ、主の名を冒瀆する者は、死刑に處す可し、民は石を取つて之を打殺す可し、そは內國人たると海外人たるとを問はざるなり。』

カイ『由是觀之、法によつて被告は明に死刑に處せるらべきものである、此上は一刻も早く處刑の手續に及ばんければならぬ、明朝は早く其の手續を取るがよからう。』

セル『コレ、救世主とやら、貴樣に貴樣の御殿を見せてやるから來い。』

バル『貴樣は其處に拜謁を受くるであらう、アハハ……。』

カイ『明日は早朝又再び會合し、全會一致を以て宣告を確定しませう程に、犯人は直ぐに奉行ピラトの館へ曳往き、奉行の承諾の上、處刑を急ぐやうにしませう。』

司祭『さなり、さなり、一刻も早く公敵を退治て了はなければなりませぬ。』

△ペ(ペートルス)、ヨ(ヨアンネス)、ア(アガール)、サ(サラ)、(後者の二人は婢女なり)、メ(メルキ)、アル(アルファキサド)、バ(バンテル)、セ(セルファ)、兵卒、從僕、婢女等

ア(ガール)入りながらメ(ルキ)に向ひ『さアあなたがたもお入りなさいまし。』

サ『此處の方がズットよろしうございますよ。』

メ『イヤ難有う、オイ、君方、此方へ來給へ、此處の方が餘程氣樂だよ。』(兵卒等入り來る)

ア『成程いゝネー此處は、早く來ればよかつた、馬鹿なことをした、いつも青天井の下にばかり居るから寒くて堪らん。』

バ『おサラさん、後生だから薪を持つて來てくれませんか。』

サ『ハイ、かしこまりました。』

兵卒『裁判がモウ直に終結か知らん。』

メ『證據人に一々問合せた上でなければ、中々終結ものぢやない。』

バ『彼奴被告め、一生懸命で辯護してゐるだらう。』(アガールとサラ歸り來る)

ア『ハイ薪を。』

サ『ハイ石炭も。』

兵卒『姉さん有難う。』

バ『どうだい、御覽？よく燃えること、今度消えないやうにしやうぢやないか。』

ア(ガール)闕の上に來かゝりたるヨ(アンネス)に向ひ『ヨアンネスさん、今頃どうして來たの？サアまあお入りなさい、入つておあたりなさいよ、ネーあなたがた、此の若い方をもあたらせて頂戴いナ。』

兵卒『サア、おあたりなさい……モツとお進みなさい。』

ヨ『アガールさん、私は一人の友達と一緒に來ましたが、入れてもよからうネ？。』

ア『何處に居りますか、外にッて……早くお入りとお言ひなさいよ、この寒いに……（ヨアンネス、ペートルスをたづねに行く）……どれ何處に居るのです？』

ヨ『イヤー、彼處に居た、あの門のとこに、遠慮して這入らずに居るのだ。』

ア『サアお入りなさいなネ、なにも遠慮は要りませんぢやありませんか。』

兵卒『サアお出なさい、おあたりなさい。』（ペートルス恐る〳〵火に近づく）

甲從僕『未だ被告に就ては何の話もありませんか？』

兵卒『いつまで此處に待たなければならないのだらう。』

乙從僕『多分訊問が全くすんで、被告の死刑に處せられるまでだらう。』

甲從僕『彼の被告の弟子達をも追捕するのか知らん、知りたいものだなア。』

兵卒笑ひながら『夫等のものまで皆んな捕へなければならぬならば、大變だらうよ。』

乙從僕『ナアーニわきやないよ、一たび彼等の巨魁が捉まつた上は、彼等は皆んなチリ〳〵バラ〳〵で、一人もイエルサレムに居なくなるだらうよ。』

甲從僕『だが少くも彼のマルクスの耳を切落した奴を捉まへて、酷く罰してやらなければなるまい。』

兵卒等『然だ〳〵、『耳を以て耳に』と云ふ法を當箱めてやらなきやなるまい。』

甲從僕『イヤ其法は當箱らん、マルクスは再び耳を附けて貰つたもの。』

ア（ガール）ペートルスをつく〳〵と眺めながら、『疾からわたしはお前さんを見て居るが、屹度お前さんは彼のガリレア人の弟子に相違ありません、屹度然でせう。』

ペ『何を言つてるんだ、おかしな女だね、私はそんな人を知らんよ。』（ペートルス少しく〳〵アガールの所を去りて、サラの方に近づく）

サ『それ御覽なさい、此人があのナザレットのイエズスの弟子であつたんです。』

一同『さう？』

ペ『何を馬鹿言ふんだろ、私は如斯人を知りませんと云ふのに。』（鷄鳴く）

丙從僕『御覽よ、私はよッく知つてるが、此人は始終イエスと一緒に居たんだよ。』

ペ『何んで其樣に私をうたぐるの？私は如斯人と秋毫も關係ありません。』

一同『イヤ〳〵お前は屹度其の弟子に違ない、お前のガリレア人であることは、かくさうと思つたつて、その發音で知れるぢやないか。』(鷄再び鳴く)

丙從僕『馬鹿を言へ、俺れは貴樣を彼のゼツマニアの森の中で見たぢやないか、現に貴樣は俺の叔父のマルクスの耳を切落した者だ。』

兵卒火のそばに在り『お默りよ、被告が曳かれて出て來たぢやないか。』(セルフア基督と共に出で來る)

乙從僕『どうしたの？』

セ『愈よ死刑サ。』

兵卒等嘲笑しながら『可哀相な王だなアー』(基督後を顧みてペートルスを睨む)

△ペ(ペートルス)、ヨ(ヨアンネス)

ペ『アヽ師よ、私は遂々失墜ました、アヽ私のやうな弱い者はありません、死すとも斷じて師を見捨るやうなことは致しませんと矢た舌の根の未だ乾かぬに、早や師を見捨てゝ了ひました、而も三度までとは、我ながら吾身の意氣地のないのに呆れるばかり、アヽ終焉の悔恨、然し師にして私を赦して下さるならば、今後は決して〳〵背かじと矢ひますから、何卒お赦し下さるやう偏に願ひまする、如何にも師が私を顧みました時の御愛憐の眥、必ず私を赦すとの御知らせに相違ないと推しまする、何卒々々……以後は決して〳〵……。』と云ひつゝ遠ざかる)

ヨ『ペートルス君は何處へ往つたのであらう、何事もなければよいが、ことによつたらペタニアの途中で會ふかも知れぬ……それはさうと彼のユダスめ、飛んだ罪惡を企でたものだ……。』と云ひつゝ出づ)

△基督兵士の中に座す

甲『大王、此の玉座は似合まするかナ。』

乙『叡聖文武皇帝陛下、イザさらばお腰掛遊ばせ、ソレ倒ばぬやうに。』(故意と倒さんとする)

丙『大預言者だと云つたつけな、(打ちながら)コラ大預言者、今打つたのは誰だッ？默つて居つてはいかんぢやないか、啞か？』

丁、搖動りながら『坊やは善い兒だ、ねんねしなア、大きな坊やだ。』

戊、腰掛をひつくりかへし『イヤー王樣がお倒れ遊ばした。』

己、起しながら『萬能の王、お起き遊ばせ、ユデアの王、御機嫌麗しう。』

カイファスの使者入り來り、『天機伺に參上しましたが、新王の御機嫌は如何さま？』

兵士『どうも龍顏麗しからぬので、一言も仰せられぬ故、仕方が御座らぬ。』

使者『大敎官樣と御奉行樣(ピラト)が頓で言を吐かさせられるでありませう、兎に角伴れて參れとの御諚。』

一兵士腰掛を取りながら『貴樣の天下も最早終局だ、さア起て……。』

衆兵『御道中お靜に、エヘヘヘ……。』

△ユダス

『アゝしまつた、あのアンナの館に於て聞いた言によれば、是非とも殺して了はなければならぬとのこと、而して其の殺される原因が我であるとは、サテサテ困つたことになつた、然し事の次第はどうなつたものであるやら、兎に角入つてみやうか。』(と云ひつゝ館に入る)

△カ(カイファス)、ア(アンナ)、司(司祭)、フ(ファリゼイ人)

カ『本官は一刻も早く公敵の死刑に處せられんことを希望する。』

ア『本官とてもその通り、彼れの死せざる內は、一日も枕を高うして眠ることが出來ませぬ。』

一同『御安心なされまするやう、彼れの死列は最早確定したことでありますればば。』

カ『如何にも彼が自らを神なりと言ひし狂慢無禮の一言により、死刑と衆議は一決したが、たゞその刑の執行が一刻も早く急いで貰ひたい。』

司、フ『我等一同も證人となつて、彼れが瀆神の言をたしかめました上は、最早遲疑するにも及びません、間もなく死刑に就くでありませう。』

△如上の人々の中にユダス走り入る

ユ『本統に吾師を死刑に處したのでありますか？』

司『何んでお前さんは召喚もせぬに、本館に入つて來ますか、出て往きなさい。』

ユ『イヤサ、本統に死刑と定つたのでありますか。』

一同『知れたことさ。』

ユ『アヽしまつた、しまつた、我れ大逆を犯せり、我れ義人を渡せり、さるにても殘酷な者共よな、罪なき者を死に陷ゐれるとは。』

一同『默りなさい、ユダスさん、お前さんの知つたことでないョ。』

ユ『ナント？知つたことでないと？義人の血は復讐を叫んで居るではありませぬか？』

カ『何を仰有しやる、こゝは誰の面前だと思ふかネ？高等法院に居るを忘れてはいけませんよ。』

ユ『完全無缺一點の罪なき義人を死刑に處するとは、そは貴官等の權内の事であるまいかと思ふ、私は其の判決には反對であります、私を反謀人となさる積ならば、あんな不義な金は要りません……。』

ア『なんだネ、お前の方から自ら進み出て賣ると云つたではないか？』

ユ『私は破談致します、人身賣買などは出來ませぬ、義人を放免して下さい。』

一同『狂者見たいだ、本館を出なさい。』

ユ『エー鬼共の集合、猛獸にまさる殘忍を以て義人の血を流さんとするか、不義の金、さアあげます。』

カ『何も彼もお前さんの罪だ、何せ我等に賣渡したのだ？』

一同『さうです〳〵。』

ユ『さればこそ我は死んで了ふ積……。』

一同『默つてお出なさい。』

ユ『出てはいきますが、たゞはおきませんぞ、地獄に往くならば、貴下方と一緒に。』

……（失望の體にて出去る）

ヒラト及びヘロデスの館邸

（D）ヒラト及びヘロデスの館邸　大會議の決議と雖、死刑の宣告はローマ皇帝の代理者が許可せざる以上は、之を下すこと能はざりしことゝて、司祭長、宿老及び法學者等は基督を當時ユデアの方伯なるピラトの許に曳往けるに、彼等は汚れるを恐れて、法衙に入らざりしかば、ピラト自ら出でゝ之を迎ひ、如何なれば此人を訴ふるかと曰へしに、彼等は惡人にあらずば、吾等曷ぞ之を渡さんやと答ふ、ピ

ラトは汝等の法律に從て之を裁判せよと曰へば、彼等は吾等に人を殺すの權利なしと云ふ、卽ち是れ基督の預言せし所の成就せられん爲にてありき。

因て彼等は基督を訴へ、此者は國民を惑はし、ローマの皇帝に貢稅を納むるを妨げ、尙自ら稱して王者基督なりと云へりと曰ひしかば、ピラトは法廷に入り、基督を召致して左の如く尋問す。

ピラト『爾はユダアの王なるか？』

基督『爾自ら之を言ふや、將又之を爾に告げたる者あるか。』

ピラト『我豈ユデア人ならんや、爾の民と司祭長等爾を我に付せり、爾は一體何を爲したるか？』

基督『吾國は此世のものにあらず、若し吾國此世のものならば、我が臣僚必ず我が爲に戰ひ、我をユデア人に付さざるべし、然れども吾國は此世のものにはあらざるなり。』

ピラト『然らば爾は王なるか？』

基督『爾の言の如し、我の此世に生れ來りしは、眞理を證明せんが爲なり、凡て眞理に屬する者は我言を聽く。』

ピラト『眞理とは何ぞや。』

言ひ畢りて再びユデア人と語れり。

案ずるに基督敎學者の說に據れば、(基督を神にして且人なりと前提するが故に、基督を二種の王者なりと云ふ、卽ち神としては自ら創造せる宇宙萬有の王なりとし、人としては自ら救贖せる一切人類の王なりとす、而して基督のピラトに答へたるは、後者の王者として答へたるものにして、此種の王權を行ふが爲に此世に生れ、此世に來れりと曰ひたるものなり、此の王國は預言者の預言し、使徒等の宣傳せし所のものにして、地上に於ける神の御國とも云ふべく、天上に至りて初めて完全となり、天國と稱するもの卽ち是なり、要するに基督の所謂王國は敎會なり、基督を信仰する信徒の集合卽ち基督敎會と指すものなり、人は基督を信じて此の敎會に入るが故に、基督は個中の眞理をピラトに知らしめんが爲に、『我は王なり、我の此世に生れ來れるは、眞理を證明せんが爲なり、凡そ眞理に屬する者は我言を聽く』と曰へり、敎會は一種の精神界にして、王國には相違なけれども、此

世の所謂王國にはあらず、是れ精神界の王なる基督がピラトに向ひ、『我が王國は此世にあらず』と語りたる所以なりとす、此の教會こそは眞理の王國にして、正義と正理に依りて統治せらるゝものなるが、ピラトは其智此處まで洞察することは能はざりしが故に、『眞理とは何ぞや』と云ふが如き奇問を發せり、ピラトのみにあらず、世には眞理の何物たると又何處に在るとを知らざる者多し、道は近きに在れども、之を遠きに求むるは、世人の常にして、基督は道を說き、眞理を證明せんが爲に此世に生れたるものにして、基督自ら眞理の化身なるに拘らず、その眞理の化身たる基督を眼前に目擊しつゝ、『眞理とは何ぞや』と云ひ、宛も今人が基督教會に眞理のあるを認めずして、之を他に求めんとすると毫も異なる所なし、基督教會が此世のものにあらざるは、之を創設して、之を支持しつゝある眞理即ち基督が此世のものにあらずして、天上のものなるが爲なり、此の意味に於て使徒等も此世のものにあらずして、その權利、その教理等は之を世より受け得たるにあらず、此等は皆天にも地にも萬能の大權を有する基督より受け得たるものなり、故に基督は天父に向ひ、『彼等の此世のものにあらざること、宛も我が此世のものにあらざるが如し』と宣へり、實際基督の王國即ち其の教會は其の本源、其の權利、其の教法、其の目的等一切萬事を此世より取りたるものにあらずして、世は之に何をも與へず、然れども此に注目すべきは、基督は『吾國は此世にはあらず』と曰はずして、『吾國は此世のものにあらず』と曰へる事即ち是なりとす、基督の教會は此世に存在すれども、此世のものにはあらず、天上のものなり、異日天國となるべきものなり、此世に在りても神の王國なり。

ピラトは確に希臘羅甸の哲學者の賢哲に對する意見を承知したるが故に、基督の語れる所は、精神界を指して、物質界にはあらず、正理の王國を示して、暴力の王國にはあらずと云ふ位の事は解し得たるには相違なし、是を以て彼はユデア人に向ひ。

『我は此人に罪あるを見ず』と曰へり。

然るに司祭長及び宿老等は色々に訴へたれども、基督は一言も之に答へざりき、時にピラトは基督に向ひ、爾に對して斯くまで訴ふるに、爾之を聞かざるかと曰へるも、基督は默して一言の答をもなさゞりしかば、ピラトも太く驚けるに、彼の

ユデア人等は極力叫び訴へて、此者はガリレアよりイエルサレムに至るまで衆多の人民を煽動し、ユデア國中を騷がしめたる者なりと曰ひければ、ピラトはガリレアと云ふ語を聞き、基督はガリレア人なるかと問へり、彼等は然りと答ひたるが故に、ピラトは然らばヘロデスの管轄に屬すとて、當時イエルサムに在りたるヘロデスの許に遣はせり。

ヘロデスは基督を見て大に悅べり、其故は豫て基督に就ては色々の評判を耳にしたれば、疾より之を見んと欲し、何か奇蹟を行はしめ得べしと希望したればなり、是を以て種々の問を發したれども、基督は一言も答へざりき、司祭長及び法學者等は傍に立ちて頻りに基督を訴へて止まざりしかば、ヘロデスも衆卒と共に基督を侮り、白衣を着せて之を嘲弄しつゝ、又再びピラトの許に返しぬ、是より先きピラトとヘロデスは互に仇敵の如くなりしが、此時より親交を結ぶに至りぬ、ピラトは司祭長宿老及び民等を呼びあつめて、汝等は此人を我に携へ來りて、民を亂したる者なりと云へども、我は汝等の前に彼を鞫きしに、汝等の訟ふるが如き罪あるを見ず、ヘロデスも亦然り、我れ汝等をヘロデスに遣はせしに、彼も亦死罪に當るを見ざるにあらずや、故に我は彼を笞ちて釋さんとす。

ピラトが基督を釋さんと曰ひたるは、毎年逾越の節期には民の意に任せて、一人の罪人を釋すの例ありしが故なり、時恰もその節期に當りしを幸ひ、ピラトは飽迄も基督を釋さん考にてありしかば、故さら當時城下に爭亂を起して、人を兇殺せるが爲に囹圄に鎖されたるバラッバスと云ふ大盜を擧げ、ユデアの民に向ひて基督とバラッバスと孰れを釋すべきかと問ひ、心中竊に民衆は必ず基督を釋さんことを願ふならんと豫期せるに、事實は之に反して彼等民衆は司祭長及び宿老等に唆されて、大に呼はり、バラッバスを釋せと曰へり、ピラトが審判の座につけるとき、忽ち其妻より飛報あり、郎君請ふ、此の義人に關係する勿れ、われ今日彼につきて夢の中に太くなやまされたりと曰ふ、因てピラトは民衆に向ひ、然らばユデア人の王なる基督を如何にか處分すべきと曰へば、民又一齊に叫んで曰く、十字架に釘よと、ピラトは彼れは何の惡事をなせしや、我れ實に彼を殺すべき罪あるを認めずと曰へども、民は益す喊叫て、十字架に釘よと曰ふ、是に於て乎ピラトもその言の益なくして、徒らに亂の起らんことを憂ひ、水を取りて民衆の前に手を

洗ひ、我は此の義人の血に對して罪なし、汝等自ら之に當れと曰ひしに、民咸答て曰く、其血は吾等と吾等の子孫の上に被るべしと、斯てピラトも詮方なくバラッバスを釋して、基督を鞭ち、之を十字架に釘ん爲に付せしかば、兵卒等基督を携へて公廳に至り、全營を其下に集め、基督の衣を褫とりて絳色の袍を着せ、荊棘にて編みて、その頭に冠らしめ、又笏に擬へて葦を右手に持せその前に跪き嘲笑して曰く、ユデアの王安かれ、また前に唾し、その葦を取りて基督の首を打ち、頭上の荊棘の冕を緊縮て紅の血に塗へしむ、此時ピラトはユデア人が此の如き慘憺たる光景を見て、必ず憫情を催すならんと思ひ、基督を曳き出して、衆人の前に示して、『看よ人をと曰ひしが、民衆は狂ひ叫びて尚も十字架に釘よ、十字架に釘よと叫はりければ、ピラトは到底濟度すべからざる民なりと看做し、汝等彼を取りて十字架に釘よ、我は彼に罪を見ずと言ひ放てば、ユデア人は之に答ふらく、吾等に律法あり、其律法に從へば、彼は罪正に死すべし、何となれば自ら稱して神の子と云へり、ピラト之を聞きて憂慮に堪へず、再び法廷に入りて基督に爾は何處の者ぞと曰ひたれども、基督は之に返答せざりしかば、爾は我に返答せざるか、我に生殺の權あるを知らざるかと曰ふ、基督は此時答ふらく、爾は上天より權を賜らずば、我に對して何等の權もなし、されば こそ我を爾に付せし者の罪最も大なれ、其後ピラトは尚も基督を釋さんことを謀りたれども、ユデア人が相變らず叫び狂ひて、貴官若し此者を釋さば、セザール(ローマ皇帝)の忠臣にあらず、何となれば自ら稱して王と云へる者は、セザールの敵なればなりと曰ふ。

ピラト此の言を聞きて基督を曳出し、鋪石と云へる所、ヘブレア語の所謂ガッバタと云ふ所の審判の座に坐きぬ、其日はあたかも逾越の備日にて、時刻は凡そ十二時頃なりき、ピラト、ユデア人に汝等の王を見よと曰へば、彼等叫びて、之を除け、之を除け、十字架に釘よと曰ふ、汝等の王を十字架に釘くべきやと曰へば、司祭長等は吾等にはセザールの外に王なし、是に於て乎ピラトは遂に基督を十字架に釘しめん爲に彼等に付しぬ。

基督の磔刑

(E)基督の磔刑　斯くて兵卒等基督に絳色の袍を脱がしめて、故衣を着せ、十字架を荷はしめて、イエルサレムを出で、カルワリオ(一名ゴルゴタ)と云へる刑場へと曳き往けり、(ゴルゴタとは髑髏の意味なり、相傳ふ、此處は元祖アダムの骨を埋め

基督イエルサレムの婦人を慰む

し所なりと)、基督は行く〳〵十字架の重きに得堪へずして、屢々仆れしが、折しもシレネの人シモンと名くる者に往遭ひしかば、兵卒等は此人に強て基督の十字架を助け擔はしめ、基督の後に尾して歩ましむ、途中ウェロニカと云ふ女群衆の中より走り出で、基督に帛を献ぐれば、基督は自ら面を拭ひ、面影を帛に寫して之を與へたり。

時しも基督に隨行せる衆人の中に篤信の婦人數名ありて、胸を打ちつゝ、太く基督の爲に泣き悲めば、基督は之を顧みて自らの苦みを忘れ、彼等を慰めて宣ふやう、イエルサレムの婦人よ、我の爲に泣く勿れ、汝等及び汝等の子孫の爲に悲む可しと。

此時二人の盜賊をも死刑に處せん爲め刑場に曳き往けり、頓てカルワリオ山に到着するや、沒藥と苦膽とを混和たる酒を飲ましめて、苦痛の感を輕減せんとしたれども、基督は自ら苦を忍ぶことを覺悟したれば、之を嘗めしのみにて、飲むを肯せざりき。

兵卒等は基督の衣を剝ぎとりて裸體となせり、其時衣は創に附着して、痛きこと

十字架に釘せらる

云はん方なかりき、頭上の冠も障なりとて取除けたるを、復もや元の如く押冠らしめ、午後三時と覺しき頃、遂に之を十架に釘付にす、その釘付にするときには、手足を控り、釘を差込み、金槌にて強く打附けたりと云へば、右の手を先きに打附けたるとき、左の手は縮みたるを、兵卒等は無情にも手足に繩をかけ、力に任せて引きのばし、釘を以て一聲高く打附けゝれば、その疵口より流血淋漓として、實に目も當てられざる光景なりき、此時基督の左右に二人の盜人をも磔刑に處したれば、基督は全く罪逆人の中に加へられたり。

抑々十字架の刑は特に羅馬人の間に行はれたるものなるが、これは主として奴隷を罰するが爲に用ゐたり、其の方法は羅馬の史家も記したるが、福音記者の語る所と符節を合するが如し、之に處せられたる罪人は、先づ始めに笞刑を受け、その後自ら十字架を擔ふて、刑場に赴き、手足に釘を差込みて打附けられたり、手足の縮みて、自由に打附くること叶はぬ恐ありとて、繩を以て之を引きのばすの用に充てたり。

案ずるに此の山は昔より由緒ある山にて、アブラハムが其の獨子イザークスを

神に献げんとしたるは、正しく此の山なりと云ふ、蓋しアブラハムは天父の前表にして、イザークスは基督の前表なること、必ずしも詳説せずして知る可し、降てダヴィド王が慶殺の天使の禍を免れんが爲に、祭壇を築きて祭を獻げたるも、此山なりと云ふ、此等は舊約書と參照して見るときは、頗る面白き研究なれども、茲には此の如き研究を爲すの遑なし。

十字架上の標札

ピラトは十字架の上に、ヘブレア、ギリシア及びローマの語にて、『ユデア人の王なるナザレットのイエズス』と記したる標札を付けたるに、夥多のユデア人此の標札を讀みたれば、司祭長等をしてピラトに迫まり、『ユデア人の王』と書する勿れ、『自らユデア人の王なりと云ひたり』と書すべしと曰はしめたれども、ピラトは『書したるものは既に書したり』とて之を拒絶せり。

基督の所有物とては何にもなく、唯衣裳のみなりしが、兵卒等は之を四分けて分配せり、上衣は縫目なき衣なりしかば、之を分たずして鬮取にせり。

十字架の近傍を往來する者は皆基督を嘲弄し、首を振りて曰く、汝は神の堂を毀ち、三日目に之を再建すと曰へる者、今汝自身を救へよ、汝若し神の子ならば、十字架より下りて見よと、司祭長、法學者及び宿老等も民と共に基督を嘲弄して、他人を救ふて、自ら己を救ふこと能はず、若し果して神の愛する所の者ならば、今之を救ふべし、彼は自ら神の子なりと云へばなりなどゝ、罵詈嘲笑到らざる所なかりき、されば兵士等も近寄りて之をのゝしれり、然るに基督は天父に祈りて、父よ、彼等は何のわきまへもなくして斯くなせば、之を赦し給へと云へり、甚しきは基督と共に磔刑に處せられたる盗賊の一人すら、基督を譏りて、汝基督ならば、汝と吾等とを救へと曰へしが、他の一人は之を聞き咎めて曰く、汝は神を恐れざるか、吾等は犯せる罪の報なれば當然なれども、此人は毫も惡を爲したる者にあらずと、基督に向ひ、主、その國に到らんとき、我を憶ひ給へと申しければ、基督は今日汝我と共に樂園に在らんと曰へり。

基督と二人の盗賊

マリアとヨアンネス

尚十字架の下には基督の母マリア及びその妹クレオバの妻なるマリアとマグダレナのマリア並に基督の最も愛せる弟子ヨアンネス等が立留まりて、太く悲歎に沈みぬ、此時基督は母に向ひ、ヨアンネスを指して、是れ汝の子なりと曰ひ、ヨアンネスに向ひては、マリアを目して、是れ汝の母なりと曰ひしかば、ヨアンネ

スは是よりマリアを己が家に伴ひ行きて、己が母の如くに孝養を盡せり。

(16)基督の死去

基督の死去

斯くて晝の十二時より三時に至るまで地上遽に闇黑となりぬ、此の時刻に當り基督は臨終の聲を揚げ叫びて、『エロイ、エロイ、ラムマ、サバクタニ』(神よ、神よ、何故我を見捨て給ふや)と曰へり。

これはダヴィド王の詩篇第二十一章の句にして、基督は之を引いて自身に適用せり、實に此の章の詩句は基督の受難史の如き感を起さしむ、左に之を掲げむに、

『わが神、わが神、なんぞわれをすてたまうや、われは蟲にして人にあらず、世にそしられ民にいやしめらる、すべてわれを見るものは、われをあざみわらひ、口唇をそらし、首をふりていふ、神は神によりたのめり、神助くべし、神かれを悅びたまふが故にたすくべしと、犬われをめぐり、惡きものゝ群われをかこみて、わが手および わが足をさしつらぬけり、わが骨はことごとく數ふるばかりになりぬ、惡きもの目をとめてわれをみる、かれらたがひにわが衣をわかち、我がしたぎを鬮にす、われなんぢの名をわが兄弟にのべつたへ、なんぢを會のなかにて讃たゝへん、地のはては皆おもひだして主に歸り、もろくの國の族はみな御前にふしをがむべし、主のものなればなり、主はもろ〳〵の國人をすべをさめたまふべし。』

酢を飲ましめらる

司祭長、法學者及び宿老等はダヴィドの詩篇を能く記憶し、基督に對しては宛も同詩篇の言葉を假り來りて嘲笑侮辱したるが如き感ありて、其の言葉が不思議にも兵士、民人及び彼等自身によりて實現せらるゝを見たれば、基督の斯く叫びたるを聞かば、直に目を開てさとるべき筈なるに、頑冥固陋なる彼等は見て見ぬふりをなせるぞにくみても餘ある、然れども或者は基督が『我神』と云ふをヘブレア語にて『エロイ』と叫びたるを見て、多分預言者エリー(エリアス)を呼ぶならんと曰へるも可笑し。

偖基督は萬事成就せられたるを見て、『我れ渴きぬ』と曰へば、一人の兵卒酢を海綿にひたし、竿の先きに付けて基督に飲ましむ、是も詩篇第六十八章『わが渴けるときに醋をのませたり』と云ふに應ず、此時基督がエリアスを呼べりと思へる者共は、しばらく待ちて、エリアスが果して彼を助くるや否を見んなどゝ言合へり、基督は酢を飲みて後『萬事皆成就』と曰ふと同時に、また再び强聲を發して、『我父よ、我

絶命

が靈を御手に托す』と曰ひつゝ、其儘首を垂れて、玉の緒を絶てり。

時に聖堂の慢幕上より下まで裂け、地は震ひ、日は暗く、墓は開け死者は蘇へり、巖は破る、兵卒及び百夫長は之を見て大に恐怖の念に襲はれて曰く、彼は眞に神なりきと、此處に立てる群衆も此の奇蹟を見て胸を打ちつゝ默してイエルサレムに歸れり。

是日は節筵の備日にして、安息日の前日に當りたれば、安息日に屍を十字架の上に置くことを欲まずして、ユデア人はピラトに刑に處せられたる者の脛を折りて、その屍を取除くことを請へしかば、兵士等は基督と共に十字架に釘られたる盜賊の脛を折りて後、基督の下に來りしに、既に絶息したるを見て其脛を折らざりしが、一人の兵卒戈にて其の脅を刺ければ、直に血と水と流れ出でたり、これも預言に『其の骨の一をも摧かざるべし』と、『彼等の刺し者を彼等觀るべし』とあるに應へり。

茲にアリマテアのヨセフと云へる者にて、前にユデア人を懼れて隱に基督の弟子となれる者あり、基督の屍を取らんとて、夕方ピラトの許に至り、之を求む、ピラトは既に基督の死したるを聞きて驚き、百夫長にその眞僞を探らしむ、百夫長實際基督の死せし由を告ぐるに至り、ピラトは基督の屍を取りて付さしむ、茲にまたニコデムスとて曩に夜間基督の門を叩て敎を聽きたる學者ありしが、此人沒藥と蘆薈を和せ、凡そ百斤程携へ來りければ、ヨセフは之と共にユデア人の葬例に循ひて、屍を香と布にて裹めり、さて十字架の近傍に園あり、園の中に未だ人を葬りしことなき新らしき墓ありき、ヨセフは此日安息日の前日なれば、此の新らしき墓は己の爲に磐に鑿りきざましめるを幸ひ、基督の屍を其中に葬り、大石を轉して入口を覆ふて立ち去れり。

入棺

番兵墓を守る

翌日司祭長とファリゼイ人等ピラトの許につどひ來りて、彼の欺騙漢世に在りしとき、三日の後甦らんと云へしかば、請ふ三日の間墓を固く守らしめよ、恐くは彼れの弟子夜來りて之を竊み、死より甦りたりと吹聽するやも知れず、此の如くなればその惑益々甚しくなるべしと曰へば、ピラトは汝等に兵卒あれば、往て意の儘に固く守らしめよと答ふ、是に於て彼等は兵卒を遣して墓を守らしめ、且蓋石に封をなせり。

(17)基督の復活

基督の復活

基督の死後三日目の朝大なる地震ありて、基督は預言せる如く復活せり、時に天使降りて、墓の蓋石を轉し其上に座せり、見ればその容貌電光の如く、その衣服は白雲の如し、守兵之を見て大に怖れ、顏色蒼然宛も死人の如くなりぬ。

時しも篤信の婦人等用意の香物を基督の死骸に傳らんとて、墓に往く途次相語りて曰ひけるやう、誰か吾等の爲に墓の蓋石を除くべきと、然るに墓に到れば、石の既に除かれあるを見て、大に驚きぬ、墓の中を見るに、基督の屍なし、婦人等不審に思ひつゝ深く悲みしに、石上に座せる天使婦人等に曰ひけるは、汝等懼るゝ勿れ、汝等は十字架に釘られて死せる基督を尋ねんとて來れるならんが、基督は既に復活して、此處に在らず、その置かれし所を見よ、疾く往きてその弟子等に復活せる由を告げよと曰ひければ、婦人等は且つ驚き、且つ喜び、速に之を告げんものをと、走りて弟子等の方へと赴きぬ、時しも基督彼等に現はれて心安かれと曰ふ、婦人進み其足を抱きて拜しぬ、基督は尙婦人に早く去りて我が兄弟(弟子)にガリレアに往けと告げよ、彼處にて我を見るべしと曰へり、婦人の去るや守兵の中の或者イエルサレムに走り往き、凡て有りし事共を司祭長に告げしかば、彼等は宿老と共に謀りて、兵卒に巨額の金をつかましめて曰ひけるやう、汝等斯く吹聽すべし、彼れの弟子等來りて、吾等の寢たるに乘じて彼を竊めりと、此事設令ピラトの耳に入るとも、吾等彼に說きて、汝等に事なきを得せしむべしと、守兵等は金をつかませられたれば、言含められたる儘に吹聽しけるが故に、此話は今日に至るまでもユデア人の中に傳播せり。

門弟墓に走り往く

是より先きマグダレナのマリアは基督の死してより三日目の朝いまだ昧きうち、基督の墓に來りて、石が墓より取除かれしを見て、ペートルスとヨアンネスの許に趨り往き、墓より主を盜み取りし者あり、何處にあるや知れずと告げしかば、二人の弟子は急ぎて墓に走り往きしに、ヨアンネスは年若きことゝて、ペートルスより疾く走りて墓に先着し、俯みて屍を裹みし布の置かれしを見たれ共、遠慮して墓には入らざりき、ペートルスは一足之に後れて來り、墓に入りて裹布を見しに、其首を裹みし手巾は屍を裹みし布と共にあらずして、別の處に疊みて置かれたり、此時ヨアンネスも入りて同じく之を見、相共に基督の屍の奪はれたるな

基督マリアマグダレナに示現す

らんと思ひ、悄然として己が宿に歸りぬ。

マリアは墓の外に立ちて哭きつゝ、墓にむかひ倚しに、二人の天使白衣を着、基督の屍を置きたる所の首の方に一人、足の方に一人座し居れるを見たり、二人の天使かれに曰く、婦人よ、何ぞなげくや、かれ答ふらく、吾主を取りし者ありて、何處に置きしかを知らざればなりとて、反顧りしに、忽焉として基督の示現せるを見たれども、眞逆に基督ならんとは思はざりき、基督かれに、婦人よ、何ぞ哭くや、そもそも誰を尋ぬるかと曰ひしに、マリアは園丁にてもやあらんと意ひ、汝にても轉び移しゝならば、何處に置きたるかを告げよ、我之を取るべければと曰へるに、基督は、かれの耳にきゝなれたる聲を發して、一聲マリアよと曰ふや、マリア直に之をさとり、足下に平伏して、師の君よと曰へり、基督かれに宣はく、我未だ吾父に歸らざれば、我に捫る勿れ、とく往きて此由わが兄弟に告げよと云ふ言の下に、忽ち搔き消すが如く見えずなりぬ。

他の一方にては門弟等師に別れてより、悲哀に搔暮れしに、マグダレナのマリア來りて、此等の事を告げたれども、彼等は基督が活きてマリアに現はれたりと云ふ事は、聞きても信せざりき、ヤコブスの母なるマリア、サロメ及びヨアンナ等の婦人もその聞見したる所を語りたれども、門弟等は虛誕と意ひて之をも信せざりき、然れどもペートルスは趨りて墓に往き、かゞまりて梟布のかたよせ在るを見て、その見し所を奇みつゝ歸れり、然るにその後間もなく基督はペートルスにも現はれたりと云ふ、されば婦人等の中にて基督の第一に現はれたるは、マグダレナのマリアにして、門第の中にて第一に現はれたるはペートルスなりき、マグダレナのマリアと云へば、基督が七ッの鬼を逐出したる婦人にして、ペートルスと云へば、基督の受難の時之を知らずと拒みたる者なり、たゞ孰れも深くその罪を後悔したる者なれば、衆に先ちて復活後の基督をも見るの榮を得たり、といふ、後悔の德の大なる、おもふ可し。

門徒基督の復活を信ぜず

エムマウスに往ける二人の門弟に示現す

その日の午後に基督はエムマウスに行ける二人の弟子にも現はれたり、彼等は近頃有りし事共を語りつゝ道を歩めるに、基督容を變へて彼等の道連となりしに、彼等は之を知らざりき、此時師弟の間に交はされたる問答頗る奇なれば、左に之を記すべし。

基督『君等何を語り、又何を哀むや。』

クレオファス『貴下はイエルサレムの旅人なるに、獨り近頃ありし事共を知らざるか？。』

基督『そは又何事ぞ。』

弟子『ナザレットのイエズスの事なり、彼は神と萬民の前に於て言にも動にも大なる權能ある預言者なりしが、司祭長と有司等彼を死罪に處して、十字架に釘けたり、吾等はイスラエルを贖ふべき者は此人ならんと心頼みに思ひしに、此等の事共の行はれしより今日は早や既に三日目となりぬ、吾等の中なる或婦人等は朝早く墓に往き、その死骸を見ずして來り、吾等に天使現はれて彼は生けりと云へるを見たりと告げて、吾等を驚かしぬ、又吾等の中にも、墓に往きて、婦人等の語りし如くなるを見たる者あるも、彼を見出すこと能はざりき。』

基督『君等は預言者の言ひたる事を信ずる心の鈍き愚なる者なる哉、基督は此等の苦難を受けてその光榮に入るべきにあらずや云々。』

斯くて目指す村に近づきけるに、基督は故ら通り過ぎんとする狀をなせば、彼等は之にすゝめて、日將に暮れなんとすれば、吾等と共に止り給へと曰へば、基督は彼等と共に止り、共に食卓に就けるとき、パンを取りて之を祝し、擘きて彼等に與へければ、二人の弟子の目此時初めて瞭かになりて、その基督なることを識りしが、此時忽然として其姿見えずなりぬ、二人大に驚き、其夜急ぎてイエルサレムに走せ返りしに、他の門弟等はユデア人を怖れ、一堂に相集りて堅く戸を鎖しつゝ、二人の弟子の物語を聽けり、此時ペートルスに現はれたる話も出でしが、彼等の中には未だ信を置かざる者もありたり。

閉戸顯中

門弟等相變らず、一室に閉籠りて、此等の事共を話合ひ、色々協議をなしけるに、基督は戸の堅く鎖せるに拘らず、忽然門弟等の中央に現はれ、汝等心安かれ、我なり、恐るゝに及ばずと曰ひたれども、彼等は餘り意外の事とて、大に恐れて、靈にはあらずやと思へり、基督は重ねて宣はく、吾手と吾足とを視て、我なるを知れ、我に觸りみよ、靈は我の如く肉もなく骨もなしとて、手足と協腹をも示しければ、彼等は初めて主なることをさとりて大によろこべり、然れども尚半信半疑を抱く者ありしかば、基督は彼等に何か食すべきものありやと曰ふ、炙魚と蜜とを献ぐるを

取りて、彼等の前にて食し、殘餘を彼等に與へ、重ねて宣はく、汝等聖靈を受けよ、汝等誰の罪を赦すとも、其の罪赦され、誰の罪を拘むるとも、其の罪拘められるべしと。

時しも十二人の門弟の一人なるトマス、ヂヂムスと稱せられたる者其處に居らざりしかば、他の門弟は之に主を見たる由を告げしに、彼は之を信せずして、我は其手の釘瘡を見て、其疵に指をさしこみ、尙其の協腹に手を入れざれば斷じて信せずと曰へり。

トマス基督を見る

其後八日を經て門弟等相集り、トマスも彼等と偕に在りしに、基督は又もや戸の鎖せるに拘らず、忽然姿を現はし、汝等心安かれと宣ひつゝ、特にトマスを召し、汝の指を伸べて吾手を見よ、汝の手を伸べて吾が協腹を探れ、斷じて信せずと言ふを休めて、信を置けと曰へば、トマスは吾主なり、吾神なりと答ひしが、基督はトマスよ、汝は見て信じたれども、見ずして信ずる者こそ福なれと宣へり。

チベリアド湖畔に於て示現す

其後基督はチベリアドの湖畔に於て又々門徒に現はる、牧民の職をペートルスに授けたるは即ち此時なりとす、今基督の特にペートルスに語れる言を記さんに、『ヨナの子シモンよ、爾は彼等に優りて我を愛するか？』ペートルス『然り、主は我の主を愛することを知り給へり』、基督『我羔を牧せよ』、基督はまた二次曰く、『ヨナの子シモンよ、我を愛するか？』、ペートルス『主よ、然り、主は我の主を愛することを知り給へり』、基督『我羊を牧せよ』、基督は三次まで曰ひけるは、『ヨナの子シモンよ、我を愛するか？』、ペートルスは基督が三次まで我を愛するかと曰ひしを憂ひて答ふらく、『主よ、主は何事も知らざる所なし、我の主を愛することは疾より知り給ふ所なり』、基督『我羊を牧せよ』と、尙此時基督はペートルスが主の光榮の爲に如何なる死を遂くべきかを示したりと云ふ。

ペートルス敎會の首領となる

是より先き凡そ一ヶ年前基督はペートルスに向ひ、『ヨナの子シモンよ、爾は福なり、爾は岩石なり、我此の岩石の上に我が敎會を建てん、又我爾に天國の鑰を托すべし』とて、將來ペートルスが基督敎會の首領となるべきことを約束せしが、今は『ヨナの子シモンよ、我羔を牧せよ、我羊を牧せよ』とて、ペートルスに實際基督敎會の總牧の重職を授けたり、羔は信徒を指し、羊は牧師を指す語なりと云へば、ペートルスは信徒をも牧師をも牧する至上牧者なり、牧するとは民を敎へ且治むるの謂にして、昔は國王を稱して牧民と云ひたる習慣によりて、基督は敎會の敎誨

權と統治權をペートルスに與へんが爲に、牧せよの語を使用したるものなり、嘗て基督受難のときペートルスは三次まで基督を知らずと曰ひて拒めり、然るに今は基督より三次まで我を愛するかと問はる、茲にも深き意味のなくんばあらず、兎に角過失の有無は權利を受くるに妨となるものにあらざるはこれにより ても知るべし、人誰か過なからん、過て改むるに憚らざれば、また聖人たるを失はざるなり、ペートルスは三次過ちて基督に背きたれども、深く其の罪を悔ひ改めて、益す基督の愛憐を求め得たり、基督の愛弟なりしヨアンネスは其母マリアを托せられたりしが、ペートルスは基督の配偶と稱せらるゝ教會を托せられたり。

基督の昇天

(18)基督の昇天

基督は復活後屢門弟等に現はれて、天國の道を說き、教會の基礎を築きたるが、復活後四十日目に現はれたるは、最後の示現にして、此時門弟等に向ひ、イエルサレムを出でずして、同所に聖靈の降臨を待つべしと命じ、且宣はく、數日の後聖靈汝等の上に降り、汝等にイエルサレム、ユデア、サマリア及び地極まで我を證するの能力を賜はるべしと語りて後、最後の遺訓として左の如く語れり。

昇天の光景

『天にも地にも一切の權我に賜れり、是故に汝等往きて萬民を教へ、父と子と聖靈の名によりて洗禮を授け、我の汝等に命ぜし所を悉く守れと教ふべし、我は世の終まで常に汝等と偕に在るなり、信じて洗禮を受くる者は救はれ、信ぜざる者は罪せられん云々。』

語り畢りて基督は彼等を橄欖山に伴ひ往き、手をあげて彼等を掩祝し、これが最後の訣別なりとて、門弟等の面前に於て見る〳〵天に昇りぬ、頓て雲來りて之を遮れども、門弟等は尙も天を仰ぎて止まざりしが、忽ち白衣を着けたる二位の天使天降りて彼等に語りて曰く、

『ガリレアの人達よ、何故天を仰ぎて立てるや、汝等を離れて天に昇れる彼のイエズスは、今天に昇りしが如く、また復び天降り給はん。』

門弟等此言を聞きて拜禮し、イエルサレムに歸り、一堂に相集りて日夜祈禱しつつ聖靈の降臨を待てりと云ふ。

基督の言行は尙他にも許多あれども、かぎりある紙數固より悉く之を記す能はざれば、一と先づ茲に筆を擱くに當りて、基督の愛弟の言を引て本書の終局を結

ばんとす。

『イエズスの爲し事は此等の外になほ許多あり、若し之を一々しるしなば、其書この世に載盡すこと能はず。』

(II)基督の評論

(1)はしがき

チベリウス皇帝の御宇に當り、羅馬帝國は天下を一統し、宇内の覇權を掌握す、然れども世界の民は四千年間積惡の下に呻吟して塗炭の苦を嘗む、光は人心を去り、生命は人靈を離れ、世は殆ど暗黑世界となりぬ、此時に當りタボール山上、ユルダン河畔に古今獨歩の一大偉人こそ起りたれ、基督即其人なり。

其母は最と貧しき婦人、其居は環堵蕭然たる茅屋、其職は大工にして、鋸鉋を執り、額に汗して日々のパンを求めぬ、然れども斯の如く三十年間隱晦の生を送りて後、突如として社會に出で、萬民喫驚の下に、『我は世の光なり』『我は始なり、終なり、』『我は道なり、眞なり、生命なり』と公言す、豈啻其の言論のみ奇怪なりとせんや、彼は之と同時に病人を癒し、聾者、盲者、跛者等を癒して、彼自らも海上を歩し、暴風雨を鎭靜する等種々奇怪なる行動に出でたりと云ふ、彼れの命令するや、死は其の捕獲(死者)を復し、墓は其の犧牲(屍)を出せり、然りと雖一國震駭し、諸王其の玉座に恐懼し、學者其の講壇に震慄せり、嫉妬は其の鋭鋒を磨き、傲慢は其の毒矢を放ち、憎怨は『彼を殺さゞる可からず』と絶叫し、天下恟々、物議騷然、彼は遂に近東の一小國に於て、磔上に其の生命を屠られたり。

由來喬木は風の害多く、眞理は憎怨を產む、彼れ基督三十年飛ばず鳴かず、其の飛鳴するに當りて天地震撼、乾坤驚動せるも、忽にして其權勢と其の敎訓は一の磔と一の墓に歸し去りたるものゝ如し、然れども是亦彼れの深意の存する所、數百千年を經て、其磔は王冠の裝飾となり、其墓は萬民尊拜の聖地と變じ、世界文明の民皆俯伏して彼を磔上の聖人として崇むるに至りぬ、嗚呼是れ實に不思議中の不思議ならずや、然れども此は史上の事實にして且當眼の事實、誰か之を否定するを得むや。

嗚呼天下の讀者よ、諸子は之を見て如何なる感をかなす、古來偉人の起れる、一にして足らず、然れど大工の鋸鉋を變じて天下の主權と化し、廐と磔とを經て祭壇

までに上れる者は、吾未曾之を聞見せざるなり、是故に天下有識の士は皆此の事實を見て、『嗚呼是れ果して如何なる人物ぞ』と自問せざるはなし、余や固より淺學菲才、然れども彼れの性行事績を研鑽すること久し、而して今其の研鑽の結果、彼は實に世界最大の偉人たるの實を認む、請ふ余をして彼が一代の事歴を論せしめよ。

基督の偉大なる誕生

(2)基督の偉大なる誕生

人の誕生

彼れの誕生は實に不可思議なり、人の誕生何をか意味する、常には無意味なり、母の腹を藉り、無より一の有となりて世に顯れ出で、其の將來の事、幸不幸共に之を知る能はず、所謂人生の事、階前千里、咫尺辨せざるなり、人の世に生れ出づるや實に此の如し、虚無を背にし、未知を前にし、過去將來共に沈默世界、寂然として聲もなく臭もなし、是に由りて之を觀れば、誕生は一のプロブレムなり、プロブレムはプロブレムを解釋せざるなり、讀者よ、諸子の生出も亦此の如し、諸子の過去は啞者にして、諸子の將來も亦啞者なり。

然れども今之を境遇位地の方面より觀察すれば、人の誕生必ずしも無意味にあらず、然れども其の意味する所や小なり、設令金殿玉樓に生れたりとするも、其の御慶事たるや、單に祝砲若くは國旗等を以て祝意を表せらるゝに過ぎず、若夫れ記錄若くは史上に記載せらるゝに至らは、其の慶祝の最も大なるものならん、其の誕生にして將來の富貴權威、榮譽等を豫測せしせるが如きは、一見甚だ大なるが如くなれども、其實甚だ小にして、無意味と斷じ去るも不可なきが如し、强て人の誕生に大なる意味ありとすれば、辛苦艱難の之に隨伴し來る可きを示す位に止まらむ、然り、辛苦艱難は富貴權勢よりも尚一層人生に密接の關係あるものなり、然りと雖、其の誕生の意味する所大なりとするも、小なりとするも、富貴權勢を意味するも、辛苦艱難を意味するも、其の意味の究極に至りては彼此同一なり、即ち人は皆性來平等にして、其の誕生は單だ一の人間として世に出で來りたるを意味するに止まるなり。

基督の誕生

但だ彼の基督のみは大に之と其選を異にす、彼の誕生は啻に一の人間として世に出で來りたるを意味するに止まらず、世界最大の偉人として天より降れるを意味す、故に他の人に就ては誕生と云ふと雖、彼れ基督に就ては降誕と稱するの

尙一層適切なるを見るなり、天來の偉人なれば宜しく此の如く稱せざるべからず、余の斯く云ふ所以の者は、彼れの生れたる時に當りて、一國の民が王公の誕生を見たる時の如く、歡天喜地、絃歌洋々の裡に之を祝慶したるが爲にあらざるなり、彼は朔風凜冽の候、半夜萬籟寂たる時、廐に於て生れたりと云ふ、且具眼の士より之を觀るときは、金殿玉樓の如きは、人物の大を爲す所以にあらざるなり、然らば即ち彼れの誕生は如何なる點に於て常人と其趣を異にせるか、他莫し、彼は尋常一樣の人間として生れたるにあらず、千古の偉人、不可思議なる偉人として生れたるに在るを看取す、彼れの誕生に貴き所あるは、正しく『天來』の二字に在るなり、天來なり、故に常人の誕生と大に異るものあり、若夫れ彼れの貧に生れたるは後來其敎訓『眞福八端』の第一端に『心貧しき者は福なり』と語れる前代未聞の道義の素を豫め此時に成せるなり、彼れの謙遜して生れたるは、後日世に出でて彼の虛傲なるファリゼイの徒を叱責する資格を豫め此時に具有せんが爲にてありき、彼れの嚴冬寒夜に生れたるは、人生の事、忍ぶに在りと云ふ敎訓を豫め此時より既に實踐躬行して以て、世界大多數の貧民に其の龜鑑を示さんが爲にてありたき、遡べて茲に到れば、彼れ基督の誕生や實に大なる意味あり、意義深長なり、世界最大の偉人の誕生は實に此の如くならざるべからず、彼の富貴に誇り、邸宅に誇り、外來の裝飾に誇り、民人の祝賀に誇るが如き者、焉ぞ俱に共に語るに足らんや、偉人の待つ所は此の如き淺薄なるものにあらざるなり。

人の誕生と基督の誕生の相違

余は先きに語れり、人の生るゝや一方は虛無にして、一方は末知なりと、然り、凡て の人は皆虛無より出でゝ末知に向つて發足しつゝあるものなり、是故に凡て世に生れ出づる人を指して過去なき將來と稱し得べし、誕生は生存の端緒なり、隨て誕生に先だつものはなし、生れざるの始め即ち無何有の鄕に於ては何物か之あらん、生命以前は零なり、天下の人皆然り、古來聖人君子と稱せられ、英雄豪傑と稱せられたる者も亦皆然り、試に想へ、誰か孔夫子、ソクラテスの生れざる以前に、之を語りたる者やある、誰かアレキサンデル、セザールの生れざる以前に、之を語りたる者やある、生前如何なる功業偉勳を奏したりとするも、死後如何なる盛名と高訓を遺したりとするも、其の生れざる以前に於ては一人をも薫化する能はざるものなり、是れ何故ぞや、他莫し、誕生は生命の最始にして、之に先だつものな

ければなり、是れ實に人生一般の法則にして、天下何者か此則を逸する者あらんや、凡ての人は皆此の如く生るゝものなり、然るに今や之を彼の基督に見るに、獨り此の法則外に逸出す、彼は其の生れざる以前早や既に生存せり、何處にか生存せる、人類の記憶、想念、希望の中に生存せり、彼れの誕生のみは虛無の過去にはあらざりき、歷史に據れば、彼は四千年の過去を有せりと云ふ、即ち彼は其の生れざる以前より、天來の人物として、西方の聖人として、世界の大王として、將來の救世主として、世界萬民より大旱の雲霓を望むが如くに渴仰せられたる者なり、『アルシビアドよ、吾人は異日天來の人物の來つて、吾人に對神對人の道を敎ふべきことを待望せん』とは、是れ大哲プラトーンの其の門下生と共に語れる所ならずや、『吾聞く、西方に聖人あり云々』とは、是れ魯の聖人の語れる所なりと云ふにあらずや、猶太より世界の大王出でん』とは、是れ史家タシツス及びスエトンの其の歷史に記したる所ならずや、而して猶太の民の如きは其の生存の要件を全く『來る可き救世主』に措きたるは、人の普く捻知する所なりとす、然り、斯民は將來の救世主の信賴と希望とによりて生存したるものなり、文獻現に存す、就て徵すべきなり、それ此の如し、基督の過去に生存せるの事實は、彼の自ら稱して中華と云ひて、其他をば皆東夷南蠻西戎北狄と稱して、海外一切の事を侮蔑したる支那の社交的利己主義をしても、尙且自國の聖人をして、救濟主を海外に待望するを妨ぐることを能はざりき、彼の凡て希臘の者にあらずんば、野蠻未開、俱に共に語るに足らずと看做したる希臘の知識的利己主義をしても、尙且自國の大哲に、天來の人物を覬望するを禁ずること能はざりき、又彼の天下を席卷し、宇內を包擧し、四海を囊括するの意、八荒を併呑するの心ありし羅馬の政治的虛慢をしても、尙且自國の史家をして、猶太より世界の大王出でんと叫ぶを遏むること能はざりき、嗚呼基督の誕生や實に偉なり、大なり、彼は誕生以前に既に生存し、事蹟以前に既に歷史を有し、過去を動かし、世界を活かし、人類一切を自己の先驅者となしぬ、豈啻猶太一國の民をのみ自己の預言者としたる者ならんや是れ余の其の誕生を指して大に意味ありとなす所以なり、偉人の誕生は斯くありてこそ初めて愉絕快絕と謂ふべけれ、宜なる哉彼れの誕生が世界文明國の紀元となり、舊世界と新世界とを生前生後に二分して、兩界を兩手に指導しつゝあるや、偉人の誕生も此に至りて

は愉快の極に達せりと謂ふべし。

(3)基督の偉大なる言論

基督の偉大なる言論

基督の誕生の偉大なる事は、前章之を盡せり、然れども誕生とは畢竟何ぞや、人生の道に一歩を就くる事なり、生るゝは活きるの始なりとは、即ち此事なり、人の誕生は固より大切なり、然れども人生の一歩に於てのみ偉大なりとするも、未以て偉人とはなす可からず、是に於て乎其の誕生以上、即ち其の一生涯に於て偉大なる所以を講究せざるべからず。

人の心事と言論

人生は常に何によりて發露し、人の心胸の大小は常に如何なる道によりて他に顯るゝかと云ふに、言論によりて顯るゝ事は人皆之を知る、言葉は心の鏡なり、心術陋劣なる者は其言も亦陋劣なり、心胸寛大なる者は其言も亦寛大なり、内心の秘密は、人の言を聞て其の凡てを推知し得べし、人と爲りの如何を知らんと欲する者は、其言の如何を顧るを以て足れりとす、勿論人によりて言を廢せずと云ふことありとするも、天下の常法は『言是其人なり』と云ふに在り、果して然りとすれば、基督の偉人なるや否やも亦其の言論に徴して之を知る可し、基督の言論果して如何ぞや。

古來偉人の言論

基督の言論の如何を知らんと欲すれば、須らく先づ古來世に如何なる言論をなしたる者あるかを講究しつゝ、徐ろに之れが區別を立てゝ論ぜざるべからず、世には先づ壯大なる言論をなすものあり、何となれば世には大人傑士の在るあれば、其の言論は多少壯大なるを失はざればなり、次に道德的の言論をなすものあり、即ち正人君子の言論にして、罪逆者をして顏色なからしむる底のものなり、又次に學者的言論をなすものあり、即ち是れ碩學鴻儒の口より出づるものにして、天下の人皆敬服する所のものなり、此等の言論も亦固より偉大なるを失はざれども、基督の言論に至りては此等の言論と同日の論にあらず、蓋し言論の人の口より出づるや、人は之に就て三種の尋問をなすを得、曰く誰の名義を以て語れるか、誰に向て語れるか、又何事を語れるかと、然り而して基督の言論は此の三點に於て世界唯一、天下無比にして極めて不可思議なるものなりとす、請ふ逐一之を證論せむ。

世の偉人の言論と

先きに述べたる如く、世には三種の偉大なる言論あり、豪傑の言論と、德者の言論

基督の言論と第一の相違點

と、學者の言論即是なり、而して此等の言論は誰の名義を以て語られたるかと云ふに、自家の名義によりて語られたるものは一も之なし、豪傑の言論なれば、國家若くは名譽等の名義によりて吐かれ、德者の言論なれば、正義道德等の名の下に語られ、學者の言論なれば、學術哲理等の名を呼んで述べらる、古來未曾て『我は學理なり、我言を聞け』と云ひ、『我は道義其物なり、我言を遵奉せよ』と云ひ、『我は國家なり、我が爲に戰へ』と云ひたるが如き類例を聞見せず、時に『國家は朕なり』と語れるが如き者あれば、直に壓制者の言として奇異に思はるゝを常とす、若夫れ『我は學理なり、』或は『我は道義なり』と云ふ者あらば、人皆之を聞て失笑せん、誰か亦之を信ずる者あらんや、然り而して彼れ基督の言論は如何、曰く『我名の爲に義を行ふ者、我名の爲に仁を行ふ者、我名の爲に苦を忍ぶ者は、永生を享けん、何となれば我は光なり、我は眞なり、我は道なればなり』と語れり、即ち古來如何なる豪傑、如何なる德者及び如何なる學者と雖、自己の爲に語れる者一人もなきに、獨り彼れ基督のみは自己の名の爲に語りて、我が爲に義人たれ、我が爲に聖人たれ、我が爲に殉教せよと語りつゝ、其の報賞として永遠無窮の生命を約束しぬ、然るに世界の人々は之を笑はずして、却て之を信じ、彼を狂者と云はずして、却て彼を賢者の一に數ふるは何ぞや、嗚呼是れ彼は世界に類例なき絶大なる偉人なるが爲にあらずして何ぞや、故に曰ふ、基督の言論は世界唯一、天下無比にして、極めて不可思議なるものなりと。

第二の相違點

次に世の所謂偉大なる言論は誰に向て語らるゝものなるかを見るに、豪傑の言論にても、德者の言論にても、將又學者の言論にても世界一般の人類に向て語らるゝものは甚だ尠し、アレキサンデル、セザール若くはナポレオンの言も往々は其の軍兵に向てのみ語られたるものなり、其言如何に勢力ありたりとするも、大將より兵士、帝王より國民に傳はりたるものにて、一國一代を出でざるなり、勿論德者に至りては其の範圍之に比して一層廣大なり、何となれば道德は方處と時代に拘らざればなり、然れども仔細に其の實際を檢覈すれば、道德者の言論も多くは一國一民、若くは少數の門弟に向て語られたるものなり、ソクラテスの言は少數の知友の間に落ち、孔夫子の言は七十子の間を出でず、カントの言論は羅馬元老院の關門を越ゆること能はず、彼のモイゼスの如きは天來の聖人なりと稱

せらるゝと雖、其言は一猶太國民に向て語られたり、若夫れ學者の言論に至りては、之を傾聽したる所の者尚一層少數なりとす、プラトンの對談はアカデミアを出でず、シセロの雄辯はフォロム以外に何等の力をも有せず、今日の自稱學者の言論に至りては、其範圍尚更に狹少なりとす、彼等は傲然愚俗を侮蔑して、或は大言俚耳に入らずと云ひ、或は哲學は天上の仙食、愚俗得て味ふ能はずと云ひて、自ら其の言論の範圍を狹小にするものなり、否、設令其の言論の及ぶ所を大にせんと欲するも、普通の常識に逆ひて、或は唯物論を吐き、或は主觀說を唱へ、或は進化論を試み、或は又新宗敎談を爲すが如くんば、焉ぞ萬國萬代に互る言論を吐くことを得んや、然るに彼れ基督の言論のみは大に之と選を異にして、一國一時、一民に限られず、萬邦萬代の國民に語られたるものなり、彼のみは自己の名によりて語るの特權ありたり、彼のみは世界の人類全般に向て語るの權力を有しき、彼の言は十二使徒の間に消失せず、彼れの敎訓はユルダン河とチベリア湖の附近とにのみ傳はりたるにあらず、其聲地極に遍しとは、彼れの門弟の疾く既に道破したる所なり、彼が世界に數億萬の隨信者を有せる事は、當眼の事實なり、彼れの宗敎の世界的性質を帶べることは、彼れの仇敵までも之を公言するにあらずや、彼れの言論のみは愚俗も聞て之を解し、賢哲も味て之を高しとす、嗚呼世の豪傑、大德、碩學等の一國、一民、一族にのみ向て語りたるに引き換へて、彼れ基督のみは、萬國萬代の民に向て、『我は眞理を萬民に携帶し來れり、凡て我言を信ずる者は救はれ、信せざる者は罰せらる、帝王と臣民とに拘らず、富者と貧者とを問はず、賢者と愚者とを論せず、皆我言を信ぜよ、天地變動するも、我言は變せず』と曰へり、何ぞ其の言論の偉なるや、故に曰ふ、基督の言論は世界唯一、天下無比にして、極めて不可思議なるものなりと。

第三の相違點

一人物の言論を吐くや、其の誰の名によりて之を語り、又誰に向て之を語れるやを求むる而已を以て足れりとすべからず、尚進んで其語れる所の何事なるやを講究せざるべからず、豪漢の言は、往け、來れ、此を爲せよ、彼を行へよ等の命令的の言に出づるを常とす、君子の言は往々勸善懲惡の言論なりとす、學者の言は學問に關する言論のみにして、之を研究するが爲に、此道を執れ、彼の方法を用へよ等の筆法に出づるを常とす、然り而して基督の言論は大に之と異り、彼は突如とし

て、我は神の子なりと云ひ、我は元始なりと云ひ、我は天父と一心同體なりと云ふが如き、全く人の意想外に出でたり、若し此の如き言をして他の人の口より出でしめば如何、人は必ず之を虛傲者なりと言はむ、設令學者又は豪傑の口より出でたりとするも、人は尙且其の虛傲を笑ひて、之を信ずる者あらざるべし、然るに彼れ基督のみは公然之を斷言して、世界の有衆皆之を信じ、敢て基督を以て虛傲者なりと言ふ者なきは何ぞや、他なし、彼は尋常の人間にあらずして、最も不世出の偉人なるが爲ならずんばあらず、此の如き偉人なればこそ、此の如き大言壯語も人之を恕し、人之を信ずるなれ、否らずんば誰か之を承認する者あらむや、嗚呼吾は此點に於ても基督の言論の世界唯一、天下無比の特性を有するを認む。

述べ去り述べ來りて爰に至れば、基督のみ自己の名によりて語り、基督のみ世界萬民に向て語り、基督のみ自らを神として語れり、而して世の豪漢、君子、學者等の言論は玆に出づること能はず、出づれば直に否定し去らる、嗚呼基督は實に偉人中の偉人、史上唯一の偉人なりと謂ふ可し。

(4)基督の偉大なる行動

基督の偉大なる行動

人物の如何を知るには、須らく先づ、其の行動如何を究めざるべからざる事は、人皆之を知る、言論は心胸を表現するものなりと雖、之を行動に徵するときは、尙一層明に心胸を窺ひ知るを得るものなり、是を以て人物の價値を定むるが爲には、言論と行動の研究は須臾も之を離すべからず、故に之を稱して言動と謂ふ、而して基督の言論のことは既に之を語れば、是より基督の行動に就て語らむ。

行動の種類

人の行動は其の働く所の境遇によりて、其の性質を異にするものなり、物質界に働くときは、之を物質的行動と云ひ、知識界に働くときは、之を知識的行動と云ひ、道德界に働くときは、之を道德的行動と云ひ、社交界に働くときは、之を社交的行動と云ふが如き、必ずしも之が說明を要せざるなり、然り而して基督の此等諸方面に於ける行動は如何、是れ亦逐一研究せざるべからず、先づ

基督の物質界に於ける行動

(A)基督の物質界に於ける行動　人生行動第一の舞臺は物質界なり、人は物質界に生れ、物質界に働き、物質界に死す、人の生命を包むものも亦物質界なり、物質的世界に圍繞せられて、物質的身體に包容せらる、空氣は其の呼吸する所のものにして、米麥は其の養はるゝ所のものなり、豈啻是のみならんや、物質は人の思想界

にも侵入す、吾人の事を考ふるや、外界の物象を藉らざるときは、思念心に浮び出でざるを見ても之を知る可きなり、物質界の人を司配するや實に大なりと謂ふべし。

果して然らば人は遂に物質界を司配する能はざるか、何ぞ之を言はむ、人は萬物の霊なり、若も物質界に於て自由自在の行動に出づる能はずんば、宿命の奴隷となり了せむ、人には知識と意志と手腕とあり、以て物質界に大業を企つ可し、以て南北東西隨意に去來す可し、海には火船あり、異域比隣の如し、陸には汽車あり、一瞬千里翔るよりも疾し、山谷海底には電信機ありて音信の妙通を極め、八百八街には瓦斯燈ありて不夜城を欺き、運轉には蒸汽關あり、撮影には寫眞器械あり、學術進歩工藝發達の結果、百器萬具備りて、今や山嶽の開鑿も、土中の發掘も、地峽の疏通も一として意の如くならざるはなし、嗚呼人工も茲に到りては其の妙用を極めたりと謂ふ可し、五尺の人間が高天廣土を自在に運轉す、豈亦快ならずや。

然れども記せよ、人工如何に其の妙用を極むると雖、人の物質界に於ける行動の力なるものは、萬物の狀態を變改し、分子を離合せしむるのみに止まりて、其の本質を變更し、其の法則を止動する能はざるものなり、物質界にも一定の法則あり、其の法則に反しては一事をも行ふ能はず、是故に微少なる一原子も萬古不變の法則の下に安居して、人間の力の到達せざるを冷笑しつゝあるなり、嗚呼萬物の霊にして其力一原子をも司配する能はざるか、物質界の法則は人間の力よりも強きを奈何せん。

加旃、人間の力は物質界に働くに當りても、直接の行動をなす能はざるものなり、物體は其聲に應じて直に動くものにあらず、元素分子も亦其の命に從て直に離合するものにあらず、山を呼ぶも山來らず、川を招くも川近かず、知力如何に大なりと雖、意氣如何に強しと雖、物質界に行動するが爲には、勢ひ身體の機關と五感の媒介を待たざるべからず。

今や基督の行動を見るに、其力大に之と異なるものあり、彼は物質界に働くが爲に、學術の力をも藉らず、工藝の道をも藉らず、其の意、其の言によりて直に萬物の本質にも、天地の法則をも自由自在に變更止動せり、カナの宴席に於ては水を變じて酒となし、チベリアの湖畔に於ては麵麭を增して五千人を養ひ、風に命ずれ

ば風從ひ、波に語れば波靜まる、海上に歩したることあり、病者を癒したることあり、死者を活かしたることありて、海も、陸も、病氣も、健康も、生も、死も唯命是れ從ふ所を見れば、其の權勢は偉大にして直截、一舉一動、一語一默以て直に物質界の萬有を司配したるを知るに足るなり、彼が癩病患者に向て、『我汝の清まらん事を望む』と云ひ、百夫長に向て『往け、爾の僕快癒せり』と云ひ、ナインの寡婦の子に向つて、『年少、我爾の起きんことを命ず』と云ひたるが如き、何ぞ其の意志の自在にして其の命令の有力なるや。

今人往々彼れの奇蹟に疑を挾むと雖、此は萬民具瞻の下に行はれ、公明正大にして、些の暗點を留めず、基着自らも其の言論よりも、斯る行動の較明驗著なるに重きを歸し、『爾等若し我言を信せずんば、少くも我業を信せよ、我が證明者となるものは實に我業なり』と云へり、故にヨアンネス洗者の弟子來れるときにも、其の行動の如何を示して、其の己れの何者なるかを知らしめたり、白晝行はれて萬衆皆之を聞見す、之をしも疑ふ可くんば、天下何事か疑ふ可からざるものあらむ、歴史的事實としても、焉より較明驗著なるものあらざるなり。

(B)基督の知識界に於ける行動　人間の手腕を揮ふ所は啻に物質界のみに止まらず、一歩進めば其の知力を働かしむる所あり、之を知識界と云ふ、即是れ知識の領分なり、天然は知識を包容すと雖、知識は天然を徹底す、人間の物質界に於ける行動既に妙なりと雖、知識界に於ける行動は尚一層妙なり。

我は高遠なる天を究めつゝある者を知る、天文學者即是なり、我は深遠なる地を探りつゝある者を見る、地質學者即是なり、萬有の理法を講究するが爲には哲學者あり、過去の事蹟を記錄するが爲には歴史家あり、天下の萬事を論斷するが爲には政論家あり、時に遠見卓識の士ありて、常人の知見の到達せざる所まで徹底する者あり、人間の知識的行動も亦偉大なる哉。

然れども仔細に之を檢すれば、人間の知識には多くの弱點と暗所とを認む、人の子の初めて生るゝや、愚暗にして一物をも知らず、害毒を識別することすら能はず、古人が『世界中最も馬鹿な動物は余の意見に是れ人間』と云へしは、蓋し是が爲なり、其の長じて人と成るや、種々の利慾と色情等の爲に往々其知見のくらまさるゝことあるは、人の皆知悉する所なり、年老へて桑楡晩景の愈々益々近づくに

及びて、知識の日光も亦西山に沒せんとするが如き傾ありて、老人却て小兒に及ばざることあり、嗚呼人間の一生に亘りて光には必ず其影あり。

今假りに人間の知見の最も明瞭的確なる時に就て考ふるも、人間には到底打破せられざる關門あり、將來の事即是なり、彼は過去を知り、現在を見る、然れども將來を見る能はず、昨日の事は之を語り得べし、今日の事は之を示し得べし、然れども明日の事は之を知る能はず、歴史上の事實と當眼の事實は彼れの領内にあれども、將來の事は彼れの權外に出づ、時に千古の卓見者と雖、精確に數百年後の事を豫測すること能はず、天地間の永久律によりて行はるゝ日蝕月蝕等の事は之を豫知し得べきも、人間自由の意志によりて行はるゝ事に至りては、誰か之を豫言するを得んや。

然るに今之を基督に見るに、彼のみは此關門を打破せり、彼は數百千年後の事をも洞察透徹して、自身の將來をも、自敎の將來をも、又自國の將來をも明瞭的確に豫測豫言せり、彼は自身に就き、苦難の狀を備さに語れり、而して其の如く成れり、彼は自敎に就き、萬國に弘布せらるべしと預言せり、而して其如く成れり、彼は自國に就き、滅亡遠からざるを宣したり、而して其如く成れり、彼れの預言は皆事實となれり、彼れの語れる所は一として應驗あらざるはなし、其の弟子に就き、『爾等我名の爲に萬民に嫌はる可し』と云へるが如き、何等の卓見ぞ、今日耶蘇の名によりて其の門弟は如何に惡まれ居るぞ、然れども彼は云へり、『我れ世に勝てり』と、然り、彼は世に勝てり、世界に幾億萬の隨信者と崇拜家とを有すればなり、ナポレオンも彼れの前には跪きぬ、アレキサンデルを睥睨し、セザールを白眼したる豪漢をして、ナザレットの大工が之を己れの前に冑を脱ぎて拜伏せしめたりとは嗚呼是れ何等の勝利ぞ、而して彼れは此等の事豫め皆之を知見したり、彼れの前には將來も現在なり、其言は直に是れ事實となりしを見れば、彼れの知識界に於ける行動の如何に偉大なるかを知るに足るなり。

基督の道德界に於ける行動

(C)基督の道德界に於ける行動　人は物質界と知識界に於てのみ生活する者にあらず、道德界に於ても亦生活す、而して其の生活は人生に取りて最も價値あるものなり、蓋し道德界に於ける行動は人物の眞價を定むる標的なればなり。

基督の道德界に於ける行動を講究するには、須らく基督の心胸如何を探らざる

可からず、何となれば人物は其の知識に由る者にあらず、其の心胸に因るものなり、如何に知識の秀越する者ありとするも、道德上の偉人の稱は之を呈する能はず、學者、知者、才子等の名によりて充分酬わらるゝものなり、世に萬有の知識を藏する者ありと雖、其の心術陋劣なりとすれば、吾は之を稱して小人と斷言するを憚らず、之に反して眼中一丁字なき者と雖、若し其の襟度寛大なりとすれば、之に偉人の稱を呈するに躊躇せず、蓋し眞正の『大』なるものは學殖の該博にあらず、胸襟の寛容にあるものなり、パスカル氏曰はずや、蒼窮、星晨、大地、王國等は小知の者にも價せず、何となれば後者は前者の凡てを知り、兼て又己をも知ればなり、然れども凡ての物體、凡ての知識及び其の凡ての作品は心愛の微なるものにも價せず、何となれば是れ無限の高階に屬するものなればなりと、是故に人物の大を量らんと欲すれば、其の心胸の如何を究むること最も必要なりとす。

然らば則ち人の心胸を雄大ならしめて、大襟度大雅量の者たらしむるものは何ぞや、余は先づ指を克己、献身、博愛の三德に屈せざる可からず。

克己は人物の大を成す第一の要件なり、克己によりて自らを小にすることを知らずんば、到底大人物となる資格なきものなり、勿論世間的に高貴の人たらんと欲するには、克己によりて自らを小にするの必要はなし、名譽、位階、門閥、富貴等あれば足る、然れども我は此の如き者の大を語るにあらず、偉人の大德を論ぜんと欲するものなり、而して大德は此の如き名譽や、位階や、門閥や、富貴等に在るものにあらず、寧ろ超然高踏して此等のものを弊履の如く看做すに在り、高德なる偉大の心事は左の如し、曰く、我は志を得て富貴名聲を極むるを得、然れども我は之を爲さず、我は寧ろ身を屈して貧に安んじ、晦に潜め、苦を忍ばんと欲す、富貴權勢果して何者ぞ、我は之に束縛せられ、之に司配せらるゝ奴隷にあらず、之に命令し、之を司配する王者たらんことを志す者なり云々と、是れ實に偉人の大心事なり、大襟度なり、世間尋常の人間は其勇其見到底茲に達し得る者にあらず、然れども斗筲の人の爲す能はざる所に、正しく偉人の眞價存するを知らずや。

今や之を基督に就て考ふ、彼果して這般の大襟度ありしか、然り、我は正史に據りて、之あるを認む、彼は克己の德を最高の程度まで行ひたる者なり、彼は貧に生れ、貧に暮し、貧に終りたる者にして、世界貧民の親方なり、彼の言に曰く、貧しき者は

福なりと、年少之に問ふ、彼曰く、狐に穴あり、鳥に巣あり、人の子には枕する所だもあらずと、嗚呼何ぞ其の克己力の大るや、我は彼が風雨に命じたる力を感驚す、我は彼が將來を洞見したる知を感驚す、然れども我は彼れの富貴權勢を侮蔑して、貧苦艱難を己の分としたるの勇に對して、尙一層の感嘆を禁ずる能はず、彼はパンを乞ふて生活せり、彼はユデア國民の希望を利用して、富强雄大の王國を築くの權勢を有したれども、彼自らは大工の職を執りて隱晦の生を送りぬ、民之を王と爲さんと欲すれば、竊に逃れて山中に入りぬ、民其の神通力を見て之を稱讃すれば、謙挹以て其榮を天父に歸す、嗚呼何ぞ其の克己力の大なるや、道德的權勢は正しく茲に在るなり、彼が其の苦艱に際し、罵詈、嘲笑、鞭撻、凌辱、侮蔑等を如何に忍びたるかは、其の受難史の備さに記るす所、必ずしも茲に詳說するを要せず、我は唯此際彼が虛心坦懷、怒ることなく、憤ることなく、神志悠々、顏色自若として磔刑の苦を忍び、遂に從容として死に就きたるを見て、其の克己力の如何に大なるかを追想して、感驚措く能はざる者なり。

克己と獻身とは須臾も相離る可からず、前者は殺ぐに在りて、後者は與ふるにあり、富貴を棄てゝ貧賤に安んじ、名譽を去りて隱晦に就き、歡樂を遠けて苦難に近づくは、是れ既に大なり、然れども尙一歩進みて己れの身命、力量、心血及び自家所有所能の一切のものを擧げて之を犧牲に供するに至りては、尙更に大なりと謂はざるべからず。

然り而して基督の獻身的事業は實に此の如きものにてありぬ、彼は自身の一半を貢獻したるものにあらず、渾然たる全身を擧げて之を神人の犧牲に供したり、彼は先づ渾身を神の光榮に獻げぬ、故に曰く、『我糧は天父の旨を遂行して、其功業を完成するに在り』と、之が爲に侮蔑、疲勞、迫害等に接しても、毫も其意を挫屈せず、ユデアよりサマリヤに、サマリヤよりガリレヤに、大都小邑を普く周遊しつゝ天父の御敎を弘布しぬ、故に彼は先づ其敎を施したる者なり、次に彼は厄介なる門弟を訓練して、其の知識を磨き、其の意志を强め、其の愚暗を掃ひ、其の先入を去りたる後、自ら出でゝ平民の師となり、或は山上に、或は平野に民衆と起臥を同うして之を敎誨したり、彼は世の學者如く、大言俚耳に入らず、哲理は愚俗の與り知る

所にあらずなどゝ云ひて大言壯語したる者にあらず、細民に接しては細民となり、小兒に接しては小兒となり、パウルスの所謂『凡てに對して凡てとなりて』諄々敎を垂れたる者なり、是豈献身の心なき者の能くす可き所ならんや、彼れが跛者、盲者、聾者、病者等有らゆる世の不幸薄命者の友となりて、之が慰撫療養に盡瘁したるが如き、何ぞ其の慈恩親情の至れるや、誠心一片の大仁者にあらずんば、曷ぞ茲に到るを得んや、ポッスエ氏曰く『彼れの奇蹟は其權力よりも其の仁愛より出でたりと云はざるべからず』と、然り、彼は神の威稜を顯はさんが爲に、幾多の不可思議なる業を行ひたるものなり、嗚呼彼は此の如く、其身、其心、其敎、其權をも擧げて天地神人の祭壇に献じたる後、遂に其血、其の生命をも犧牲に供しぬ、(此事後章に論せん)、故に我は彼に就て私利私益の觀念を一毫も認むる能はず、蓋し利己心の如きは微塵もなかりし者なり、世の献身者は利己心と戰て初めて献身者となるを得れども、彼は此の心戰を要せず、其心直に是れ献身的なりき。

博愛の偉人

克己と献身の大襟度大雅量の特質たること實に以上に述ぶるが如し、余は之に尙一つを加へんと欲す、博愛即是なり、克己によりて人は己を殺ぎ、献身によりて人は己を與へ、博愛によりて人は其心を開くものなり、其の心の開くるに種あり、順あり、友情によりて開くるものあり、恩愛によりて開くる者あり、愛國の赤誠によりて開くるものあり、友人や家族の間に開くる心愛は、其範圍の狹きが爲に、敢て異とするに足らざれども、進んで國家の爲めに開くるに至るときは、人皆其愛の極點に達したるものとして、至大なる感嘆を拂ふを常とす、基督以前に於ける愛國者なるものは皆此の如き者にてありぬ、然れども我は其の中に尙狹量の分子あるを認むる者なり、其の心愛の世界に向て開くるにあらずんば、未だ以て大とするに足らざるなり、世の論者博愛の何物たるやを解せず、動もすれば之を散漫なる愛國心として解說せんと欲す、誤れり、彼のギリシア人が野蠻人を侮蔑し、ローマ人が外國人を排斥し、イスラエル人が異邦人を輕視したるが如き、皆是れ中華の夷狄視する筆法にして、未だ以て眞正の愛國心を解せざる者の言動云爲なりと謂はざる可からず、文明國の愛國者は其愛、敵國にも及ぶ、我日本の旣に茲に進み來れるは、大に賀せざるべからず、余の今茲に論ずる所の博愛とは即ち此の如き文明的愛國心を指すものなり。

然り而して基督の博愛なるものは實に此の如きものにてありき、彼れの心は友人の墻を脱し、家族の闘を逸し、故國の境を越えて世界人類を包容するに至れり彼は一國一民の救主にあらず、萬國萬民の救主なり、彼は新世界の魂となり、人類の新愛を開きたる者なり、彼は其の心に萬國萬代萬民を包容して、貴賤、尊卑、賢愚、文野、男女、老幼等を悉く其の赤子、其の臣民と看做せり、故に基督の家族は人類なり、基督の故國は世界なり、是を以て人彼に語りて、『視よ爾の母、爾の兄弟』と云へば、『何者か我母、我兄弟なるぞ、凡て天に在す我父の意を行ふ者、是れ吾兄弟なり、吾姉妹なり、吾母なり云々』と答へり、見る可し、彼は四海同胞主義を取りて萬民を兄弟姉妹の如く看做したる者なるを、彼又曰く、『凡て勞苦重任の者皆我に來れ、我爾等を慰安せん』と、彼は則ち萬民を救恤慰撫するが爲に來れる者なり、一國一民に私して海外他國を敵視する者とは大に其の選を異にするものなり、故に彼を稱してユデア國の救主なりと云ふは、誤れり、世界萬國の救主と稱すべきものなり、其の心胸の大なる所正しく玆に在り、常人は此の如き心胸を有する能はず、故に往々私親偏愛を稱して是れ愛國心なりと云ふ、大襟度大雅量は大襟度大雅量にあらずんば之を知る能はず、之を解する能はず、基督の心胸の大なるは、世の偏見者流の攻撃に對しても、依然愛敵主義を持するを見ても知るを得べきなり。

基督の社交界に於ける行動

(D)基督の社交に於ける行動　人は元來社交的動物なり、絶海孤島に隔居して、寂然孤獨を守るが如きは、其の傾向、其の要求の容るさゞる所なり、社會下級に生息する人間と雖、社會に關係なき能はず、彼等も亦社會の成員として、其分に適する行動をなしつゝある者なり、是故に凡ての人は程度こそ異れ、孰れも社交的行動權を有する者と云ふ可し、然り而して其の行動權の大小如何によりて、人物の大小如何を量ることを得るものなり。

然らば則ち其の社交的行動權の最大なるものは何れに在るか、余以爲らく、創造、創立、創設、原語の所謂『クレアシオ』に在りと、創造力は萬能力を意味するものなり、故に人にして之に接近するは、其力の最も萬能的になりたるものなれば、取りも直さず神的事業を企つる資格を得たるものと云はざる可からず。

然り而して人は現界に於て如何なる偉業を創設し得るか、人の創設し得る事業の中其の最も偉なるものは、第一學問社會(學校)、第二政治社會(王國)、第三宗教社會

學界の偉人

(教會)即是なり、請ふ余をして少しく之を解說せしめよ。

一年少あり、閑餘腦裡の思想を反覆し、學系の薄弱なるを覺識し、此の如き原理に基立する主義は、大膽なる手腕に遭遇すれば、必ず破滅の非運を見るに至らんと、彼は沈思之を久うし、古來の傳統の冕むに足らざるを看取して、自己の才能と虛傲とを武裝し、過去と現在より隔離して、默然自家腦裡の思考中に潛伏す、須臾にして腦中より天啓を得たるものゝ如く、我之を得たり、我之を得たりと絕叫し、宛も彼のアルキ[メデスが其研究しつゝありし所のものを認めて、シラクザスの街上を『我之を認め得たり、我之を認め得たり』と語りつゝ馳走したる時の狀の如く然り、乃ち彼は先づ初めに萬有の存在を疑ひ、自己の存在をも疑はんとして、疑の中より思考のあるを認め、思考の中より存在の思想を認め、『我疑ふ、故に我在り』と云ふ土臺を築き、是より出發して遂に萬有の知識を構成するに至り、茲に一の新主義の建設を完成せり、彼は之を世の有識者に示し、天下後昆の批判を仰げり、而して其の學理的築造は人の批判に委せられて如何に成り行きたるか、或者は之を賞讃し、或者は之を非難し、毀譽褒貶の中を經て今日まで傳承せり、是れ之をデ

政界の偉人

カルトの主義と云ふ、彼は兎に角偉人なりき、蓋し新主義の創作家たればなり、彼は昔時ピタゴラス、ソクラテス、プラトーン、アリストテレスの創設せしが如く創設したる者なり、其の創設したる學派は即是れ學問上の社會と云ふて可なり。

請ふ第二の偉業を語らん、牧人あり、河畔に二兒を拾ふ、二兒長じて人となり、王族の血其の脈管に迸流しつゝあるを知る、一念茲に到りては、牧童ながらも牧舍は其心に餘り狹隘にして、牧杖は其手に餘り小弱なるを覺ゆ、偶々一兒丘陵に登り、四邊を瞰視して、其土の大事を擧ぐるに適するを認む、鋤を執て坑を穿ち、根基を茲に築かんと欲す、然れども其の流血淋漓の裡に增進せんことを示さんが爲に、其弟を殺して以て坑を血にす、是に於て乎周圍の七丘を觀望しつゝ、其の部下に伊太利の平原を指示したり、最後に其業を完成せんが爲に法を立て、隊を組み、會を設く、事遂に成就して、茲にローマと稱する一大帝國の基礎を築くに至れり、其人を誰とかなす、ロムルス即其人なり、彼は兎に角富强雄大なる帝國の創立者なり、アルキサンデル、セゾストリス、シールスの企てたる所を企てゝ、能く茲に成功したる所以のものは、彼亦社會的事業の大權を有したるに由るなり、帝國とは何

教界の偉人

ぞや、是れ豈政治的社會にあらずして何ぞや。

此は實に大なり、然れども我は是よりも尙大なるものを見る、一介の士あり、其の族中より起り、暫く野に潛みて其力を錬りたる後、右手に劍を握り、左手に妄書を携へて洞穴より出づ、自ら稱して預言者なりと云ひ、人の生死を宿命にし、美妓嬋妍の極樂淨土を指示しつゝ、遂に天下に一大事業を企てたり、余は一大事業と云ふ、何となれば學校よりも、王國よりも大なるもの、即ち敎會を築きたればなり、學校の創立者は人の知識を司配し、王國の創立者は人の身體を司配し、敎會の創立者は人の心靈を司配す、是れ其の大なりとする所以なり、此の偉人を誰とかなす、曰くマホメットと云ふ、嗚呼彼も亦一偉人なり、敎會と稱する宗敎社會、人靈社會を創設するを得たればなり。

三種の偉業は既に述べ終れり、然れども之を行ひたる方法に就き一言せざる可からず、大事業を畫するには、大方法を要す、是れ自然の順序なり、學校を創設したる者は、其の事業を行ふに何物をか方法となす、學識即是なり、議論し、證明し、觀察し、推理し、辯駁し、結論しつゝ其業を確定するものなり、ピタゴラスは數理の學に基き、プラトーンは思想の學に基き、アリストテレスは實際の學に基き、孔夫子は德行の學に基けり、故に曰ふ、知識社會は學問を以て築かるゝものなりと。

政治社會は如何、權力に基きて築かるゝものなり、優勝劣敗、弱肉强食の歷史は、此の社會の創設に附隨して離す可からず、强者の權利主義は此の社會の特有物なり、之を古今の歷史に徵せよ、如何なる王國が劍によりて築かれざるものやある、シールスの劍なくんば、ペルシアの國は如何なりしぞ、ロムルスの劍なくんば、プラタヌスの山は如何なりしぞ、今日に在りて彼の强露の如き、亦是れペートル大帝の劍を聯想せしむるにあらずや、故に曰ふ、政治社會は權力に基て築かるゝものなりと、權力は蓋し劍力なり。

學問社會は學問に基き、政治社會は權力に基くとすれば、宗敎社會は如何、嗚呼我は不幸にして宗敎社會の動機とする所のものゝ感情に在るを言はざる可からず、人間を神にするは是れ傲慢、物體を神にするは是れ情慾、ギリシアの神話の信せられたる所以は、人心の傾癖に適したる所以なり、マホメットの隨信者を得たる所以のものは、快樂の天堂を指したるが爲めなり、彼は離緣を許し、一夫多妻を命

じ、情慾の赴く所に投じて、人心を司配し、因て以て其の宗教社會を組成したるものなり。

基督は學界の偉人以上

余は是より基督の創立せる所のものと又其の創立するに當りて其の取りたる方法如何を語らざる可からず。

彼は學問社會の創立者なりしか、否、蓋し學校の創立者の如きは、多年研究の結果を少數の門弟に傳ふるに過ぎず、學者と共に言論を上下するを知ると雖、下民に接して之と語るを潔しとせざるものなり、然るに基督は全く之に反し、群衆を見て、山に登り、草の上に座して口を開き、平民に眞福八端を教へたる後、眼を天に上げ、神に謝して曰く、嗚呼我父よ、天地の主よ、此等の事を世の賢哲に隱して、之を細民に啓せしを嗚謝すと、見る可し、彼は其の築かんとする社會的事業より細民を排除するを欲せざりしことを、彼れの以前には世に多くの學校開かれ、多くの學閥設けられたり、ギリシャにペリパテチシアンあり、ローマにアカデミアあり、ユデアにサネドレンあり、インドにブラマンあり、支那に孔門ありたり、然れども是れ皆學者の集合にして、細民之に參與するを得ざりき、所謂自由人士と云ひ、士君子と云ふ者のみ言論を上下して、奴隷、バリア、愚俗と稱せられたる者は、其の仙食の殘肴にだも與かることを得ざりき、然るに彼れ基督の起るに至りて、初めて平民の師となり、貧者と小人に其の福音を傳へ、ソクテラス、プラートン、アリストテレス等をして後に瞠若たらしめたり、彼は實に學校の創立者以上の者なりき。

基督は政界に意なし

基督若し學校の創立者にあらずとすれば、王國の創立者なりしか、彼はナザレットの隱晦の地より起りてイヅメアの政府を倒し、羅馬の羈軛を脱却して以て政治社會の首領となるの意ありしか、否々、斯る意は毫も之れあらざりき、彼は王者の榮を避け、民人の歡迎を避けて、竊に山に逃れたり、宗教社會に問はれては、セザルのものはセザルに返せと云ひ、政治社會に問はれては、我が王國は此世にあらずと云ひ、門弟が師は此時に當りてイスラエルの王國を回復すべきかと云ふに對しては、其頑愚を叱責したり、是に由りて之を考ふれば、彼れの王國創立者にあらざりしは明々白々たり。

基督は教界の偉人

然らば則ち何をか創立したる、彼はローマの有司に向つて我は王なりと語りしにはあらずや、然り、基督は王者なり、彼は世に來りて王國を築きたり、然れども彼

れの所謂王國とは地上の王國にはあらずして、天上の王國なり、政治的の王國にはあらずして、精神的の王國なり、彼れの手に握れる政柄は眞理の政柄なり、彼れが其の臣民に課する租稅は愛の租稅なり、信の租稅なり、祈禱の租稅なり、後悔の租稅なり、世の王者は爾等に身體と財產とを要求す、我は爾等に心靈を要求するものなりとは、彼れの時人に語りたる所なり、故に彼れの創立せる所のものは心靈の王國なり、心靈の王國とは何ぞや、宗敎社會即ち敎會是なり、然らば彼は敎會の創立者として論ずべきものなり。

基督の偉業は方處に限られず

果して基督は敎會の創立者なりとすれば、何れの點に於て彼は人と異る所かある、釋迦も之を立て、マホメットもこれを築きたるにあらずや、苟も知あり才ある者は誰か同志を糾合して、寺院祭壇に拜伏せしむるを得ざる者やある、然り、人間も亦宗敎的團體を築くことを得、然れども人間の事業は每々抵抗すべからざる障碍に逢着して、或は直に挫折し、或は廣く發達すると能はざるを常とす、抵抗すべからざる障碍とは何ぞや。

曰く、方處の際限、曰く歲時の際限是なり、試に人間の創設に係る宗敎社會の方處に打克たんとしつゝあるを視よ、忽ち其の面前に三個の關門の橫るを見ん、第一は境土の關門なり、一脈の山、一帶の川は國を劃して之を容れず、第二は國粹の關門なり、一國の思想、信仰、風俗、習例、傳統、國狀等之を桎梏して其の發達を許さず、第三は種族の關門なり、嗚呼是れ最も破り難き關門なりとす、言語是に由りて異り、血緣是に由りて分る、黃色人種と白色人種との相抱擁接吻するに至るは難い哉、然り而して基督は此の三種の關門を悉く打破りたり、其の王國の領域は全世界なり、其の敎權は地極より地極に達せり、其の敎會は山を越え海を渡り、坤圓球上到る處に在り、基督に取りてはピレネー山なし、(佛王ルイ十四世の古事)、基督の王國には太陽沒せず、(英國女皇の古事)、所謂基督敎なるものは厩より出で磔柱を經て、世界の人類を包含す、境土も國粹も種族も皆其の尊前に拜伏せり、嗚呼彼は眞に宇內の勝利者なり、四海の凱旋者なり、一の邊遇より出で、族より族に轉じ、民より民に移り、國より國を通過す、又其の通過するに當りては、家族は頭を下げて之を尊拜し、都城は其の城門を開て之を歡待し、王國は其の國境を撤して之を奉迎す、法律は屈し、先入は默し、利害の觀念は消失す、豈啻是のみならんや、基督の王國

は種族の關門をも排除し、世界の舊國古族なる猶太の種族より出でゝ、强大なるギリシア、ラテンの種族を征し、進みて北方南方の蠻族を從へ、尙進みて東西洋の種族をも悉く屈伏するに至れり、而して今之を波羅門敎が印度の種族と共にヒマラア山下に窒息し、佛敎が蒙古韃靼の種族と共に支那西藏の山下に絕命し、最も强勇なりと稱せらるゝ回敎がアラビア種族を出でゝ、世界文明國の種族に移る事能はざるに比して考ふれば、其の優劣日を同ふして語る可からず、故に曰く基督は偉人中の偉人にして、彼は方處の際限を排除し、境土、國粹、種族等の關門を撤去したる者なり。

基督の偉業は歲時に限られず

基督は方處の際限を排除するのみに止まらず、歲時の際限をも排除したる者なり、歲時は人の事業を制限するに二個の關門を立つるものなり、曰く過去の關門、曰く將來の關門是なり、『遲く始まりて早く終る』は是れ人間の經營する凡ての事業に通用せらるゝ語なり、太初鴻荒の世を原始となし、世界最終の期まで繼續するもの、基督の王國を除て何處にかある、彼は其の生れざる以前既に四千年間ユデア國民の希望する所となり、世界萬民の期待する所となりし事は、前章既に之を盡せり、是れ彼が過去の關門を破れる所以なり、彼れの生れてより以來今日に至るまで殆ど二千年に近し、其間一大長足の進步を以て進み來り、皇帝の迫害ありしにも拘らず、蠻民の侵入ありしにも拘らず、否恐る可き革命の突發したるにも拘らず、政客論士の攻擊激甚なりしにも拘らず、離敎異端の起りしにも拘らず、敎統連綿、眞理渾然、秋毫も汚點なく、微塵も缺損なくして今日まで繼承し來れり、ヌマの業は羅馬の大帝國と共に亡び、マホメットの業は漸くにして今日まで傳り、釋尊の敎は今や氣息奄々たり、基督の敎のみは愈々盛なり、過去に根蔕を深くせる者焉ぞ將來を恐れんや、之れを木に譬ふれば、喬木欝蒼、蠹にして天を摩し、百禽萬鳥來て之に宿る、之を川に比すれば、大川湯々、進んで大海に向ふ、今や世の近眼者流基督の敎を以て陳腐に屬せりとなし、之に代りて新宗敎、將來の宗敎、文明の宗敎なるものを開かんとしつゝあり、是れ夢のみ、昨日社會に生れ出で、哲人の書一二卷を讀み、以て萬國萬代の宗敎を開かんとす、笑止千萬なり、固より俱に共に語るに足らず、彼等をして暫く其夢を語らしめよ、醒むる時やあらん、嗚呼基督は今日の大言壯語者、現時新宗敎の喇叭卒を見るにつけても、轉た其の偉大なるを

知らる、其業の將來に關する問題も、我之を預言するを得れども、姑く之を世の論客に委して、其が非難の材料に供せん、彼等は其名を揚ぐる道なきに苦みつゝある者なればなり。

基督の偉業を行ひたる方法手段

若夫基督が其の萬國萬代の業を行ひ、其の永遠不朽の敎を弘むるが爲に使用したる方法手段を講究するに至りては、愈々益々其の權勢威力の偉大なるを知るに足る、彼は學問を使用したる者にあらず、彼は學校に通學したることなく、哲士に就て學びたることなく、彼れの弟子は漁夫のみ、船と網あるを知るのみ、而して彼は之を以て人を漁する漁夫となしたる者なり、彼れの生徒は貧者なり、細民なり、小兒なり、彼れの談話は常に比喩なりき、大言壯語は彼れの禁物なり、見る可し、彼れの學問の道を取らざりし證跡の歷々として指示し得らるゝを、プラトーンや、アリストテレスや、デカルトや、ライブニッや、カントは此の如き道を取らざりしなり。

然らば彼は權力に依賴したるか、否々、彼は平和の主なり、劍を帶びたることなく、血を流したることなし、自ら血を流したるも、人の血を流したることなし、彼は武器を執りたることもなく、敵兵に向て抗抵したることもなく、身を護りたることすらもなし、捕ふる者に捕はれ、打つ者に打たれ、怒ることもなく憤ふることもなし、劍を鞘におさめよとは、彼れの命なりき、右の頰を打たば左の頰を示せよとは、彼れの敎なりき、敵をも愛せよとは、彼れの主義なりき、彼のアレキサンデルや、セザルや、アッチラや、マホメットや、ナポレオンは此の主義、此の方道を取らざりき、見る可し、彼れの權力に依賴せざりし證跡の歷然たるを。

果して然りとすれば、彼は人心の情慾を利用したるか、何ぞ之を言はむ、彼はこれに反して嚴格なる道義と純潔なる德行とを以てせり、彼は釋迦の如く、マホメットの如く、美女嬋妍、舞妓婆然たる極樂淨土を說かざりき、彼は一夫多妻、離婚、離緣等を許さゞりき、彼は色情をも禁じ、復仇をも制したり、彼れの主義は貧乏主義なり、神と金には兼ね仕ふる能はずと云へり、克己主義なり、十字架を擔ふて我に從へ、天國の道は狹しと語れり、献身主義なり、我が爲に妻子眷族を棄て、身邊一切のものを捐てよと命せり、此の如き主義を取りて彼れは成効したる者なり、其の珍らしき所は正しく玆に在り、釋迦、マホメット、ルーテル、カルヴィン等は此の如き嚴格

なる道德者にはあらざりき、彼れの情慾の道を取らざりしや、亦以て見る可きなり。

嗚呼余は基督の物質界、知識界、道德界、及び社交界に於ける行動を備さに述べ來れり、讀者仔細に之を考ふるあらば、彼れの行動の世界に類例なき不可思議なる偉業なることを認むるに餘師あらん。

基督の偉大なる死去

(E)基督の偉大なる死去　基督の誕生、言論、行動の偉大なるは、前三章之を證して明なり、以上三章を讀みたる者は最早彼れの生活の偉大なるを否定する者なからん、然れどもモンテイギュ氏の語れるが如く、偉大なる生活をなすのみにては未だ以て足れりとせず、偉大なる死を遂ぐる事是れ實に至難事なり、死は人生に取りて避く可からざる暗礁なり、人物の大小强弱は此の一刹那に當りて最も明に顯はるゝものなり、高貴の誕生も、高崇の言論も、雄大の行動も、死狀の如何によりて或は立派に顯出し、或は空しく埋殁せらる、死狀を見ざるうちは偉大と云ふ勿れの語の轉た眞なるを覺ゆ、如何にも一生偉人の生活をなしたる者も、其の死するに當りて小人の弱質顯るゝことあり、彼のローマの豪骨カトの如き、蓋其の

正人の死狀

一例として見る可し、國俗頽敗の裡にありて嚴格なるストイックの道義を持し、國家存亡の秋に當りて、快男兒の言論を吐て之を支撐せんとしたるが如き、何ぞ其の意氣の豪なるや、然れども彼は終焉偉人の名を完うする能はざりき、何となれば、其死も卑怯にして、小人の死方をなしたればなり、故に曰ふ、人物の大を量らんと欲すれば、其の如何に生活したるかを究むるを以て足れりとせず、其の如何にして死したるかを見て初めて之を斷ず可しと。

余や此の筆法を以て基督の死の如何を講究せむと欲す、之が爲に古來世の大人君子の死如何なりしかを研究するの要あり。

人あり、人生の行路難を嘗め盡し、浮世の辛苦艱險を味ひ盡したる後、桑楡晩景の近づき來りて、其死の旦夕に迫れるに當りては、必ず先づ一家兒孫を病床に招き、其の少壯の功勳を語り、其の往時の苦勞を述べ、人生の事樂むべきもの少くして、悲むべきものゝ多き眞理を說きつゝ、我身の死後を遺囑し、兒孫の將來を訓戒して、我今逝く、乃父の遺訓を忘るゝ勿れ云々と語りつゝ瞑目するは、是れ往昔の太祖時代(リアルタ)より世の正しき老翁の皆反覆しつゝある死狀なりとす、人の將に死なん

とするや其言や善し、正理の言は正しく此時に在り、眞理にして世故に長け、經驗に富める者の口より響き來るときは、尙一層貴重なり、故に此の如き老翁の死に於ては確に美なる方面あり。

豪傑の死狀

然れども此は未だ世の常人の死に過ぎず、世には焉よりも壯快なる死あり、豪漢あり、家國の危殆に瀕するを見て、蹶然奮起し、國家が敵兵の爲に蹂躙せられんとするを見て、憤慨措く能はず、孤身一劍を磨し、同胞兄弟に先ちて、其の勇氣を奬勵し、其の氣節を鼓舞し、家國今や危急存亡の秋なり、須らく身命を鴻毛の輕きに比して、其急を救はざるべからずと、彈丸矢石の間を馳驅して、遂に其の一命を戰場に殞すに當りても、尙且其口より『一死以て家國に酬ゆ可し』の語を吐て絶息す、是れマカベー以來愛國忠君の士の取りつゝある死狀なり、快男兒の死、固より壯と謂ふ可し。

聖賢の死狀

然れども世は尙焉よりも一層偉大なる死なくんばあらず、請ふ父祖の病床、豪漢の戰場より眼を轉じて、ギリシア高等法院の列聖を視よ、一聖あり、歷代の光明を其額上に集め、德風の化育を其國民に授け、都門に正理直道を述べたるに拘らず、青年子弟を誤れりとの譏を受け、罪を得て遂に法廷に招致せらる、然れども彼固より其身に一點の疵なし、公明正大、仰て天に耻ず、俯して地に愧ざる者、亦曷ぞ法吏の顏面を恐れんや、神志悠々、顏色自若、溫乎たる其容、端然たる其威、寧ろ却て法吏を裁斷しつゝあるが如し、然れども不義の裁判遂に彼を死に處せり、其獄に在るや、門弟國法の無法なるを說て、脫獄の策を獻ず、然れども彼は國家至上主義を取りて之に從はず、其將に鴆毒を仰で死せんとするに當りてや、從容として靈性の不朽を語り、善惡の究極二致あるを說きつゝ靜に瞑目す、嗚呼是れ泰西の孔夫子ソクラテスの死なり、門弟プラトーンは千古の達筆を揮て其師の理想的死を描けり、羅馬の詩聖ホラシウスの『君子一定志、萬劫遂不移、惡王暴威下、從容我心夷』と歌へる雄嚴の詩は、直に取て以てソ氏の死に移す可し、這般の死には確かに偉大なる所あり。

嗚呼是れ人生三種の死なり、正人の死、豪漢の死、聖賢の死、皆美觀なり、敎祖以來閣巷の老父も第一種の死に準じ、マカベー以來無名の兵士も第二種の死に倒れ、ソクラテス以來佛國革命時代の君子に至るまで第三種の死に就けり、美なり、壯な

基督の死狀

り、又偉なりと謂ふ可し。

今や之を基督の死に見るに、我は此の三種の死よりも尙數層大なるを認むる者なり、蓋し彼れの死は一種特別の性質を帶べり、何ぞや、曰く先見の明、自由の撰堅忍の性即是なり。

先見の明

死は最も確にして又最も不確なるものなり、一生一死は天下の常、自然の數、人皆之を知る、早晩死せざるべからずとは萬人の口より響き出づる眞理にあらずや、故に曰ふ、死は最も確なりと、然れども其の確なる死は何時、何處に、又如何にして來るべきや、是れ誰も得て知る者なし、名醫も之を斷ずる能はず、聖賢も之を必する能はず、時に『我死近きに在り』と預測する者ありと雖、是れ眞に預測なり、斷言にはあらざるなり、又單に其の死期をのみ示せる語なり、其の死所と其の死狀とは得て知る能はず、故に曰ふ死は最も不確なりと、而して彼れ基督は如何、彼は先見の明によりて此の不確なる死の時、處、狀態をも明に預言せり、晩餐後の死と、カルワリオ山上の死と、磔刑の死とは每々彼れの口に上りたるものなり、其死は人間の自由に係れるものなりき、然れども彼は之を斷言して疑はざりき、彼がイエルサレム都城に凱歌を奏する時に當りては誰かダビドの子の磔刑に死するを預測せんや、蓋し是れ反對と反對なればなり、一大勝利と一大挫屈、誰か之を腦裏に調和せしむるを得る者ぞ、死の近づき來るや、惴々焉として恐るゝは人の常なり、

自由の選

然るに彼は之を渴望したり、血の洗禮は彼れの事業の完成にてありければなり、彼れの言に曰く、イザ、都城に登らん、人の子は敵に渡され、罵詈嘲笑鞭撻の後、磔に懸られて殺さる可しと、彼之を語り畢つて顏色依然たり、些の恐るゝ所なく悲む所なし、磔刑の死も彼れの心を亂す能はずりき、其の先見の明は其の優悠の心によりて尙一層光彩を添へたり。

一方よりは先見の明を以て不確の死を預言し、他の一方よりは自由の選を以て醜絕の死を選擇す、是れ人の爲す能はざる所なり、人は其死を知る能はざるが如く、其死を選ぶ能はざるものなり、人の弱質暗點は死の不時異變によりて益々顯る、人は死の師にあらず、死の虜なり、死は盜賊の如く入り來り、突如として生命を强奪し去るものなり、良し假りに豫め死期を明知し得るとするも、人は卑怯の死を選ぶものにあらず、磔上の死誰か之を喜ばん、志士が名譽の死を叫ぶは、吾之を

了す、軍兵の勇進邁往して戰地に倒るゝは、吾これを了す、一死以て國家に酬ゆ可しと云ふ語、吾能く之を了す、是れ實に勇士の死なり、然れども是れ人間の死なり名譽の死を取り得べくして、之を取らず、武勇の死を求め得べくして、之を求めず、却て之に反して卑怯醜劣の死を選む、奴僕皂隷の刑を選びて殺されたるが如き、是れ豈人心の常情ならんや、余の解する能はざる所正しく茲に在り、而して其の容易に解する能はざりし所に深意の存するを見るなり、言ふ勿れ、彼れの死は止むを得ざるの死なりと、死生の權は彼に在りたり、其の未だ死期の來らざるや、敵兵も之を如何ともする能はざりき、誰も我生を奪ふ能はずとは彼れの語なり、此時に當りては彼は敵の畫策を欺き、企圖を嘲り、威嚇を笑ひ、白晝群衆の中を横行濶歩したり、彼曰く、我は吾生を自ら遺棄すと、見る可し、彼れの死の全く自由の選より出でたることを、而して其の自由の選は醜絶の死に在りたるによりて、益々常人の意想外に出でたるを見るなり、基督の死豈是れ人間の死ならんや。

堅忍の性

基督の死に先見の明と自由の選の特徴ありたるは實に以上述ぶるが如し、然れども此の二個の特徴の外に尚一の理想的特徴ありたりとするは、彼が堅忍以て其死を甘受したる事是なり、吾は基督の苦難史を繙く毎に、一種異樣の感に打たれずんばあらず、彼が天父に向ひ、我父よ、此杯若し避くる能はずんば、唯父の命是れ從はんと語れるが如き、何ぞ其の謙恭從順なるや、彼が忘恩の門弟に向ひ、爾何の爲に來れるや、接吻以て人の子を敵の手に渡さんとするかと云へるが如き、何ぞ其の溫良諄厚なるや、彼は其の卑怯なる門弟等を擁護しつゝ、己を捕ふるが爲に來れる惡黨を見しとき、門弟等に向て敵に抗抵する勿れと言ふ、何ぞ其の仁愛の深きや、彼はイエルサレムの婦人に向ひ、我の爲に泣く勿れ、爾等の子孫の爲に泣く可しと敎ふ、何ぞ其の同情の切なるや、彼は讒言凌辱、酷遇虐待の下に沈默を守れり、嗚呼此の沈默、無限の威を藏せり、『基督此時默せり』の語、萬貫の力あり、彼れの刑場に引かるゝや、羊の子の如く引かれたりと云ふ、其の溫容髣髴として眼前に見ゆるが如し、彼れ磔上に懸りて、刑吏の嘲弄侮蔑を受くるや、『彼等は其の爲す所を知らざれば、之を赦し給へ』と天父に祈れり、愛敵主義の實踐躬行、是に於て乎其極に達せりと謂ふ可し、嗚呼基督の死や、考へ來れば皆敎訓ならざるはなし、ラテンの文士セネカは黃金の机に憑りて慈善の美を論せり、基督は磔柱の上に懸

りて道德の敎を垂れたり、彼れの死期の一擧一動、一語一默、皆偉大ならざるはなし。

宜なる哉彼のルーソーが基督の生死とソクラクスのそれとを比較して『若しソクラテスの死生にして賢者の死生なりと云ふを得ば、基督の死生は神の死生なりと云はざるを得ず』との斷案を下したるや、基督は眞に是れ神的偉人と稱す可し。

基督傳 終

大正元年十二月十日印刷
大正元年十二月十日發行

基督傳 壹冊 定價金壹圓五拾錢

著者　東京市日本橋區本町三丁目八番地　前田長太
發行者　東京市小石川區久堅町百〇八番地　大橋新太郎
印刷者　東京市小石川區久堅町百〇八番地　水谷景長
印刷所　博文館印刷所

著作權所有

發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館
電話 本局 銀三〇三番一六二五番一〇一八番一八 一番三二二九番三三二番三二六二〇番
振替貯金口座　東京二四〇番

海老名彈正君閲　赤司繁太郎君編

●耶蘇の聖訓

歐米思想界の現狀に通ずるものは「耶蘇の教訓」が其中心問題となれるを知らざるものなかるべしこの書上編經部は聖書自身をして此問題に答へしめたるものにして下編論部は聖書全體より、神、人、キリスト、聖靈、救濟、人間の行爲等種々なる宗教道德上の諸問題に關する教訓を撮抄したるものなり之を以て斯書やキリストの教の何たるを説明せる一大パノラマたるなり而して一般國民の爲に修養の資料たるべくして墮落せる現世を救ふに於て恰好の薬物たるを信ず乃ち敢て之を薦む

●博文館發行●

全一冊袖珍七八〇頁
上製正價金壹圓
特製正價金壹圓廿錢
總革
郵税金八錢

文學士　常盤大定君纂

●佛陀の聖訓

本書特色　第一　誰人にも一讀了解の出來る樣。成るべく平易に經文を意譯し。まゝ難解の漢字佛語などには、丁寧穩當なる註釋を平假名にて挿入せること。第二　經文の説相義類を判明ならしめ、佛陀説法の道筋を知らしめんために。上篇には阿含部の經典より。中篇には方等般若部より。下篇には法華。涅槃。華嚴部の中より。金玉の教訓。痛快なる具體的實例等を摘錄せること。その分類の方法また著者の意を用ひたるものにして。佛教は心を本と爲すゆへ。最初に心の狀態を知らしめ。是より細分して巧に修行の方規處世の要訓など知らしめ且つ立脚地の異なる小乘と大乘の。教訓を別々に集錄し。各々その特色を發揮せしめたるなど普通佛教の聖典として。最も適當なり。

上製正價金八拾錢
特製
總革
郵税金壹圓八錢

全一冊袖珍七七〇頁

●博文館發行●

文學士　藤谷深勵君著

●基督教史

本書は　基督教發生以來二千年間に亙れる基督教會の歴史的變遷を叙述せるものなり。即ち筆を第一世紀に起し十九世紀に至るまで章を分つ十九、此間に亙れる布教事業に起れる種々なる波瀾と現象とは逐一是れを網羅したり。而して本書の特色とする所は是れを叙するに當つて毫も理論を交へず極めて公平無私に事實の陳述を試みたるに在り。材料洽博にして考覈の正確なるに在り。從來此種の著世に鮮かならざれども其の神學的研究の缺陷を補ひ又一般基督研究者に資益する頗る大なるものあるは蓋し本書の如きは稀なるべし

並製正價四拾錢
特製正價五拾五錢
郵税金八錢

全一冊菊判美本紙數二七三頁

●博文館發行●

彦根第三佛教中學校教頭文學士　石原即聞君著

●日本佛教史

佛教の初めて我國に傳來せしは今より一千三百五十二年の昔の事なり、其間時に弊害なきにあらざりしも我國の精神的并に物質的の文明に貢献せし處實に尠しとせず、斯く我國の文明に多大の關係を有する一大宗教に傳來起原若くは教義の研究に心を用ゐるは少くともらずとや、其多くは專門家の手に成り、一般人士の解しがたきもの多し、然るに本書は此缺陷を補ひあらゆる諸書を參酌して沿革的系統をして最も平易に叙述せられたれば日本佛教の歴史を知らんとするの人は無比の良書なり。

上製正價金五拾五錢
並製正價金四拾錢
郵税金八錢

全一冊菊判美本紙數三〇〇頁

文學士　蜷川龍夫君著

●日本高僧の人格

活ける信念に湧し修養の奥秘を求むるの聲今や天下に洽く其これを求むるや唯だ理論的説明を以て足れりとせず短刀直入靈界偉人の胸臆を叩いて活ける光明と新しき生命とに接せんとす然れども憾むらくは我が邦建國以來國民の精神界を支配陶冶し來りし佛教の祖師高僧聖人の傳記叙述は概ね靈怪の假裝を被り奇蹟惟談神秘的口吻を以て飾られ未だ正確なる史的考察に基きてその精神生活とその人格の至大とを仰視せしむるに足るものなきが如し本書は著者獨得の史的炯眼と多年研鑽の歸結とを以て我が佛教史上第一流に任ずべき二十有餘の祖師聖人を我が民族思想上の大立物となし主として其人格の特色と各個獨創の修養法を詳述し且つその時勢と四圍との關係を詳論し次で精神生活の狀態をも最も詳密に最も平易に發揮したるものにして一讀古聖人の精神修養の心術と人物養生の秘訣とを窺知するに足るものあり蓋し本書に依りて我思想界多年の渇望を滿すものあらん

全一冊　菊判洋裝　紙數二三〇頁
正價金四拾錢
郵税金六錢

博文館發行

●基督觀

宮崎虎之助君著

全一冊菊判美本　紙數二五六頁　正價金四拾錢　郵税金八錢

●佛教各宗　高僧實傳

博文館編輯局編

全一冊四六判上製　紙數一〇五〇頁　正價金七拾五錢　小包料金拾貳錢

●佛教各宗　續高僧實傳

江見水蔭君著

全一冊四六判上製　一〇二〇頁　正價金七拾五錢　小包料金拾貳錢

東京高等師範學校長　加納治五郎君　文學博士　三宅米吉君　文學博士　服部宇之吉君
文學博士　男爵　加藤弘之君　文學博士　重野安繹君　文學博士　三島毅君
文學博士　井上哲次郎君　男爵　澁澤榮一君　法學博士　男爵　阪谷芳郎君
文學博士　星野恒君　文學博士　三宅雄二郎君　高師教授　文大講師　吉田靜致君　故東京女高師教授　南摩綱紀君　（講述）

●諸名家孔子觀

孔子祭典會編　（口繪　孔子像（コロタイプ版）外にコロタイプ及光澤寫眞版九頁）

今現代の諸名家此大聖人を追頌講述して、夫子の盛德益〻躍如としてこゝにあらはる。本書内容の如何に見るべきものあるかは講述者の學德名望是れを證して餘りあり、讀者以て修養の資とせられなば幸甚なり。

附　先哲遺墨
聖堂略志

全一冊和裝菊判　紙數三百三十頁　正價金八拾錢　郵税金六錢

●美術上の釋迦

文學士　堀謙德君編

全一冊菊判洋裝上製　紙數三〇〇頁　正價金壹圓貳拾錢　郵税金拾貳錢

●美の宗教

文學博士　姉崎正治君著

全一冊四六判上製　紙數四九〇頁　正價金壹圓　郵税金入錢

●宗教學

文學博士　加藤玄智君著

全一冊菊判上製　紙數九五〇頁　正價金貳圓五拾錢　小包料金拾六錢

●發行所　博文館

博文館發行

北越新報社長 今泉鐸次郎君著 ●河井繼之助 全一冊菊判上製 紙數四百六十六頁 正價金壹圓五拾錢 小包料金拾貳錢

岡本鷗園君 林有隣君共編 ●名士の苦學 全一冊菊判 紙數百五十二頁 正價金貳拾五錢 郵稅金四錢

高橋光威君著 ●貝島太郎翁の成功談 炭鑛王 全一冊菊判美本 紙數百五十八頁 正價金貳拾五錢 郵稅金六錢

春秋居士君著 ●河村瑞賢 全一冊四六判 紙數三三〇頁 正價金六拾錢 郵稅金六錢

文學博士 前田慧雲君述 ●親鸞聖人 全一冊菊判美本 紙數百二十五頁 正價金貳拾五錢 郵稅金四錢

豐田小八郎君著 ●但馬聖人 全一冊菊判美本 紙數百四十八頁 正價金參拾五錢 郵稅金四錢

中央新聞記者 伊村江東君著 ●活動せる實業界の婦人 全一冊菊判美本 紙數二百五十頁 正價金參拾八錢 郵稅金六錢

伊藤痴遊君講演 ●明治元勳 井上侯實傳 全一冊四六判美本 紙數二百五十頁 正價金參拾五錢 郵稅金六錢

前田雪子女史譯 佛國モリスブロック著 ●偉人の妻 全一冊和裝菊判 紙數三百頁 正價金四拾五錢 郵稅金八錢

前田越嶺君譯 ●偉人の母 全一冊洋裝菊判 紙數一百八頁 正價金三拾八錢 郵稅金六錢

傳記書類一覽

前田越嶺君著 ●世界名君傳 全一冊三六判上製 紙數二百八十八頁 正價金貳拾八錢 郵稅金四錢

同君著 ●世界名臣傳 全一冊三六判美本 紙數二百八十四頁 正價金貳拾八錢 郵稅金四錢

川崎紫山君著 ●維新三傑 全一冊四六判 紙數百三十頁 正價金拾貳錢 郵稅金四錢

文學士 東海林辰三郎君著 ●名將逸話 時代の武士 全一冊菊判洋裝 紙數六百九十頁 正價金壹圓拾錢 郵稅金拾貳錢

佐藤顯理君編 ●日本外史の先覺 堀田閣老傳 全一冊菊判美本 紙數二百三十頁 正價金壹圓貳拾錢 郵稅金八錢

男爵 佐藤進君編 ●水戸義公傳 全一冊菊判美本 紙數三百頁 正價金壹圓六拾錢 小包料金貳拾錢

土屋元作君著 ●八面鋒 一名朝野政治家 全一冊 紙數三百頁 正價金壹圓 郵稅金八錢

海軍省教育本部藏版 ●英國水師提督ネルソン傳 全一冊菊判上製 紙數千三百二十頁 正價金壹圓六拾錢 小包料金拾六錢

榎本秋村君著 ●創見功業 偉人の本領 全一冊菊判上製 紙數二百八十頁 正價金六拾錢 小包料金拾貳錢

ウイリヤム、アダム
スプラウン博士著

今泉眞幸君
シドニー、ギユリツク君　共譯

●基督教要義

（全一冊）

全一冊　洋裝菊判上製
紙數七〇〇頁
正價金壹圓五拾錢
小包料金拾貳錢

本書は譯者ギユリツク氏及『幾多の組織神學書中の白眉』として珍重せられ『基督教の要義を科學的組織的に論明して見事に成功した稀有の良書』として精選せられたるものにして、叙述の簡潔なる事、其説明の巧妙なる事、其形式の斬新なる事、其材料の豐富なる事、其の見解の公平なる事、其批評的眼光の透明なる事などに於いて、堂々一大特色を發揮せり。譯文は、ギユリツク氏が一字一句を漏らさず逐一原書と對照して精密に校正せられたれば、其正確なるは言ふ迄もなし。且つ七百頁の大附錄と數葉の圖表とを加へて本文の歴史的背景を明かにし、欄外には一々本文の要點を指摘して以て諒意記憶に便ならしめ、難解の所には註釋を挿入するなど、用意頗る周到、故に高價の原書を用ゐるよりも更に幾割の利益あり。

基督教の諸教理を組織的に研究せむと欲する人は決して此書を見遁すべからざる也。

●博文館發行●

324
327

終